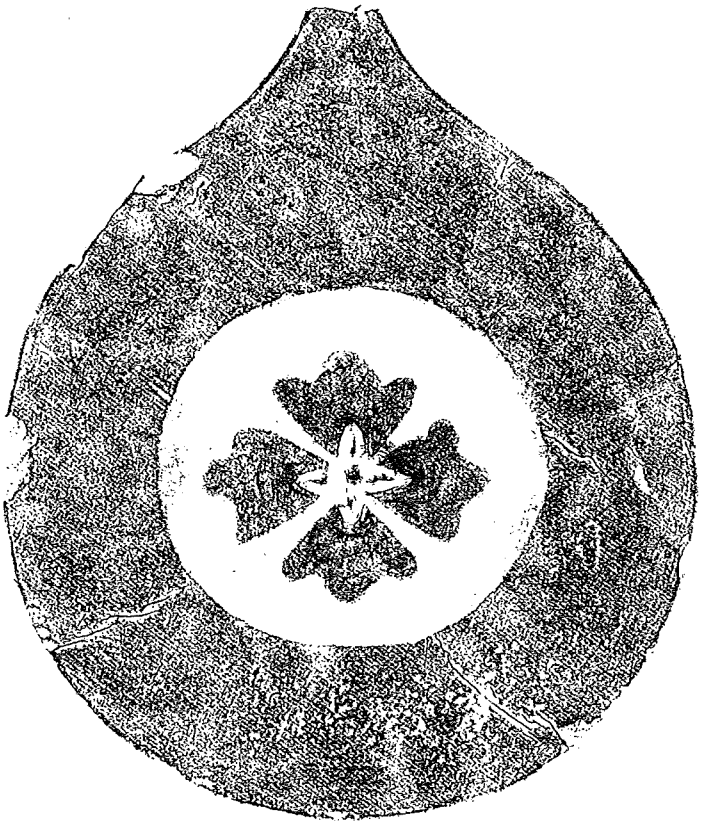
長崎県文化財調査報告書第163集

石　田　城　跡　Ⅱ



2001

長崎県教育委員会

五島家の家紋（唐草菱草文様）

長崎県文化財調査報告書第163集

石　田　城　跡　Ⅱ

2001

長崎県教育委員会

発刊にあたって

本書は，平成９年度の五島高校校舎改築工事，平成１０年度の五島高校体育館改築工事，平成11年度五島高校体育館改築（クラブハウス）工事に伴い，３年間にわたって実施しました石田城跡の発掘調査報告書です。

石田城（福江城）は，五島福江島の中心石田（福江市福江町）に嘉永２年（1849）に築城が始まり文久３年（1863）に完成した，江戸幕府下における五島氏の居城です。廃藩置県後，城は一部桜門を残すのみで，本丸跡には現在県立五島高等学校が建てられています。

今回の発掘調査により，中仕切門跡，眼鏡橋門跡，御築山門跡，大手門の石垣遺構，建物跡や堀・石蔵跡の遺構等を検出できたことで，石田城遺構の一部が判明した他，城に伴う数多くの近世陶磁器，瓦，寛永通宝などの貴重な資料を得ることができたのは大きな成果でした。

最後に御協力いただいた関係者の皆様にお礼を申し上げるとともに，今回石田城で行われた発掘調査成果が学術資料として活用され，文化財の愛護に役立つことを念じて発刊のあいさつといたします。

平成１３年３月３１日

長崎県教育委員会教育長

木村　道夫

例　　言

1．本書は，県立五島高校及びクラブハウスの全面改修に伴う石田城跡発掘調査報告書である。
2．石田城跡は，長崎県福江市福江町字東町7番地に所在する。
3．発掘調査は長崎県教育委員会が主体で実施した。
4．調査担当者

長崎県教育庁文化課

平成９年度

係　長　（副参事）	藤田　和裕	（故人）
主任文化財保護主事	町田　利幸	（現長崎県教育庁　原の辻遺跡調査事務所）
文化財保護主事	宇土　靖之	（現有明町総合文化会館「グリーンウェーブ」）
文化財調査員	永嶋　豊	（現青森県教育委員会）

平成10年度（１次調査）

主任文化財保護主事	町田　利辛	
文化財保護主事	大浦　雅宏	

平成10年度（２次調査）

主任文化財保護主事	町田　利幸	
文化財保護主事	川道　寛	（現県立長崎西高等学校）
文化財調査員	荒木　伸也	（現有家町教育委員会）

平成11年度

主任文化財保護主事	町田　利辛	
文化財調査員	斉藤　いづみ	

5．本書の遺構・遺物の実測及び製図は文化課で行った。
6．本書の執筆はⅠ・Ⅱを大浦がⅢ～Ⅷを町田が担当した。
7．本書の編集は斉藤による。

本　文　目　次

Ⅰ．地理的環境 …… 1
Ⅱ．歴史的環境 …… 3
Ⅲ．調査の経緯 …… 6
Ⅳ．平成９年度調査 …… 10
Ⅴ．平成10年度１次調査 …… 23
Ⅵ．平成10年度２次調査 …… 34
Ⅶ．平成11年度調査 …… 37
Ⅷ．まとめ …… 47

表　目　次

表１　石田城築城までの対外関係略年表 …… 4
表２　福江市内遺跡一覧 …… 5

挿　図　目　次

第１図　石田城跡位置図 …… 2
第２図　石田城跡復原図 …… 6
第３図　平成9年度・10年度・11年度調査配置図 …… 8
第４図　平成9年度調査配置図 …… 10
第５図　御築山門跡・中仕切門跡・土層図 …… 11
第６図　御築山門跡 …… 12
第７図　めがね橋門跡出土遺物① …… 13
第８図　中仕切門跡 …… 14
第９図　本丸跡内郭石垣・石敷 …… 15
第10図　大手門跡 …… 16
第11図　内堀跡石垣 …… 17
第12図　御築山門跡出土遺物① …… 18
第13図　御築山門跡出土遺物② …… 19
第14図　御築山門跡出土遺物③ …… 20
第15図　御築山門跡出土遺物④ …… 20
第16図　めがね橋門跡出土遺物② …… 21
第17図　めがね橋門跡出土遺物③ …… 22
第18図　大手門跡出土遺物① …… 22
第19図　大手門跡出土遺物② …… 23
第20図　平成10年度調査範囲・土層図 …… 24
第21図　内堀石垣跡① …… 25・26
第22図　内堀石垣跡② …… 28
第23図　内堀内出土遺物① …… 29
第24図　内堀内出土遺物② …… 30
第25図　内堀内出土遺物③ …… 31
第26図　内堀内出土遺物④ …… 32
第27図　内堀内出土遺物⑤ …… 33
第28図　平成10年度2次調査配置・土層・遺構図 …… 35
第29図　本丸裏込石垣実測図 …… 36

第30図　2次調査出土遺物①　……　36
第31図　平成11年度調査配置図　……　37
第32図　平成11年度調査土層・遺構実測図　……　39
第33図　平成11年度出土遺物①　……　41
第34図　平成11年度出土遺物②　……　43
第35図　平成11年度出土遺物③　……　44
第36図　平成11年度出土遺物④　……　46
第37図　平成11年度出土遺物⑤　……　47
第38図　平成11年度出土遺物⑥　……　47

図　版　目　次

図版1　平成9年度調査①　……　51
図版2　平成9年度調査②　……　52
図版3　平成9年度調査③　……　53
図版4　平成9年度調査④　……　54
図版5　平成9年度調査⑤　……　55
図版6　平成10年度調査①　……　56
図版7　平成10年度調査②　……　57
図版8　平成11年度調査①　……　58
図版9　平成9年度調査出土遺物①　……　59
図版10　平成9年度調査出土遺物②　……　60
図版11　平成10年度調査出土遺物①　……　61
図版12　平成10年度調査出土遺物②　……　62
図版13　平成11年度調査出土遺物①　……　63
図版14　平成11年度調査出土遺物②　……　64

本丸
二郎
三郎
北邊
侍屋鋪
北邊
侍屋鋪
北邊
侍屋鋪
町家
町家

Ⅰ　地理的環境

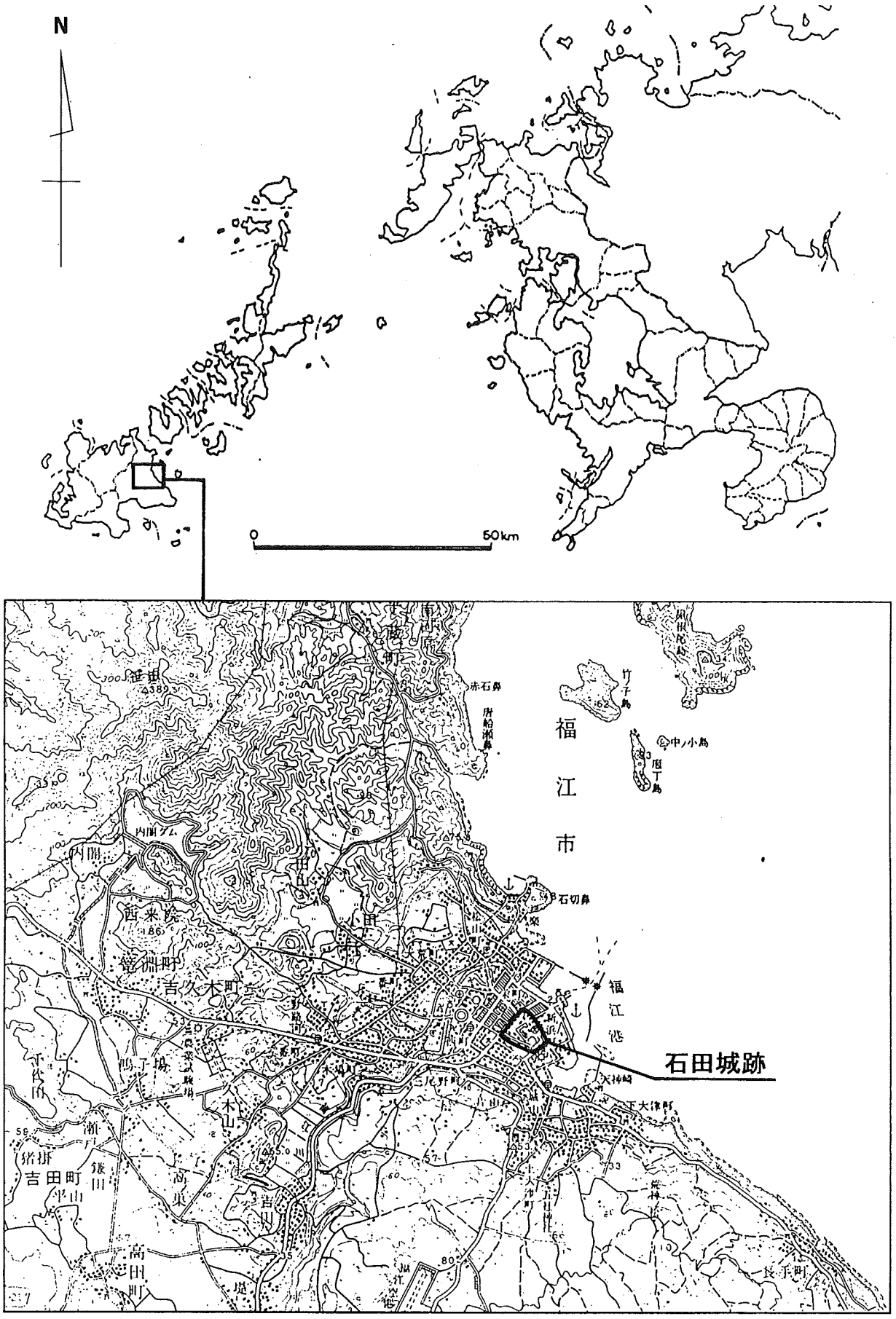
五島列島は，県本土の西約100kmに位置し，北東から南西へ約150m（男女群島を含む）にわたって分布する列島である。主な島は北から中通島・若松島・奈留島・久賀島・福江島の五島で常住島18島，無人島100余島からなり，面積は約638㎢である。奈留島以北を上五島，久賀島以南を下五島と呼んでおり，行政的には福江市と南松浦郡の１市10町がある。地質は，大部分が五島層群といわれる古第三紀層からなり，地形は火山群を伴う壮年期の地塁山地が，沈降や断層作用で形成されたため複雑である。全体的に山が直接海に落ち込む地形が多いため平地が乏しく，海岸は無数の江津をなしリアス式海岸や溺れ谷が発達している。1965年，五島列島のほぼ全域にわたって西海国立公園に指定され，島々・海岸・火山地形など自然の景観のすばらしいところが数多くある。また藩政時代やキリシタン関係の史跡，古い文化を伝承した行事や民踊が残るなど歴史的な観光資源も豊富である。気候は対馬海流の影響で温暖な海洋性気候となっている。降水量は年間2,000mmを越え全国的にも多い方であるが，河川の多くが急で短いため干ばつの記録も多く，降水量が少ない年は農作物への影響も大きくなっている。

本遺跡の所在する福江島は，この五島列島の南端に位置する列島中最大の島である。島内は福江市・富江町・岐宿町・三井楽町・玉之浦町の１市４町からなり，農業（養蚕・葉タバコ・五島牛）と漁業（沿岸・養殖）の島である。福江島北部の海岸線は岬や入江等の屈曲に富み，戸岐・奥浦の両湾は典型的なリアス式海岸で溺れ谷が発達している。中央部には山内盆地を囲む古第三紀層の山地（最高は父ヶ岳の461m）があり，北西にアスピーテの京の岳，南部は鬼岳・火岳・中岳のホマーテの一群と箕岳・臼岳のホマーテの一群からなる鬼岳火山群となっている。また，その周囲には溶岩台地が緩やかなスロープ状の丘陵を形成しており，その周辺の海岸から北部山岳地帯に伸びる中間には，両方の山間部に源を発する一里川が東に流れ，この流域に沿って広大な平野が東西に開け，肥沃な農地を形成している。

石田城跡は，福江市東部の市街地の中心部に所在する。福江川の東南側にあたり，溶岩台地の北端より北に約600m，福江港より南西に300mの位置にあり，周囲は小規模な平野となっている。石田城はもともとは東南北の三方向を海に囲まれ，中心部にわずかな高まりをもった岬に構築された城で，我が国で最も新しく，唯一の海城といわれている。城域の西側には五島邸が今も残っており，古い木立と共に往時の城の様子をしのばせるが，五島高校となっている本丸跡や旅宿が営まれている大手門付近は，ことに変貌が著しい。現在は周辺は埋め立てられ住宅や商店・発電所などが建てられている。

【参考文献】

福江市　1995「福江市史」上巻
長崎新聞社　1984「長崎県大百科事典」
角川書店　1987「角川地名大辞典　42長崎県」
長崎県教育委員会　1997「石田城跡」長崎県文化財報告書第139集


N
0
50km
福
江
市
石田城跡
福江港
赤石鼻
唐船瀬鼻
石切鼻
ケヅ子島
中ノ小島
厄丁島
内開
西米陵
乾洲町
吉久木町
鳥子場
木山
猪掛
吉田町
平山
鎌田
高田町
堤
吉川
尾野町
大津町
下大津町
天神崎
長手町

第１図　石田城跡位置図

Ⅱ　歴史的環境

石田城は福江島の中心地，石田の地に江戸期末に構築された五島氏の居城である。五島氏のもとは肥前国松浦郡宇野御厨宇久島を本拠とした中世豪族の宇久氏である。宇久氏は鎌倉時代から南北朝時代の時期，松浦党化して上五島一円に勢力を伸長し，対朝鮮，対明貿易にも活躍した。永徳３（1383）年，８代宇久覚が福江島の岐宿城嶽に城塞を築き五島平定にかかるが，当時の宇久氏の勢力は全五島を支配するまでにはいたらず，貞方氏・青方氏等その他の勢力が割拠しており統一は困難を極めた。その後，盛定の時に福江川（江川）に臨む地に大永６（1526）年江川城を築き，福江を本拠として勢力を拡大した。純玄の時代，豊臣秀吉の九州統一の後に本領を安堵され，また文禄の役出兵に際し宇久姓を五島姓に改め，近世大名として明治維新まで及んだ。五島藩の主たる所領は，福江島・久賀島・奈留島・宇久島と中通島の南西部一帯であった。

五島氏は江戸初期以来陣屋住まいであった。慶長19（1614）年江川城が全焼し，寛永15（1638）年福江の石田浜に陣屋を設けたが，その後長い間築城が幕府に認められなかったためである。大名として居城を持つことは悲願であったが，小藩のため幕府の許可を得ることは大変難しいことであった。しかし，我が国最西部の島嶼を基盤とする五島藩は，その近海に異国船の出没がきわめて頻繁であり，早くから海防の重要性を痛感していた。寛永18（1641）年には領内７箇所に遠見番所を設け，ついで正保４（1647）年にはこれに４箇所増設をしている。また幕府から異国船警備番役を課され，代わりに参勤交代を免除されており，その後1800年代に入り，異国船防禦つまり外圧への対処を理由として数度にわたり幕府へ築城を請願している。文化３（1806）年と文政３（1820）年の請願はいずれも許可を得ることができなかった。しかし，江戸・長崎周辺への外国船の来航が頻繁になり，また幕府にもたらされる欧米列強諸国の情報は確実に五島藩の悲願である築城への追い風となっていった。そしてついに幕府は，最初の請願から実に43年後の嘉永２（1849）年築城の許可を与えている。理由は言うまでもなく外圧への対応である。右に石田城築城までの対外関係の主な出来事を，略年表で示しておきたい。（表１）

城の基本構造は本丸・二の丸及び付属の曲輪からなり，これに内堀・外堀がめぐらされている。城の中心をなす本丸は100ｍ×95ｍでほぼ正方形に近く，その四周を内堀が巡っている。その外側に広義の二の丸を配し，更にその外周を外堀が巡る。外堀を隔てた北側にいわゆる三の丸にあたる小規模な曲輪を置いている。城全体はほぼ三角形に近く，東西約350ｍ×南北約310ｍの規模を有する。城の南北及び東が海に面した海城で，築城が海防を目的としていることから，石火矢台場が各曲輪の隅の要所に配置されているのが特徴である。

江戸時代の一番最後に構築され，永年の請願の末ようやく完成した石田城であったが，廃藩置県後の明治５（1872）年，陸軍省の所管となり，やがて城は一部楼門のみを残して，完成よりわずか９年にして解体されている。その後，本丸跡には明治33（1900）年県立五島中学校（現五島高校）が建てられ現在に至っている。

石田城築城までの対外関係略年表（表１）

年　代	主な出来事
寛永18年(1641)	**五島藩領内７箇所に遠見番所を設ける**
正保４年(1647)	**五島藩領内に遠見番所をさらに４箇所増設**
寛政４年(1792)	ラックスマン（ロシア）が根室に来航
文化元年(1804)	ロシア使節レザノフ，通商を求め長崎に来航したが幕府は拒否
文化３年(1806)	**異国船防禦を理由として藩主五島盛運（もりゆき）は幕府に築城を願い出るが，許可を得られず**
文化５年(1808)	フェートン号事件
文化11年(1814)	イギリス船長崎来航
文化14年(1817)	イギリス船浦賀来航
文政３年(1820)	浦賀奉行に相模湾沿岸警備令
	藩主五島盛繁は幕府に再度築城願いを出すが，これも許可を得られず
文政８年(1825)	異国船打払令
天保８年(1837)	モリソン号事件（通商を求め浦賀に来航した　アメリカ船モリソン号に砲撃）
天保13年(1842)	アヘン戦争で清国がイギリスに敗北
天保15年(1844)	オランダ軍艦パレンバン号来航事件
弘化３年(1846)	アメリカ東インド艦隊司令官ビルド率いる２隻の軍艦が通商を求め浦賀に来航
嘉永２年(1849)	イギリス船マリナー号が江戸湾にあらわれ，測量を実施
	幕府は石田城の築城を許可・石田城着工
嘉永６年(1853)	ペリー（アメリカ）が浦賀に来航・プゥチャーチン（ロシア）長崎に来航
文久元年(1861)	ロシア軍艦が対馬に来航
文久３年(1863)	**石田城完成**

【参考文献】

福江市　1995「福江市史」　上巻
長崎新聞社　1984「長崎県大百科事典」
角川書店　1987「角川地名辞典　42長崎県」
小学館　1993「日本歴史館」
長崎県教育委員会　1997「石田城跡」　長崎県文化財調査報告書第139集
長崎県教育委員会　1998「大浜遺跡」　長崎県文化財調査報告書第141集
福江市教育委員会　1992「石田城五島氏庭園調査整備報告書」　福江市文化財調査報告書第６集

福江市内遺跡一覧

番号	遺跡名称	所在地	種別	時代
1	堂崎遺跡	堂崎町堂崎教会周辺	遺物包含地	縄・弥
2	田ノ浦遺跡	田ノ浦町浦平	遺物包含地	縄文
3	浜脇遺跡	田ノ浦町浜脇	遺物包含地	縄文
4	大開遺跡	久賀町大開字二ツ土井	遺物包含地	縄文
5	高良遺跡	本窯町高良	遺物包含地	縄文
6	首ノ浦遺跡	椛島町首ノ浦	遺物包含地	縄文
7	浜泊遺跡	浜泊町	遺物包含地	縄文
8	奥の木場道上遺跡	平蔵町奥の木場	遺物包含地	縄文
9	六方遺跡	平蔵町六方	遺物包含地	縄文
10	潮満越遺跡	大荒町潮満越	遺物包含地	
11	曲坂遺跡	松山町曲坂	遺物包含地	縄文
12	松山遺跡	松山町曲坂	遺物包含地	先・縄
13	北松山遺跡	北松山町	遺物包含地	縄文
14	戸楽Ａ遺跡	松山町戸楽	遺物包含地	
15	戸楽Ｂ遺跡	松山町戸楽	遺物包含地	
16	下屋敷遺跡	大荒町小山田・下屋敷	遺物包含地	縄文
17	瀬戸遺跡	吉田町瀬戸	遺物包含地	縄文
18	轡口坂遺跡	吉田町轡口先坂	遺物包含地	先・縄・古
19	宗念寺遺跡	末広町宗念寺	遺物包含地	
20	開田遺跡	福江町開田	遺物包含地	
21	崎防遺跡	福江町崎防	遺物包含地	
22	鷲の浦遺跡	福江町崎防鷲ノ浦	遺物包含地	
23	上野町遺跡	福江町上野町	遺物包含地	
24	天神社遺跡	下大津町天神社	遺物包含地	
25	水の窪遺跡	下大津町水の窪	遺物包含地	縄・弥
26	住吉神社遺跡	上大津町住吉神社	遺物包含地	
27	一本木遺跡	下大津町一本木仏坂	遺物包含地	弥生
28	江湖貝塚	下大津町江湖	貝塚	縄文
29	橘遺跡	上大津町五社神社	遺物包含地	弥生
30	五社の上遺跡	上大津町五社の上	遺物包含地	先・縄・古
31	荒神社遺跡	上大津町	墳墓	
32	長手遺跡	長手町	遺物包含地	先・縄
33	**石田城跡**	**福江町15**	**城跡**	**近世**
34	六角井	唐人町844	井戸	中世
35	福江武家屋敷跡	福江町197番地1	武家屋敷跡	中世
36	常灯鼻	福江町大波止	防波堤	近世
37	荒神岳嘯園	吉久木町荒神岳	館跡	近世
38	南河原軽成院跡	平蔵町南河原	寺屋敷跡	近世
39	明人堂	唐人町	廟堂	中世
40	五島家墓地	三尾野町大円寺	墓地	近世
41	外輪遺跡	増田町外輪	遺物包含地	古墳
42	外輪古墳	増田町外輪	遺物包含地	古墳
43	浜野西野遺跡	浜町西野	遺物包含地	先・縄
44	中島遺跡	増田町中島	遺物包含地	弥生
45	元享寺遺跡	堂園元享寺跡	遺物包含地・寺跡	縄・中
46	大浜遺跡	大浜町浜郷	遺物包含地	弥生・古
47	堂園遺跡	浜町	遺物包含地	縄・弥
48	野々切遺跡	野々切町	遺物包含地	
49	皆塚遺跡	上崎山町皆塚	遺物包含地	弥生
50	向郷遺跡	向町	遺物包含地	
51	白浜貝塚	向町	遺物包含地	縄・弥
52	崎山渡船場上遺跡	下崎山町白浜崎山	遺物包含地	
53	白浜浦遺跡	下崎山町白浜浦	遺物包含地	縄・弥
54	崎山積石塚	赤島町大板部島	積石塚	古墳
55	赤島遺跡	赤島町412，413他	遺物包含地	縄文
56	大板部洞窟遺跡	赤島町大板部1番地及び2番地	貝塚	縄文
57	泊崎遺跡	黄島町泊崎海岸一帯	遺物包含地	縄文

Ⅲ　調査の経緯

平成９年度調査

１．平成９年11月６日に県財務課より五島高校建設工事中に石垣遺構を新たに発見したため現地での確認をお願いしたいとの連絡があった。

このため，平成９年11月10日～11月11日に於いて石垣遺構の取扱いについての協議を行った。

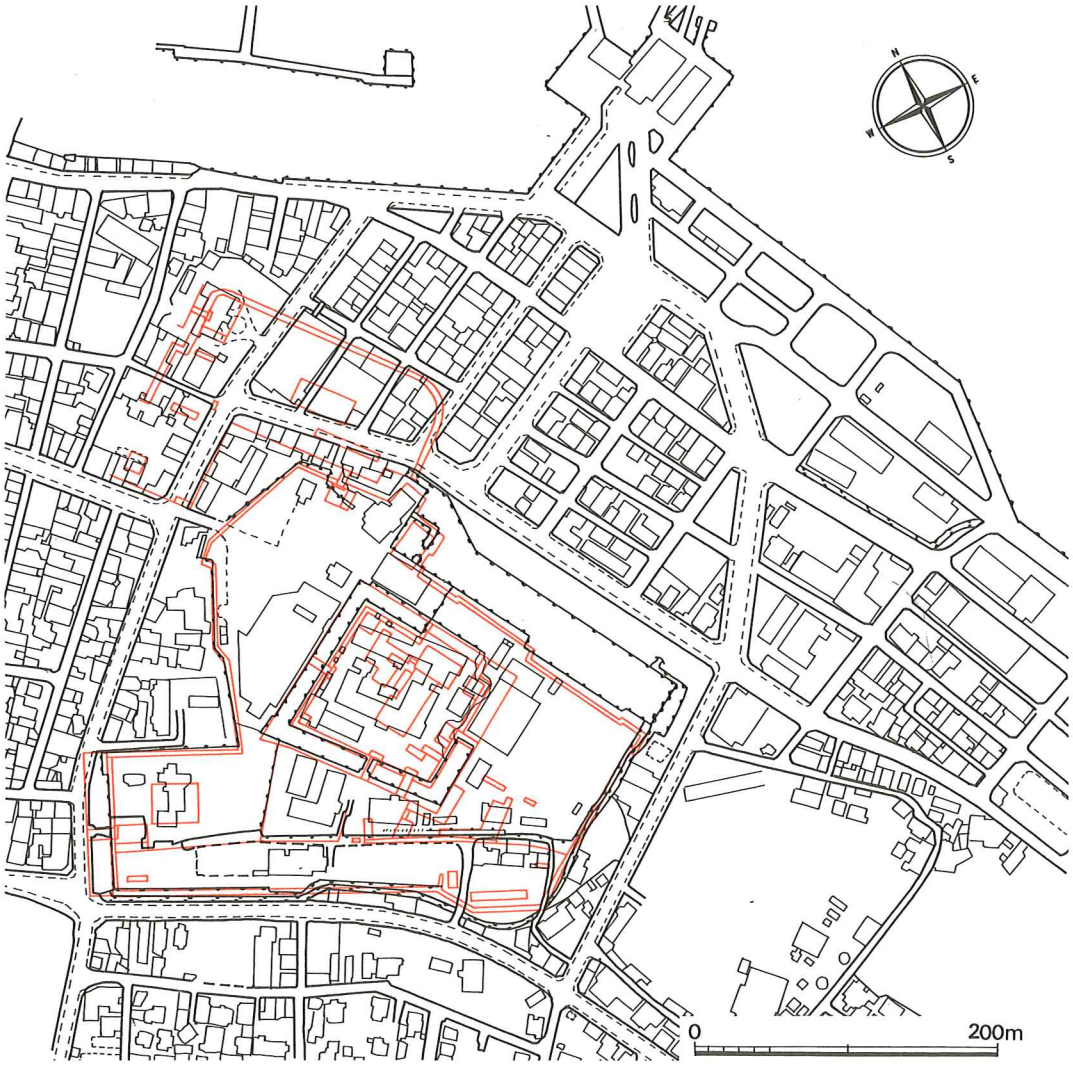
現地は，石田城本丸跡のほぼ全域を掘削し校舎の基礎工事を完了していた。石垣は，基礎工事周囲の汚水，配電管を埋設設置するためのコンクリートボックス坑を掘削中に発見された遺構である。

石垣を確認した位置は，中仕切門跡・めがね橋門跡・御築山門跡の三箇所に認めらた。

石垣遺構について，現状保存のために設計変更が可能であるか確認するものの，汚水・雨水管は直線に流さないと管が詰まって排水の用をなさなくなるとの見解であった。

さらに，現在の工事に加えて大手門跡・会計跡まで配管を延ばす計画であった。

工事の計画変更ができない以上削平を受ける部分については，記録保存で対応するしか対策がな



第２図　石田城跡復元図

く，やむなく調査の実施となった。

2．平成９年11月17日～12月19日の間に高校改築に関する各種埋設工事の本調査を実施した。

調査は，工事行程に沿って①中仕切門跡の石垣実測。②めがね橋門跡の石垣及び暗渠排水溝の実測。③御築山門跡の石垣及び暗渠排水溝の実測。④大手門跡の石垣及び礎石の実測。⑤内堀石垣の実測を実施した。

平成10年度調査

1．平成10年10月26日体育館全面改築の実施にあたり，旧体育館基礎解体の立会調査を実施し基礎部分以下に石田城内掘の石垣が長さ約40m，高さ約２m存在することを確認した。

工事着工の時期は，平成１１年１月からの計画ですでに工事入札も確定しており工期の延長が困難ななかで調査を行わなければならない状況であった。また，体育館に付属する渡り廊下，スロープについては，内掘調査終了後に実施する行程とした。

2．平成10年11月26日～12月18日の間に体育館建設予定地の本調査を実施した。

石垣の実測については，調査日程の短縮のために写真測量を行っている。

3．平成10年12月14日～12月25日の間に渡り廊下及びスロープの基礎工事部分についての本調査を実施した。

遺構は，県指定石垣裏込石，柱穴，石田城築城以前の石垣を検出している。

平成11年度調査

1．平成11年６月21日～６月29日の間にクラブハウス建設に伴う本調査を実施した。

遺構は，明治期の絵図に記された石蔵部分にあたる石列を確認し実測を行った。

2．平成12年３月６日に五島高校環境整備工事に伴う石田城跡立会調査を実施。

環境整備事業は，平成11年度にクラブハウス全面改築，武道場解体を行い通路，排水．外灯等の整備を計画実施してる。平成12年度は排水溝，通路，電気配線の地下埋設等の計画が予定されている。

現地の工事立会は，①電気ケーブル埋設，②外灯設置位置，③通路改修箇所，④排水溝設置箇所及び平成12年度工事計画箇所①通路改修，②排水溝設置箇所，③電気ケーブル埋設箇所等について確認を行った。

平成11年度環境整備工事立会内容以下のとおり行った。

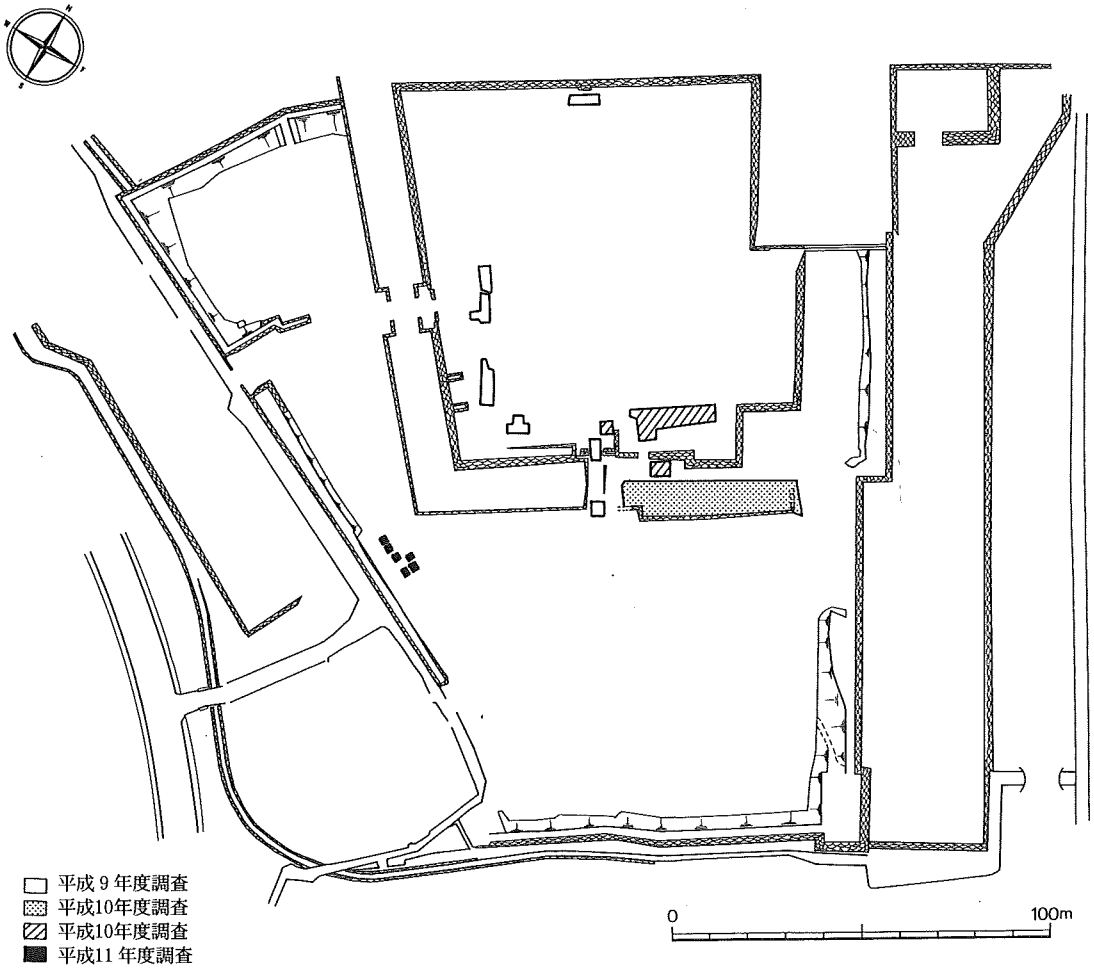
①電気ケーブル埋設

平成９年度に調査を実施した「めがね橋門跡」の南側袖石垣（約５m残る）を横断して電気ケーブルの埋設工事を行い石垣２段分が取り外されていた。石垣は，現状に復する指示を行う。

また，ケーブル敷設作業を中仕切門の北側袖石垣まで行うため掘削探度を地表下約40cmmで止めるよう指示を行う。

②外灯設置位置

中仕切門の地下石垣にかかる部分に設置を計画していたため，石垣遺構に影響をあたえない部



第３図　平成９年度・10年度・11年度調査配置図

分に設置を行うよう計画変更の指示を行う。

③通路改修

城内への入口門の一つで現在は，五島高校内の出入口となっている。この裏門から南側のグラウンド側にかけての通路及び大手門跡から本丸に至る通路の改修部分である。

確認した遺構は，裏門の礎石４基がありこれについては扱わないよう指示をする。

また，大手門跡の両側にも礎石が地下にあり工事に際しては慎重に行うよう指示し，本丸跡と大手門跡の境の石垣については掘削を行わず盛土で通路とすることを確認した。

④排水溝設置個所

グラウンド部分と大手門跡部分に設置予定としていた。

平成11年度は，内堀に平行に掘削し，さらに10m程度グラウンド側へ掘削を行っている。

掘削幅は約２m，深さ約70cmの側溝工事を行っている。今年度工事に関しては支障ないと思われる。

大手門跡部分の側溝設置については，県指定石垣部分にあたり工事の変更で内堀石垣前部に設置するよう要請し了承を得た。

平成12年度環境整備工事については以下の問題点について協議を行った。

①通路改修

本丸跡南東角側の石垣部分及び内堀の石垣部分にあたる箇所に通路を設置する計画を予定している。

本丸跡の石垣は県指定石垣部分にあたる箇所であり，いずれにしても工事を行う場合は事前に保存等の協議を行う必要がある。

②排水溝設置個所

平成11年度からの延長がグラウンド方向へ2本延びる。平成12年度設置個所は，平成7年度調査の結果〆切門の遺構を確認しており，設計変更できない場合は事前に発掘調査を行う必要がある。工事面積23m×2m＝46㎡

③電気ケーブル埋設

本丸跡北側の御築山門部分に電気ケーブルを埋設する計画で埋設深度15㎝との報告から地下遺構に影響はないものと考えられる。

平成11年度工事立会

Ⅳ　平成９年度調査

（所在地：長崎県福江市福江町字東町７番）

１調査の概要（第３・４図）

石田城跡の調査は，五島高校全面改修に伴い平成７年度に二の丸跡，平成８年度に本丸跡の調査を実施し，建物跡の礎石，門の跡，溝等の遺構を確認し調査を終了していた。

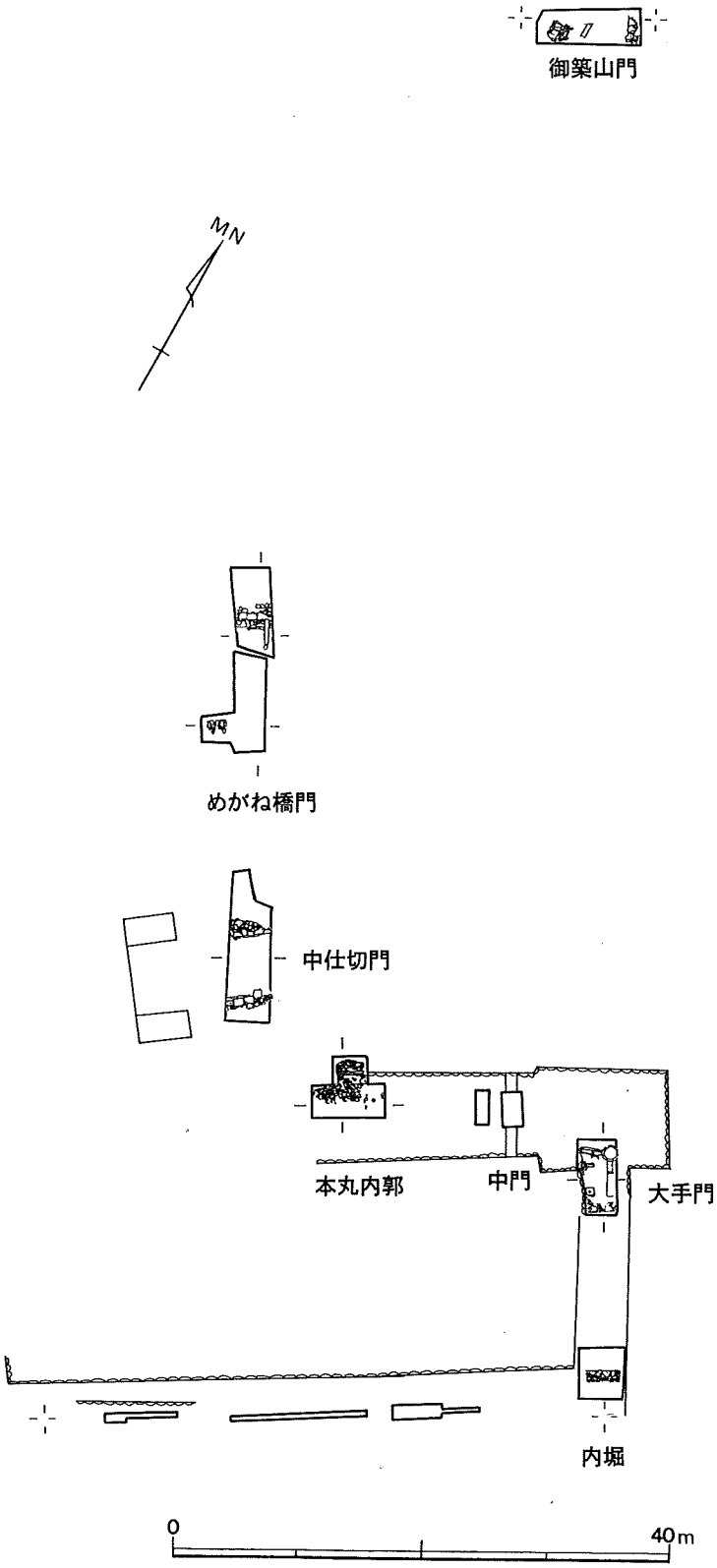
しかし，改修工事に伴う各種埋設工事については，協議の対象になっておらず，汚水・配電等のコンクリートボックス設置部分の掘削中に石垣遺構発見の報告があった。

このため，現地において遺構を確認し保存についての協議を行ったが，現在進行中の工事計画の変更は不可能であり，記録保存で対応する方法以外に考えられなかった為，緊急調査を実施した。

調査は，工事行程に沿って11月17日～12月５日までに中仕切門跡・めがね橋門跡・御築山門跡の石垣，暗渠排水溝の精査と実測を行った。また，12月８日～12月19日の間に大手門跡・建物跡の石垣，石敷の精査と実測にあたった。

２土層（第５図）

石垣確認の御築山跡，中仕切門跡の堆積土層は，瓦・漆喰が多量に投棄されており，明治５年（1872）に陸軍省の所管となった



第４図　平成９年度調査配置図

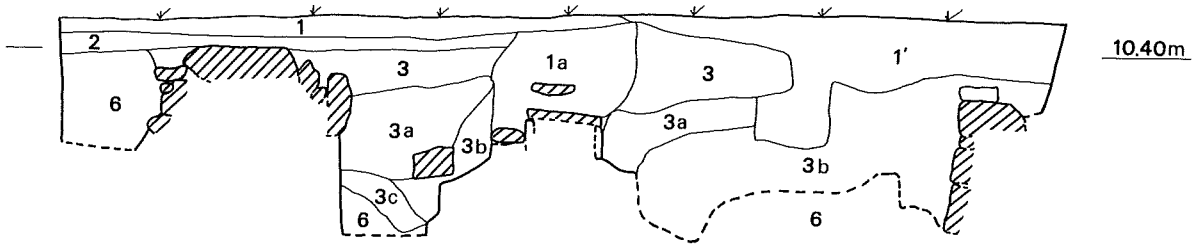
折りに屋根付きの門を解体し石垣を埋めたものと考えられる。埋土は，2.5～１ｍの堆積がみとめられた。

御築山門土層

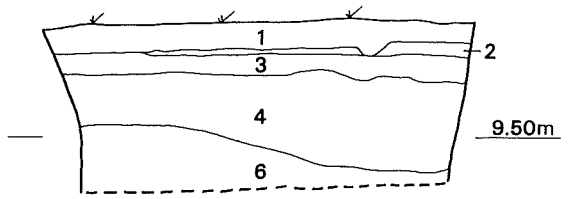
１層～６層に分層し，２層は昭和９年の五島高校校舎建設時の整地土と考えられる。３層は明治32年に長崎県立五島中学校建設時における整地土と考えられる。３ａ～３ｃ層の堆積土については明治５年の築山門解体時の石垣及び埋土と見られる。

１層は表土層。１′層は現五島高校の塵焼却後の灰等を埋めるために掘られた土壙である。２層は黄灰色土層。２′層は暗黄灰色土の暗渠掘り込土壙。２層の昭和９年整地土を掘り込んで砂岩の板石を埋め込んでいる。３層は黄赤色土。３ａ層は茶褐色土層。３ｂ層は礫層。３ｃ層は明黄赤色土層。６層は赤褐色粘質土。

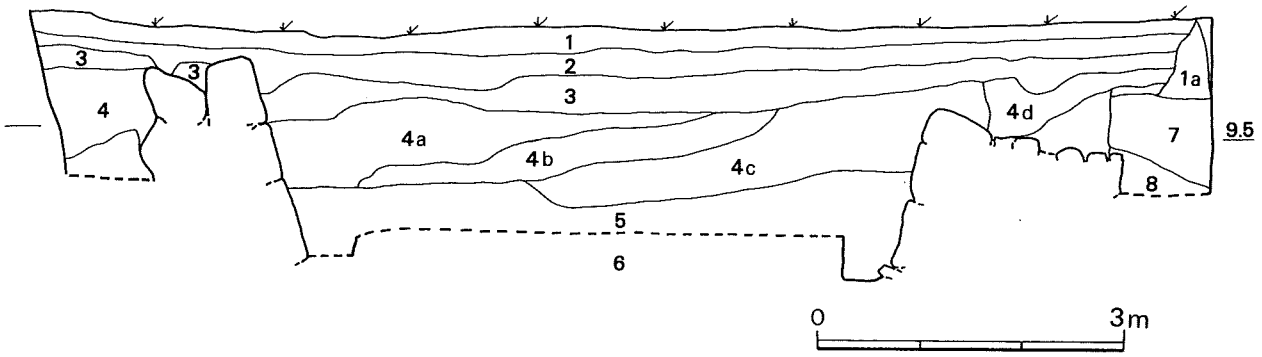
御築山門跡（北壁）



中仕切門跡（南壁）



中仕切門跡（西壁）



第５図　御築山門跡・仲仕切門跡土層図

中仕切門土層

1層から8層に分層し，2層は昭和9年の鉄筋校舎建設の時期の整地土と考えられる。また，これ以前の明治32年に長崎県立五島中学校が落成しており，3層堆積土が敷地整地のため運び込まれた土と思われる。両袖石間に堆積する層が明治5年の解体時の埋土と見られる。4層は石田城構築時の整地層と考えられる。

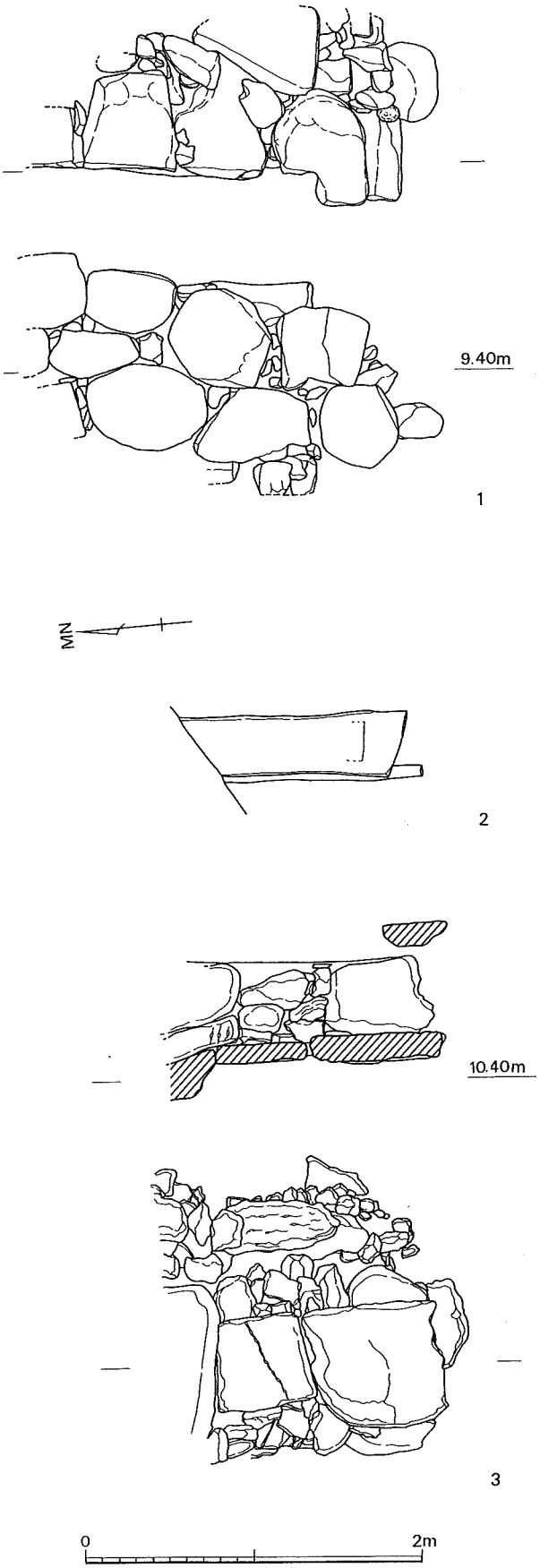
1層は表土層。1′層は機械掘削による埋土層。1a層は暗茶色土層。2層は暗茶褐色土層。3層は暗赤黄褐色土層。3a層は暗茶灰色土層。3b層は暗赤褐色土層。3c層は暗黒灰色土層。3d層は赤褐色土層。3e層は瓦と礫の堆積層。4層は暗黄色土層（風化礫混じり土）。5層赤褐色粘質土層。

3遺構（第6図～第11図）

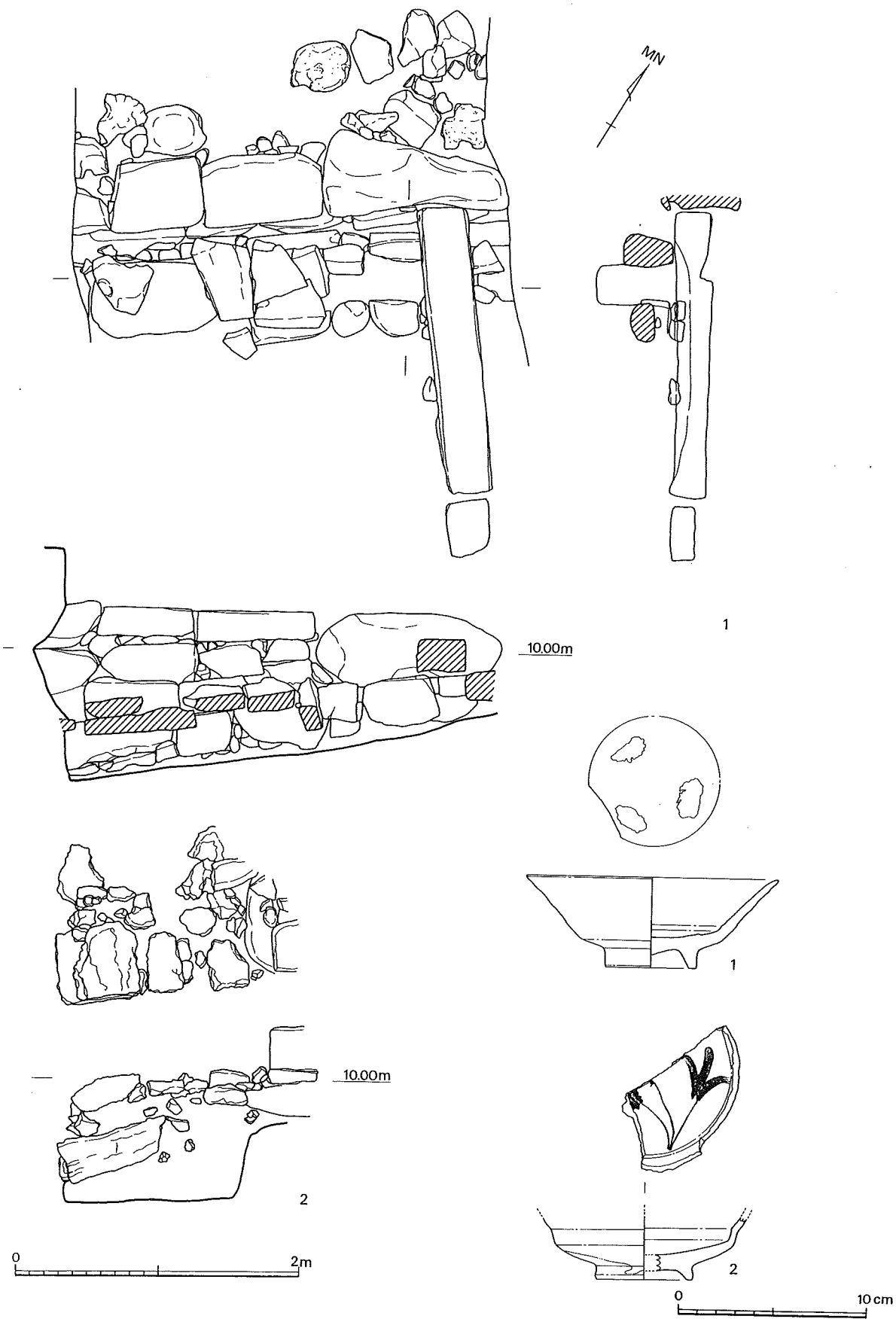
確認した遺構は，御築山門跡，めがね橋門跡，中仕切門跡，本丸内郭石垣，石敷き，中門床面，大手門礎石，本丸外郭石垣，内堀石垣を確認している。

御築山門跡

本丸跡北側に位置し，北の丸の築山出入口として築かれている。1は築山門袖石東側石垣で，現存している石垣で三段分を確認している。高さ約1.4m，幅約1.2mを測る。石材は丸みを持った海岸の石（60～70cm）を面を合わせて先端をカットし，隙間に小礫とアマカワを詰め込んでいる。2は長さ1.2mの砂岩を3枚組み合わせて暗渠排水溝を作っている。昭和9年以降の所産である。3は築山門跡西側の暗渠排水溝である。床面は地山の粘土質とし，側面は扁平な石と石の間を40cm程度の石で繋いでいる。蓋石は比較的扁平で厚みのある蓋石を乗せている。築山門と同時期の遺構と考えられる。



第6図　御築山門跡



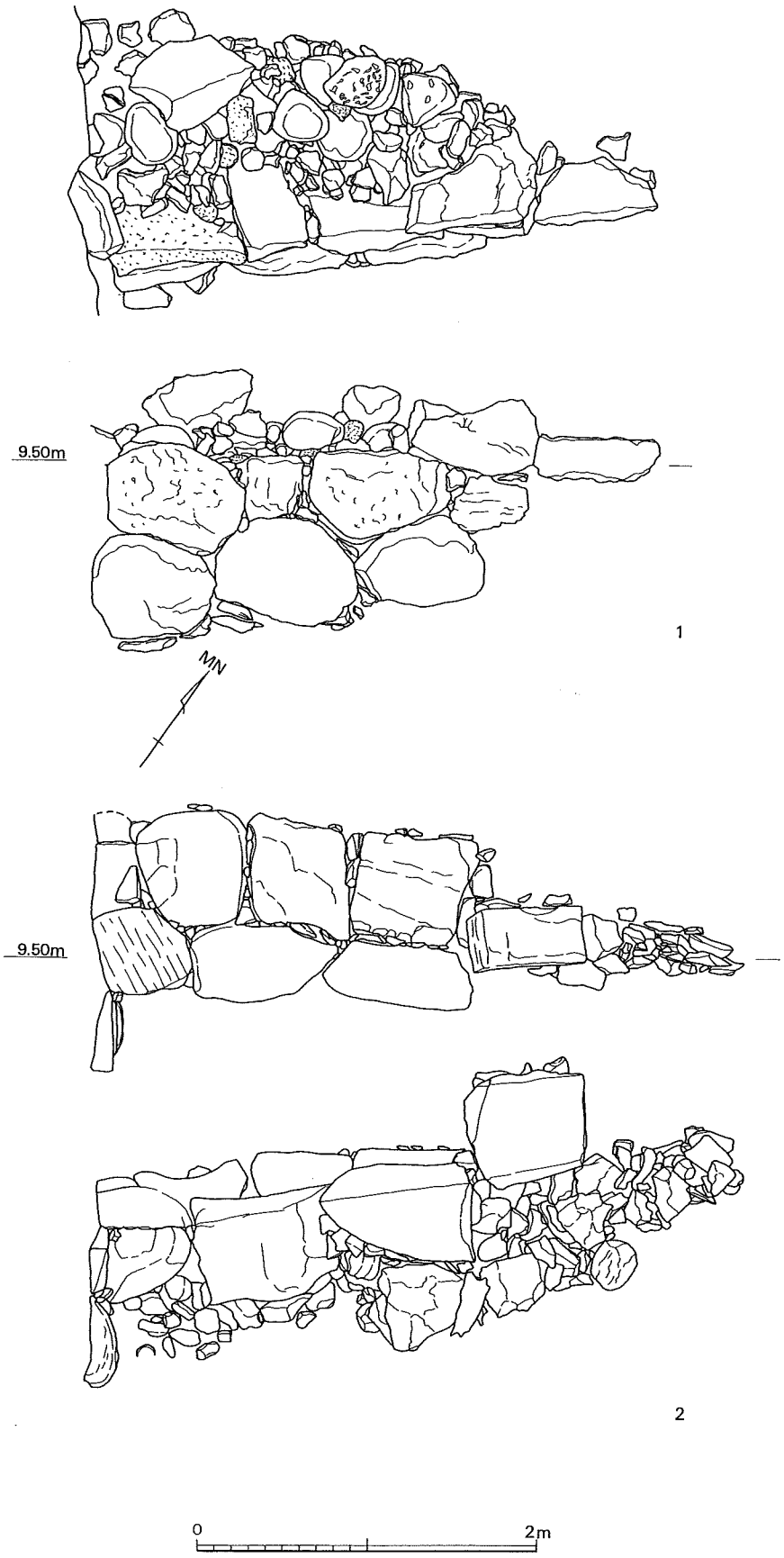
第７図　めがね橋門跡・出土遺物①

めがね橋門跡

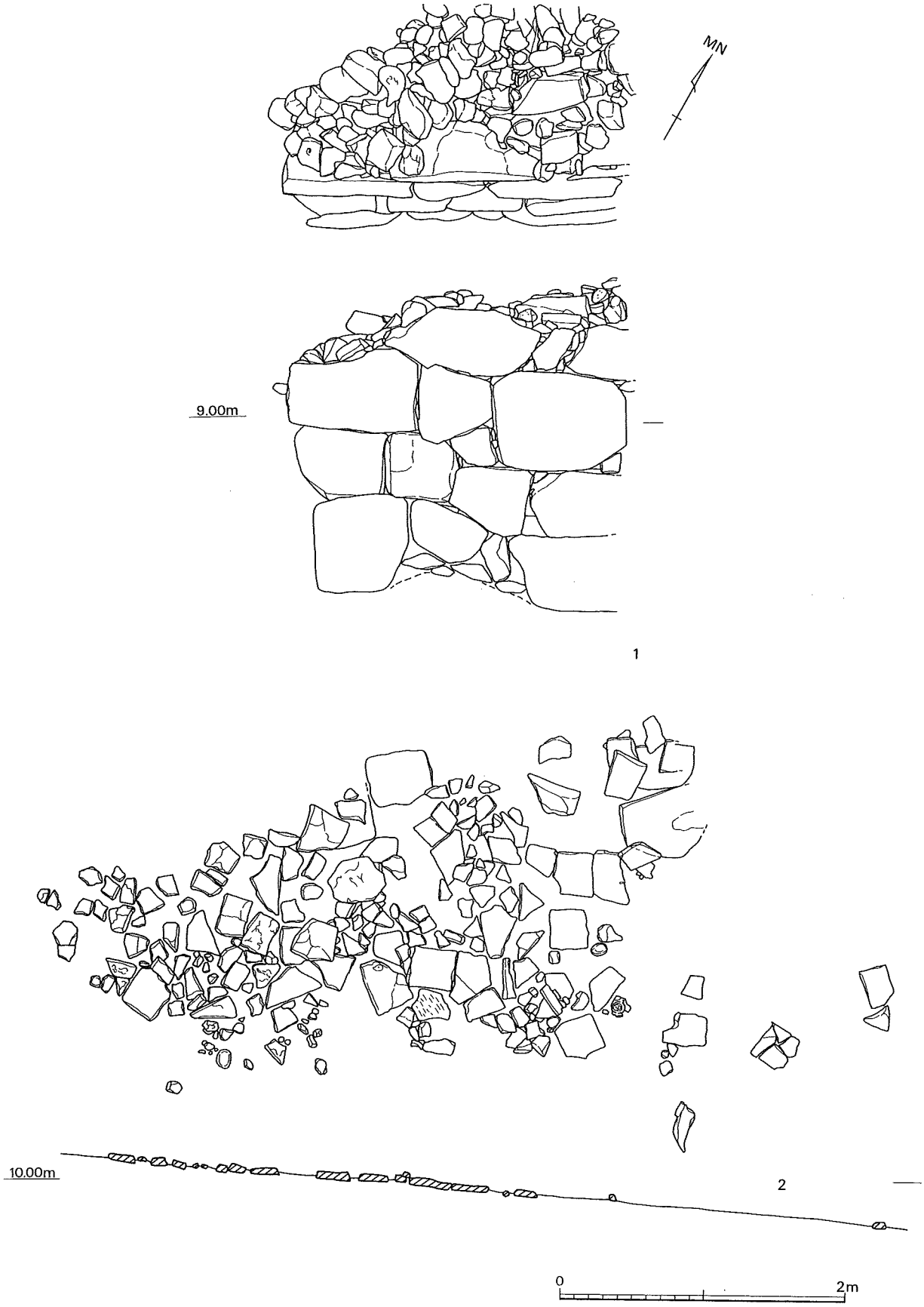
本丸跡西側に位置し，両袖石，暗渠排水溝，石段を確認している。1の北側石垣は，床面を地形の傾斜に合わせ西側3段，東側1段をなし上面が水平になるよう積み重ねている。この石垣に沿って暗渠排水溝を設けている。排水溝の幅は内法で約30cmを測る。2の石垣南側は，残存状況が悪く天場の石が残っていない状況から一度動いた可能性が高い。

中仕切門跡

本丸跡西南側に位置し，両袖石垣を確認している。1は北側石垣長さ約3.3m分が工事によって消滅した部分にあたる。床面は6層を水平にカットし，円礫を積み重ねている。石面を合わせるため面切り技法を用いている。2は南側石垣で海岸の礫を用いて北側同様に積み重ねている。



第8図　中仕切門跡



第９図　本丸跡内郭石垣・石敷

東側端部の石が落ち込んだ状態にあるのは恐らく明治５年当時の解体状況を示しているものと思われる。

本丸跡内郭石垣・石敷

中門跡から本丸跡に入る境の石垣である。本丸南西側に確認している。現存の石垣４段分の高さ約２ｍを測る。外郭と異なり角礫を用いている。天場はあと少なくとも１段分の石を乗せていたものと推測される。２の石敷きは，昭和39年に新館建設で建設資材を運び入れるために虎口から本丸入口を埋土し，現状に復することなくそのまま利用され，その際足下が汚れる理由で敷かれたとのことであった。

中門床面

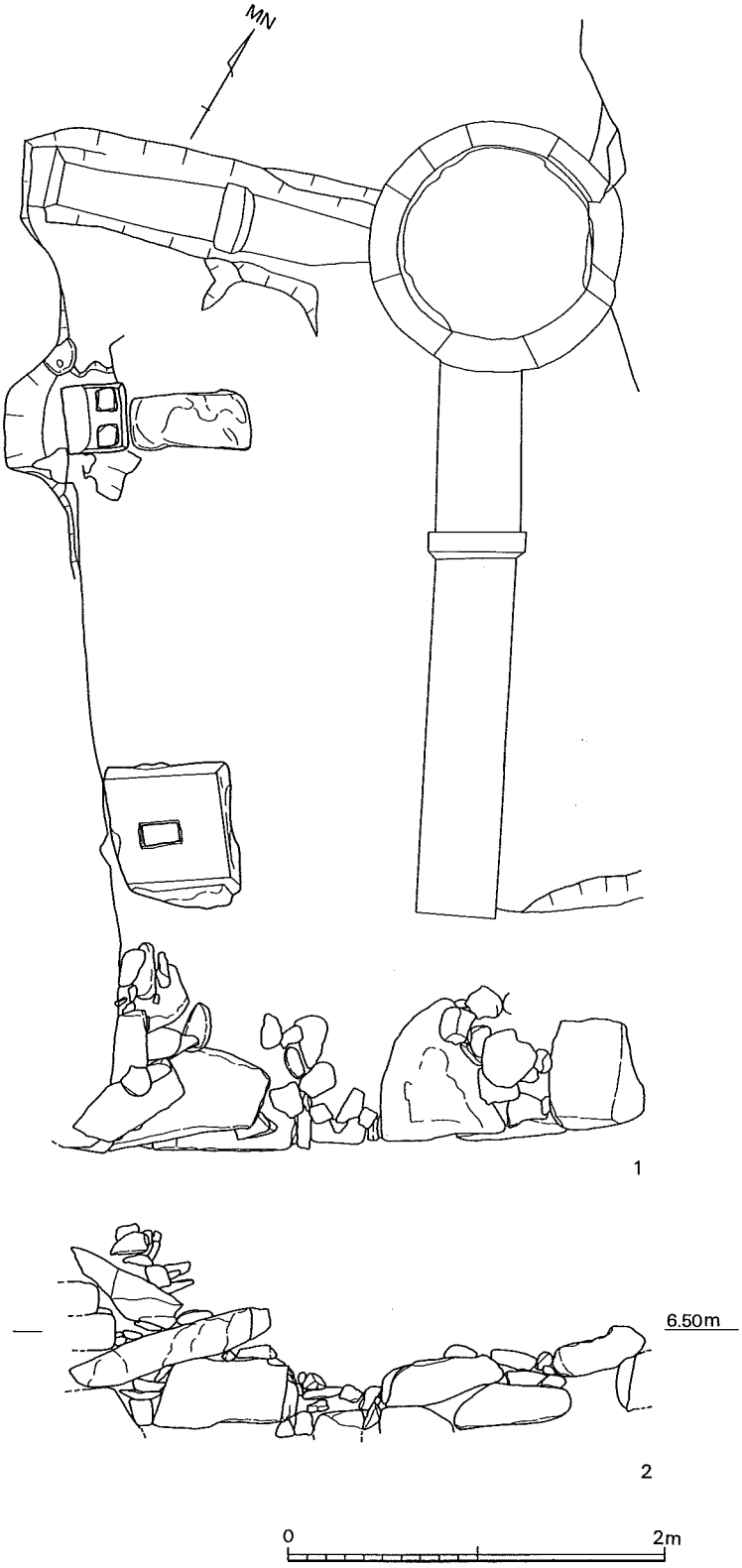
虎口に外郭と内郭に石垣の突き出し部があり，門を設けていたことが絵図から確認できる。この門の床面を厚さ約10㎝アマカワで葺いていた跡を確認している。

大手門跡礎石

門礫となる石を２基確認している。２基ともに外郭石垣に接し，岩盤を掘り下げて埋め込んでいる。前後の礎石幅は，中心から2.2ｍを測り，南側礎石は中央部に長方形のほぞ孔を開け，北側は２枚ほぞとし，脇に框石を配置している。

本丸跡外郭石垣

外郭の石垣は比較的扁平な石を

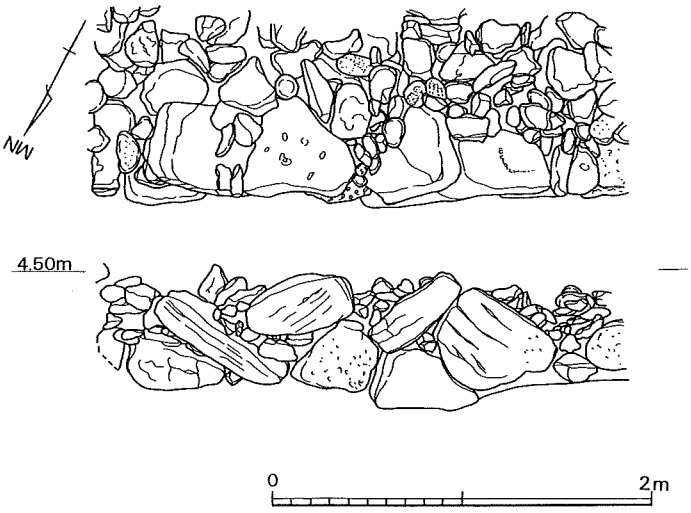


第10図　大手門跡

使用している。上部の石垣は配管工事によって取り除かれている。今回の工事が約40cmの掘削であるため石垣２段分について記録を行った。

内掘石垣

大手門と対峙する堀の石垣部分である。地表下約１mで確認する。石垣の端部と端部が接する石積みの端口合わせ技法を用いている。



第11図　内堀跡石垣

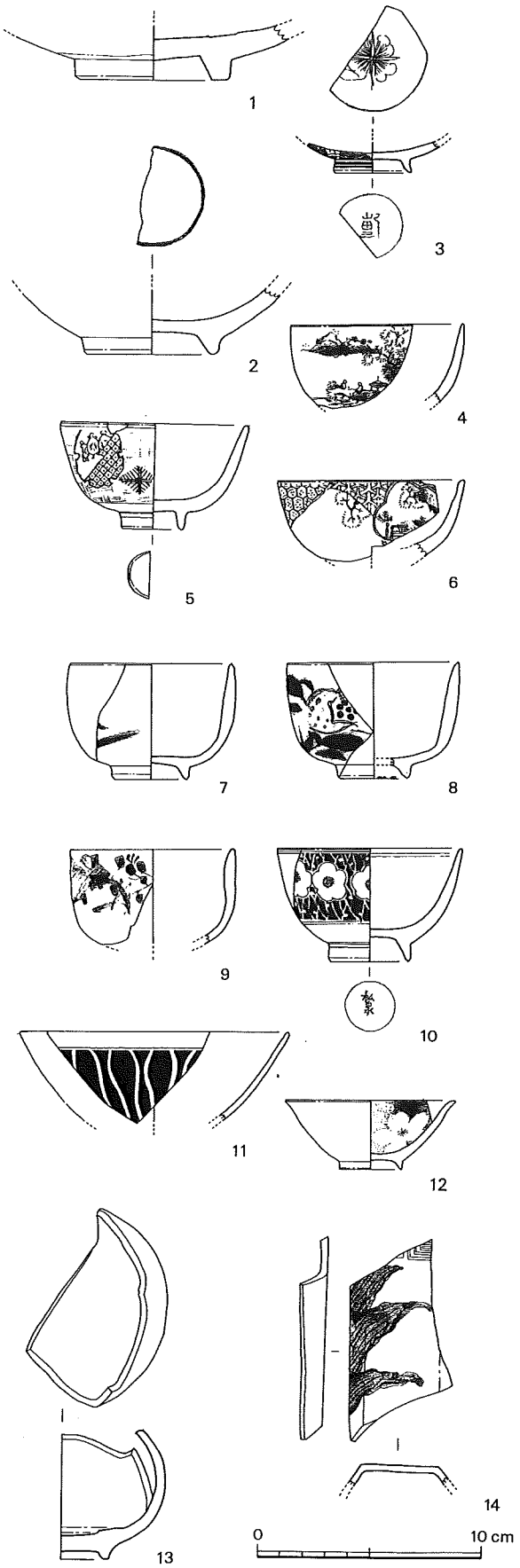
３遺物　（第７図～第19図）

御築山門跡

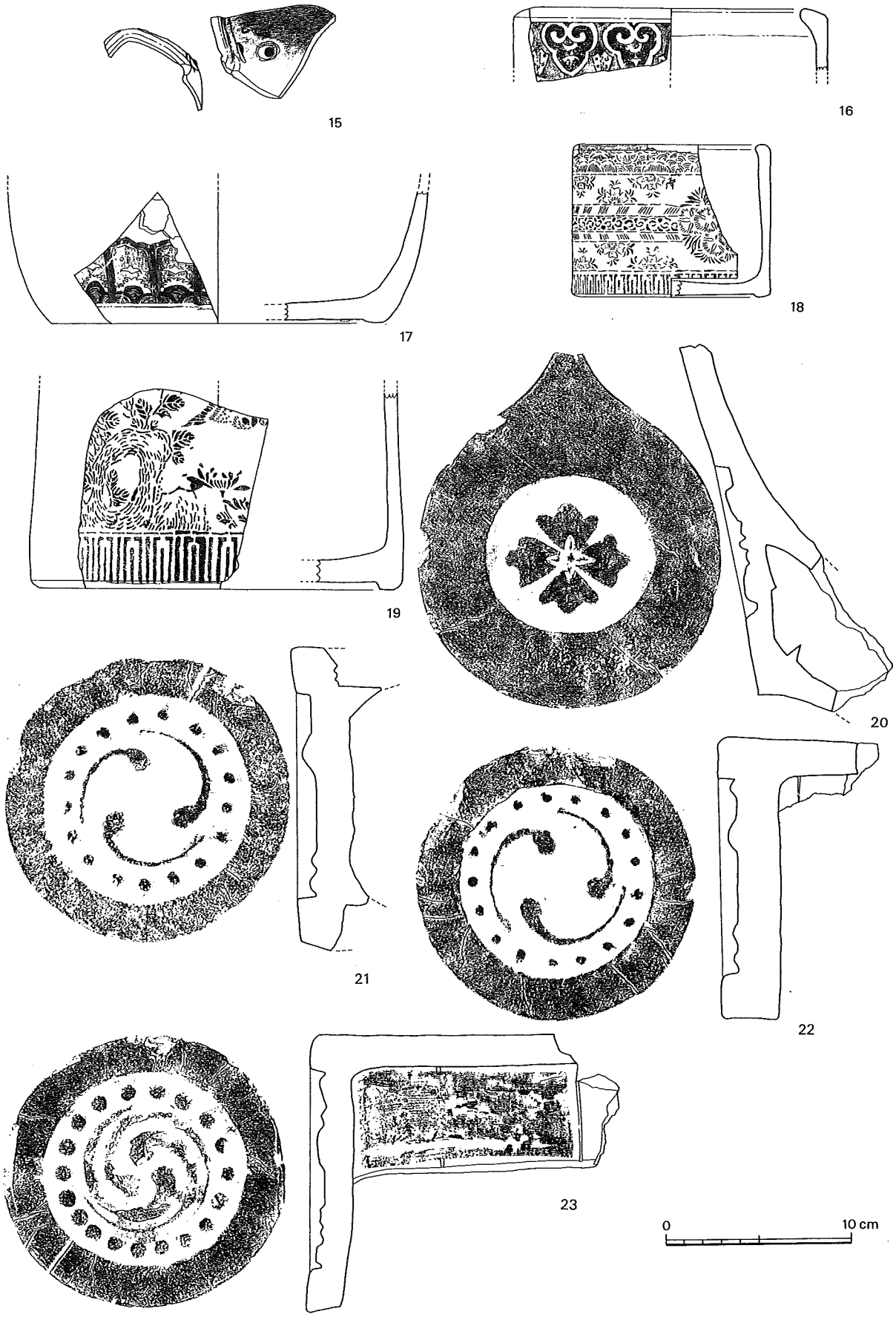
１は見込を蛇ノ目釉剥ぎし，高台無釉とする。高台部は鉋削りだしを行う皿類。釉色は暗灰緑色を呈する。２は唐津系の碗。内外面に黄緑色（飴色）釉が掛かり，畳付けは無釉としている。内底見込に鉄釉の圏線を描く。胎土は暗灰色に黒色粒が混じる。３は「福」の字をくずした銘款を高台内に記す。見込内底は十字花文様を描く。４～14は現代陶磁器で，プリント模様及び機械吹き付けの碗類。13は輪花を有する磁器碗類。14は磁器製の花瓶類で下地に黄白色を用い絵柄に桃・青色で草文を描き上部に雷文の片彫りを付ける。15は鯉形の置物で型押しによる制作。16は口縁部に連続した如意頭文様を描く。内面は，口縁部屈曲以下は無釉とした火入具である。17は胴部下半に蓮弁形の区画を連続させ青海波文を描く。内面は．釉薬が被熱で火膨れしている。高台内は無釉とし，胎土砂が高台内を一周する。18は火入具で型紙刷りによる文様染め付け。高台内及び内面無軸としている。19は文様は型紙刷りによる染め付け。底部立ち上がり及び胴部下端の蓮弁状文様構成から18と同様明治以降の所産である。20は五島家の家紋である唐花菱文様を中央に配した鳥伏間である。現存長径19cm，短径16.2cmの水滴形を呈する。表面に若干結晶片岩粉が付着する。築山門の棟瓦として使用されていたと思われる。21は軒丸瓦で三巴文を反時計回りに作り外区は珠文17個を付し，安山岩の白い粒子が器表面に目立つ。径は15.5cm，周縁幅2.2cmを測る。22は軒丸瓦の三巴文を反時計回りに作り出す。器面に結晶片岩粉が付着し，外区の連珠文は17個を数える。径は14.8cm，周縁幅2.3cmを測る。23は軒丸瓦の三巴文が時計回りとなる。外区の連珠文は19個を数える。径14.7cm，周縁幅２cmを測り器面に結晶片岩粉が付着する。24は洋裁に用いるヘラ状骨角器。先端を扁平に作出し柄部に穿孔を施す。25は真鍮製のスプーンの柄の部分か表面は滑り止めの切れ込みが入り裏面は滑らかな作りである。26は雨戸の金具にあたる資料か真鍮製である。27は寛永通寶で，寶の文字がハの字をなす。

めがね橋門跡出土遺物

1は陶器碗。内底見込に胎土目3カ所が認められる皿類。色調は，乳白色を呈し内外面に貫入が入る。高台は深く削りだし器肌がささくれて縮緬高台となる。高台は釉だれが掛かり，内面無釉としている。胎土は緻密な白色土を使用し，器形は高い高台から胴部への移行部位で屈曲し，直線的に延びて口縁部でやや外反する。2は鉄絵の草文を内底見込に配する。高台は内外無釉とし，胴部中位で屈曲して口縁部へ移行する。体部は灰青色の釉が掛かる。3は内外面に灰色の釉が掛かる。胎土は，灰白色に黒色の雲母小粉が点々と混じる粗い胎土である。朝鮮系の磁器。4は如意頭文様を胴部に配し，口縁部は四方襷の文様飾りとしている。(17世紀前半) 5は全面に灰色の釉掛けを行う小杯。高台畳付に床砂が付着する。6は外面吹刷毛目，内面巻刷毛目の装飾を行う刷毛目碗。(17世紀後半～18世紀前半) 7は高台無釉とした皿類。見込に赤褐色と禄色の色絵を配色している。釉の掛かる部分は細かな貫入が入る。胎土は黄色味を帯粗い。8は青磁の火入具。畳付部分の切り取りを行う。9は比較的高い高台を作り，笹の葉と風景を配置した絵柄としている。10は見込を蛇目釉剥ぎし，仕較的高い高台畳付に砂目跡が3カ所残る。高台内は鉋目調整で整形した兜巾高台としている。釉薬は黄灰色が体部に掛かり，高台部まで垂れ，胎土は黄色を呈する。17世紀後半～18世紀。11は青磁の蓋。中央部に突起を有する。裏面に突起が貫通している。12は内底見込に菊の文様を描く。器肉は薄手で透明な釉が全面に掛かる。胎土は白色で緻密である。圏線を高台，胴部下端，口縁部の外面に引く。13は体部に籠目と雲と渦，内面は檜垣文様を描いた

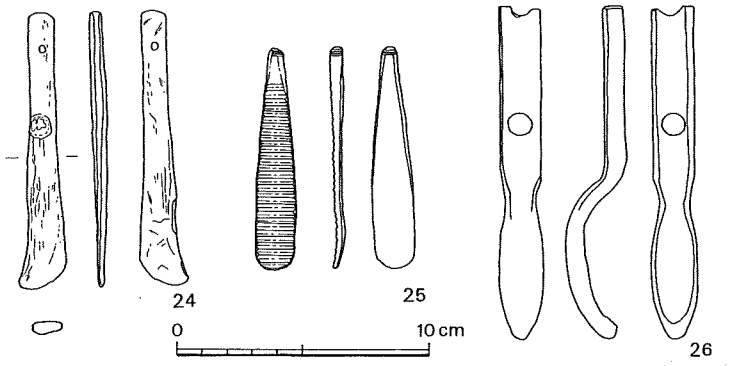


第12図　御築山門跡出土遺物①

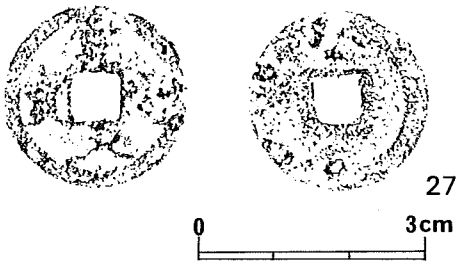


第13図　御築山門跡出土遺物②

染付碗。14は外面と内面に鉄釉による葛状の文様を２本一組の区画線とその間に配する。内面は２本の圏線を引き，器面は淡茶褐色を呈する。15は蛇目釉剥ぎの陶器。(1750～1800年）丸い体部に真っ直ぐに削り出された高台がつく。白土で刷毛目文様を口縁部から見込に付す。高台畳付にアルミナ砂を塗る。胎土は暗茶褐色を呈する。内野山北窯跡・志田東山窯跡系の鉢。16は近代の火入れ具。17は上部に灰色の釉を施釉し，鍔以下は胎土地を残す。アルミナ砂が口縁部に薄く付着（Ⅳ・Ⅴ期)。18は陶器の鉢類。口縁部で屈曲し体部丸味を持つ。口縁部と体部の境の外面に黒緑色の釉が掛かる。内面胴部に暗黄白色の釉が掛かる。19は陶器の鉢類。高台を持たず，外面無釉としている。内面は，茶褐色の釉を掛ける。20は瓦質の壷。口縁部に一段粘土紐を巡らし厚みを持たせ，頸部で屈曲し１本の粘土紐で装飾を施す。体部に丹の付着が見られ，風化し茶色に変色している。21は口縁部に二本の沈線を配した擂鉢。擂り目は10本の櫛を使用する。体部に自然釉が掛かり口縁部にテカリが認められる。胎土粗く５㎜程度の長石が内部に残り色調は赤褐色を呈する。22は口縁部を丸く納め，沈線を１本巡らす。口縁部下端に粘土紐を張り付ける。内面上部に浅い擂り目を付け，下部を深い擂り目としている。23は胴部からやや膨らみを持って口縁部へ移行し，口縁部は緩く外反する。胎土は赤褐色を呈し，無釉としている。24は軒丸瓦。巴文様は時計回りとなり，細長い尾と尾が接近する。連珠文は米粒状の長楕円形をなす。周縁幅径は1.9㎝を測り，色調は淡黄灰色を呈する。



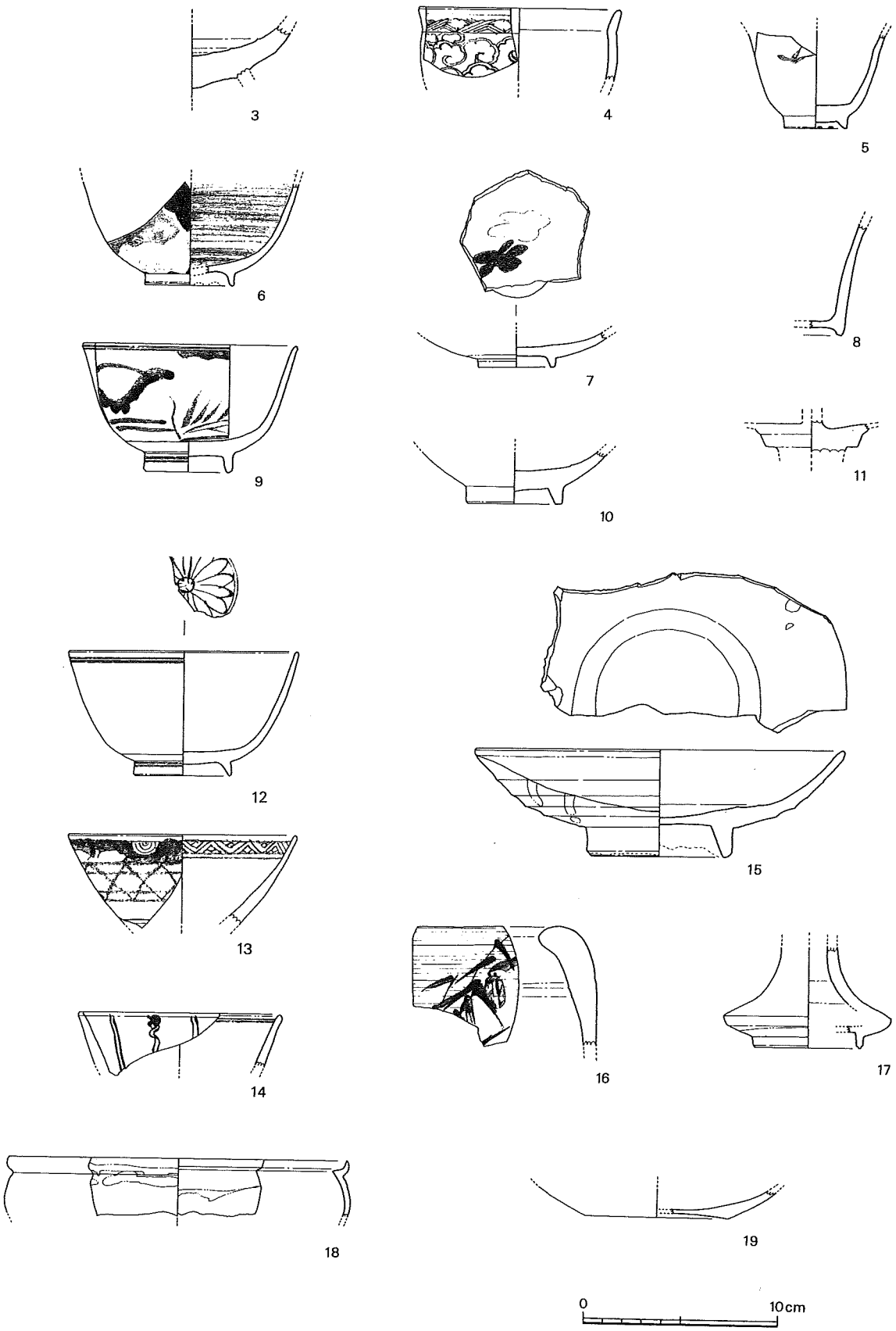
第14図　御築山門跡出土遺物③



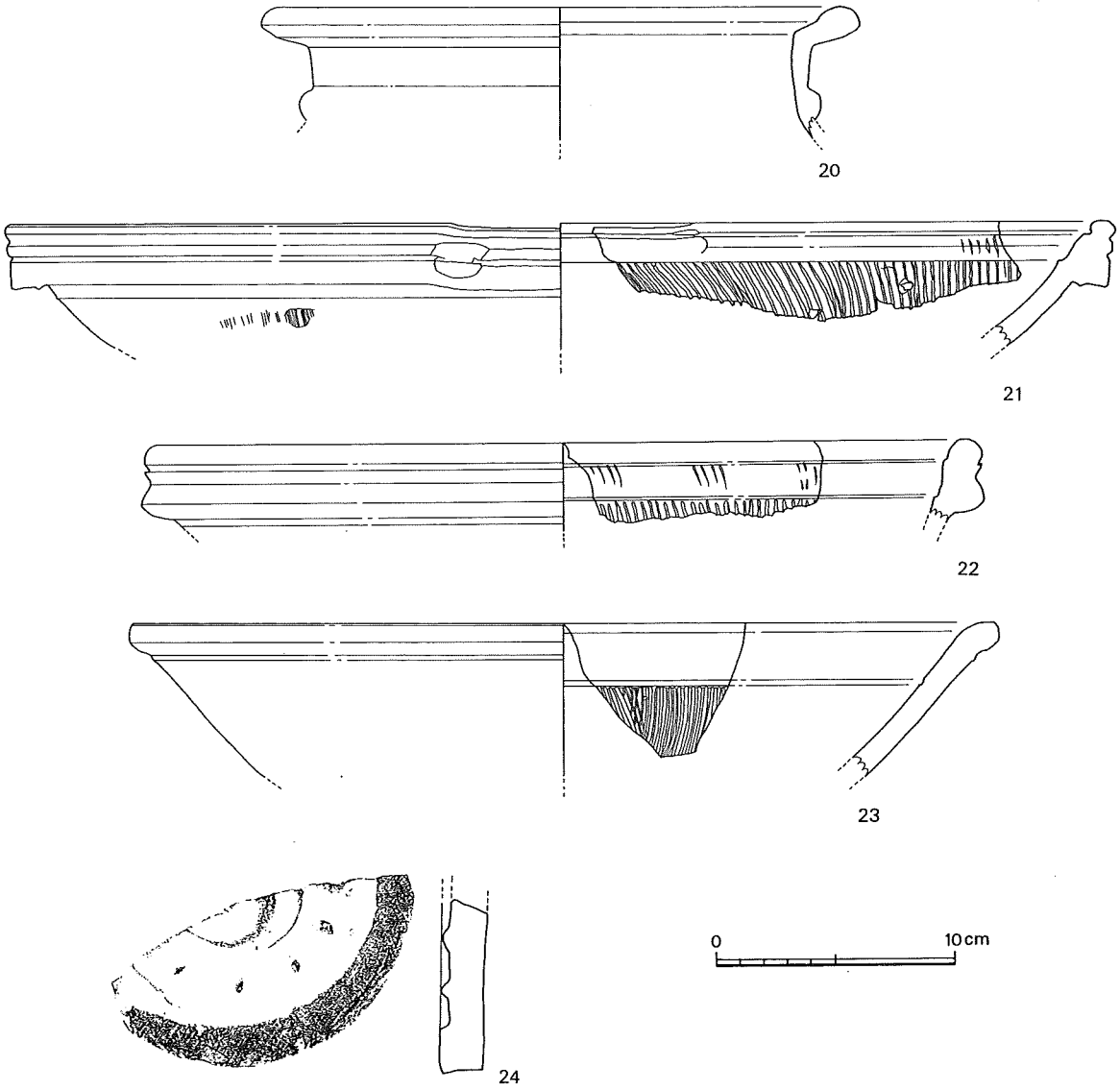
第15図　御築山門跡出土遺物④

大手門跡出土遺物

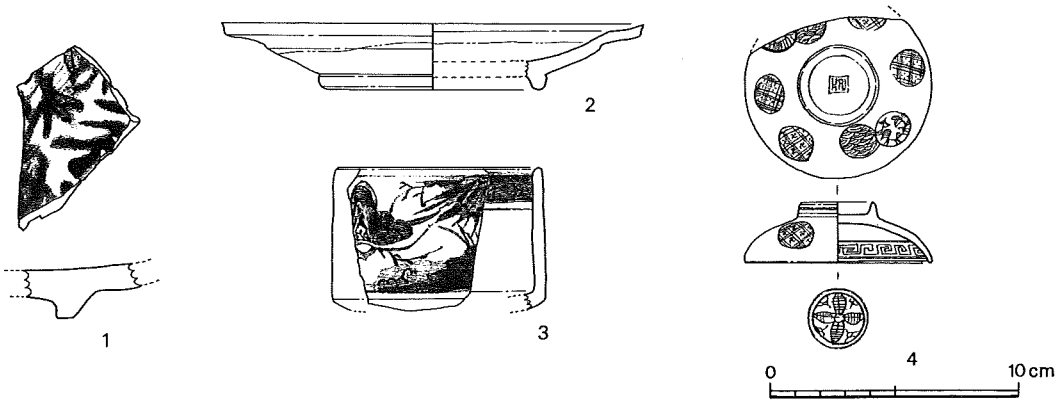
１は明の染付皿。文様の呉須の色が濃い青色を呈する。高台畳付部分は釉を水平に削り取っただけの雑な整形をしている。(1610～1630年代の向ノ原１・２号窯，天神森窯，小溝上窯の焼成に類似する資料である。）２は1610～1630年代（Ⅱ期）轆轤水引き作り。淡灰色を呈する胎土。貼付高台とし，胴部やや湾曲し口縁部で直線的に延びる。口縁端部の断面コの字をなす。釉は口縁部に灰色の釉を内外面に掛ける。３は18世紀後半の筒形碗。墨弾技法を用いている。外面は風景，内面は圏線と帯線とで文様を構成している。４は磁器の蓋頼（1820～1860年)。外面に卍・四方襷・波・花弁を円圏内に描き，高台内に銘款を入れる。内面口縁部は，雷文，圏線とし，見込に十字花文様を描く。５は明治９年製造の二銭銅貨。



第16図　めがね橋門跡・出土遺物②



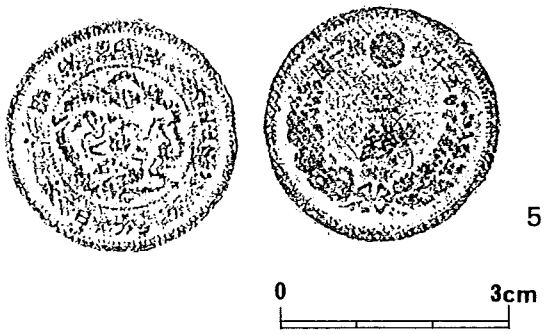
第17図　めがね橋門跡出土遺物③



第18図　大手門跡出土遺物①

註文献

註１　福江市1995『福江市史（上巻）』「第四章近世　246頁」に城壁は戸楽より長手に至る海岸の丸石を用い，角の切り石は福江川の川石でなっている。編集福江市史編集委員会



第19図　大手門跡出土遺物②

【参考文献】

九州近世陶磁学会　2000「九州陶磁の編年」
九州近世陶磁学会10周年記念　九州近世陶磁
学会事務局編集
平凡社　1997『別冊太陽』　監修　大橋康二
理工学社　1994『古伊万里の文様』著者　大橋康二
理工学社　1994『図鑑　瓦屋根（改訂版）』著者　坪井利弘
理工学社　1993『桟瓦屋根のデザイン』「瓦屋根の納め方」改題・改訂版　著者　坪井利弘
理工学社　1996『日本の瓦屋根』著者　坪井利弘
長崎県教育委員会　1997『石田城跡』－県立五島高等学校建替工事に伴う緊急発掘調査報告書－長崎県文化財調査報告書第139集
大分県教育委員会　1993『府内城三ノ丸遺跡』－大分県共同庁舎（仮称）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

Ⅴ平成10年度１次調査（所在地：長崎県福江市福江町字東町７番地）

１調査の概要（第20図）

調査は，五島高校体育館全面改修に伴う石田城跡内堀の石垣記録保存を目的に実施した。

内堀石垣は，旧体育館建設で盛土保存が行われており，西側に現存する内堀ラインの延長線上から石垣の検出作業を実施した。

なお，プール建設で長さ約13mが上部を掘削されていたが，ほぼ絵図面に記された堀の配置を確認することができた。

石垣の実測については，（株）空間文化開発機構に委託し写真測量を行った。

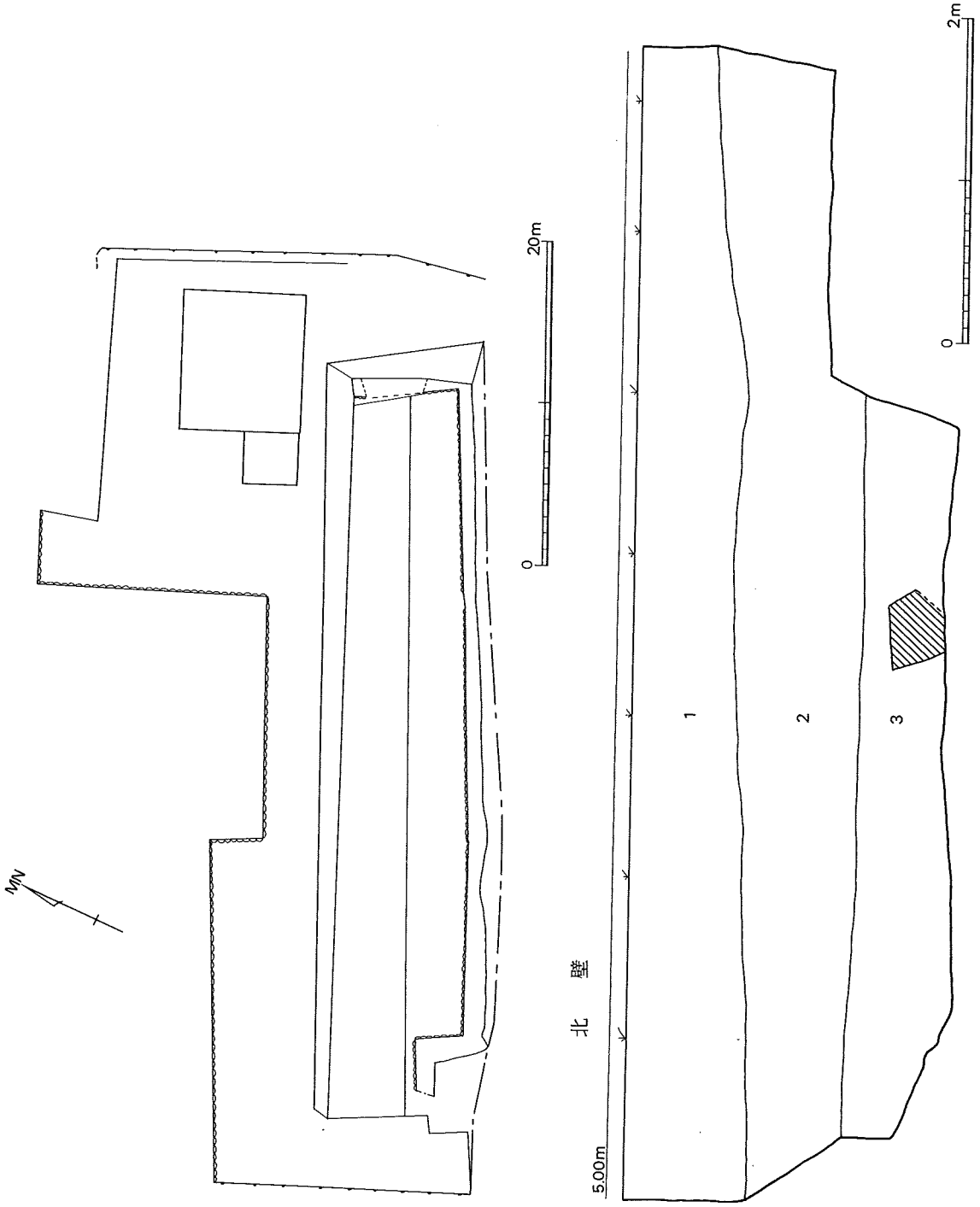
２土層（第20図）

堀内の堆積土は，１層が体育館整地のために約0.7m客土を行っていた。２層は暗灰色粘質土の堀潟土約50cmが堆積していた。３層は礫混じりの地山となっている。

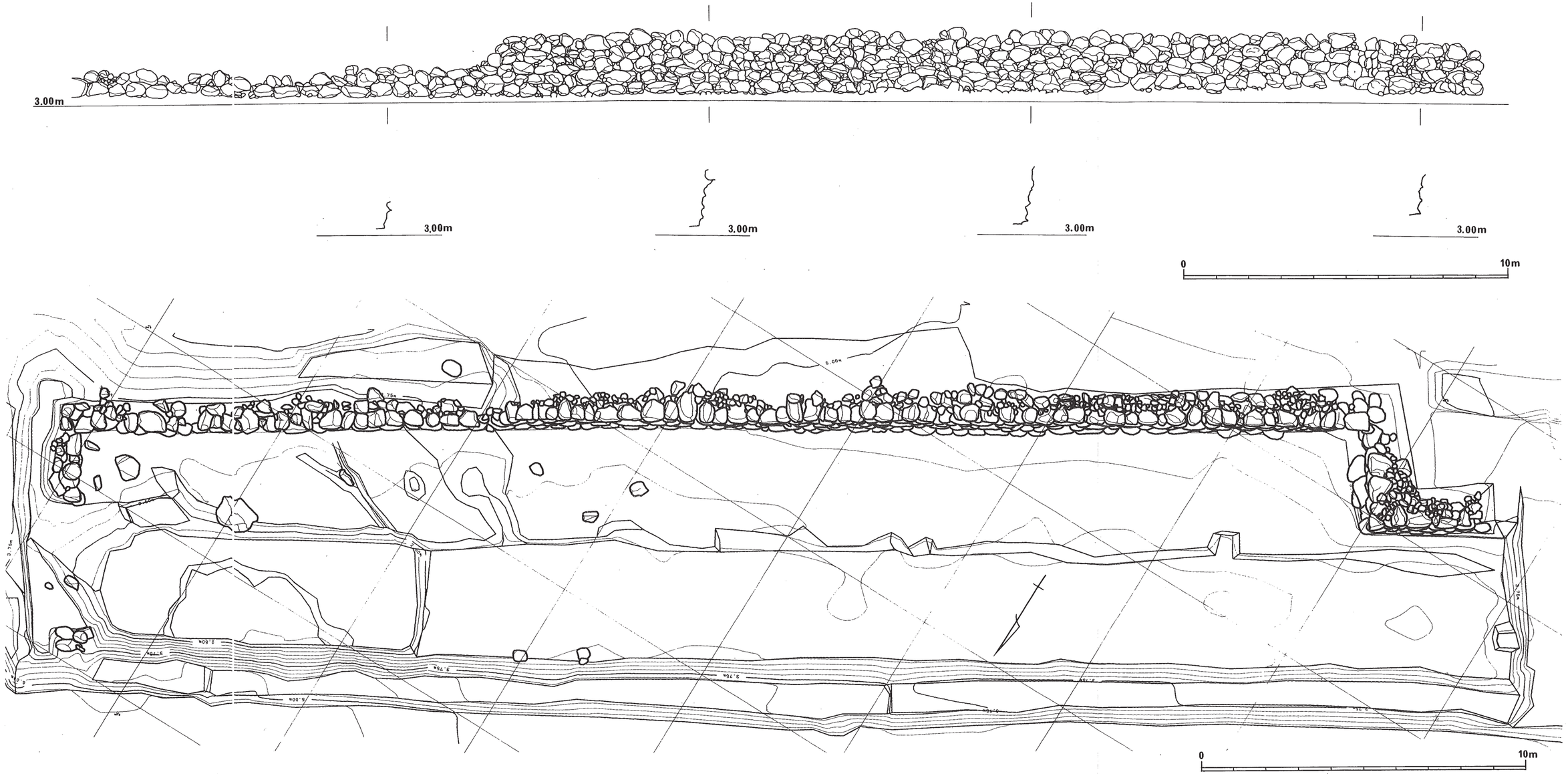
３遺構（第21図・第22図）

石垣は，地表から約１m下に確認し，中央部ではさらに浅くて地表下約20cm～30cmで石垣上部を確認した。検出石垣西端から東側約3.5m行った地点で南側へ90度折れ，３m延びてさらに90度東へ折れて約40m東側へ一直線に延びる。内堀のコーナーは一直線に延びた東端から90度北側へ石垣が折れる。

石垣の高さは現存最高で２m，最低で0.5mを測る。石垣の石は福江市内の「戸楽より長手に至る海岸の丸石を用い」とあるように牡蛎殻の付着した岩石を加工しないで野面積としている。ただし，西側のコーナーは切石を最下部から上部へ数えて４段目に用いている。



第20図　平成10年度調査範囲・土層図



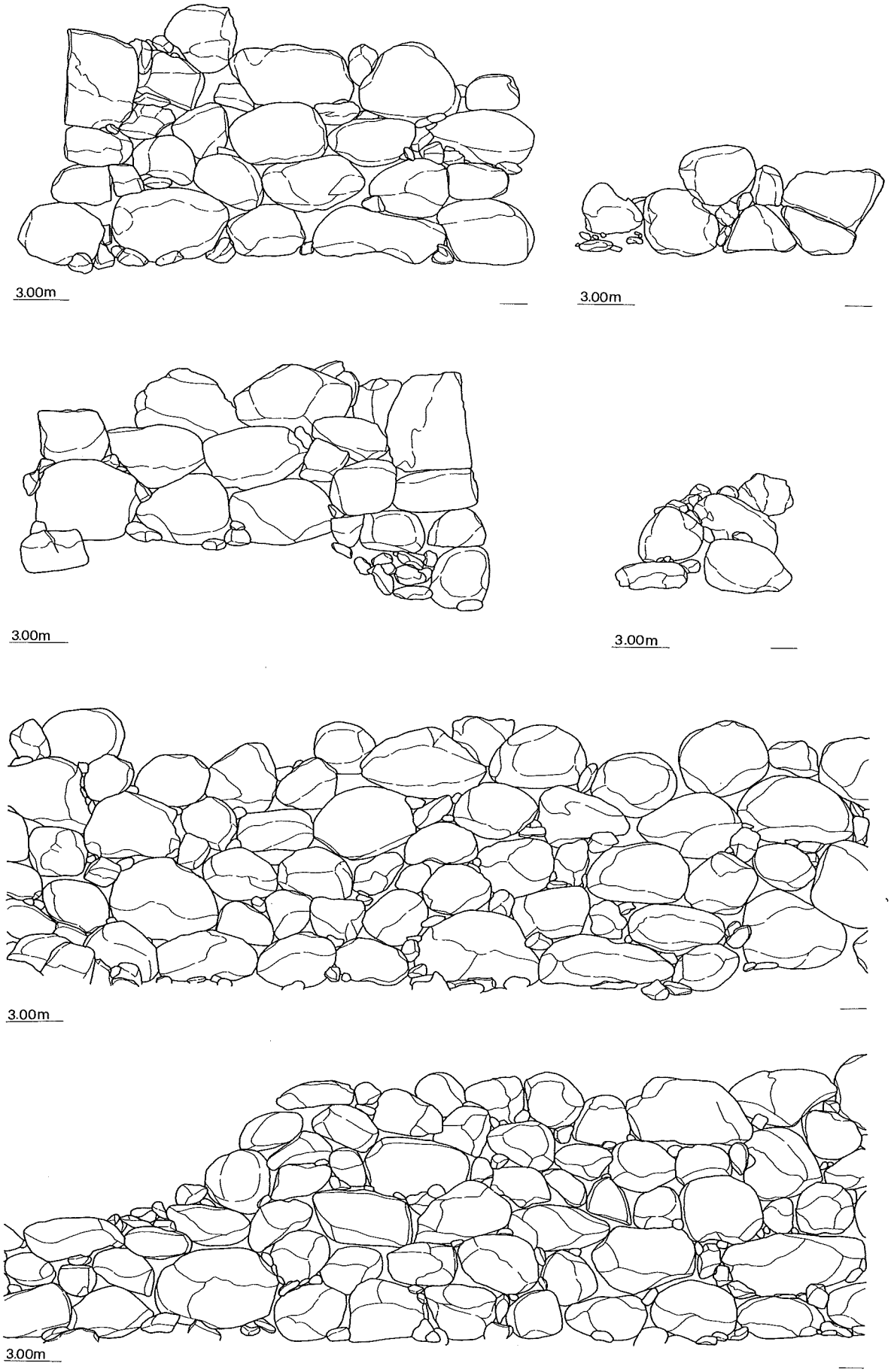
第21図　内堀石垣跡①

堀底は，西側石垣屈曲以外は約３ｍの石垣の最下部レベルで北側部分の地山を平坦に削平しテラス状をなす。テラス状をなした北側端部から約20㎝段差をつけている。さらに，南北に延びる石垣前面部から西側10ｍは約１ｍ地山を掘り下げて，堀底を形成している。堀の幅は約11ｍ。

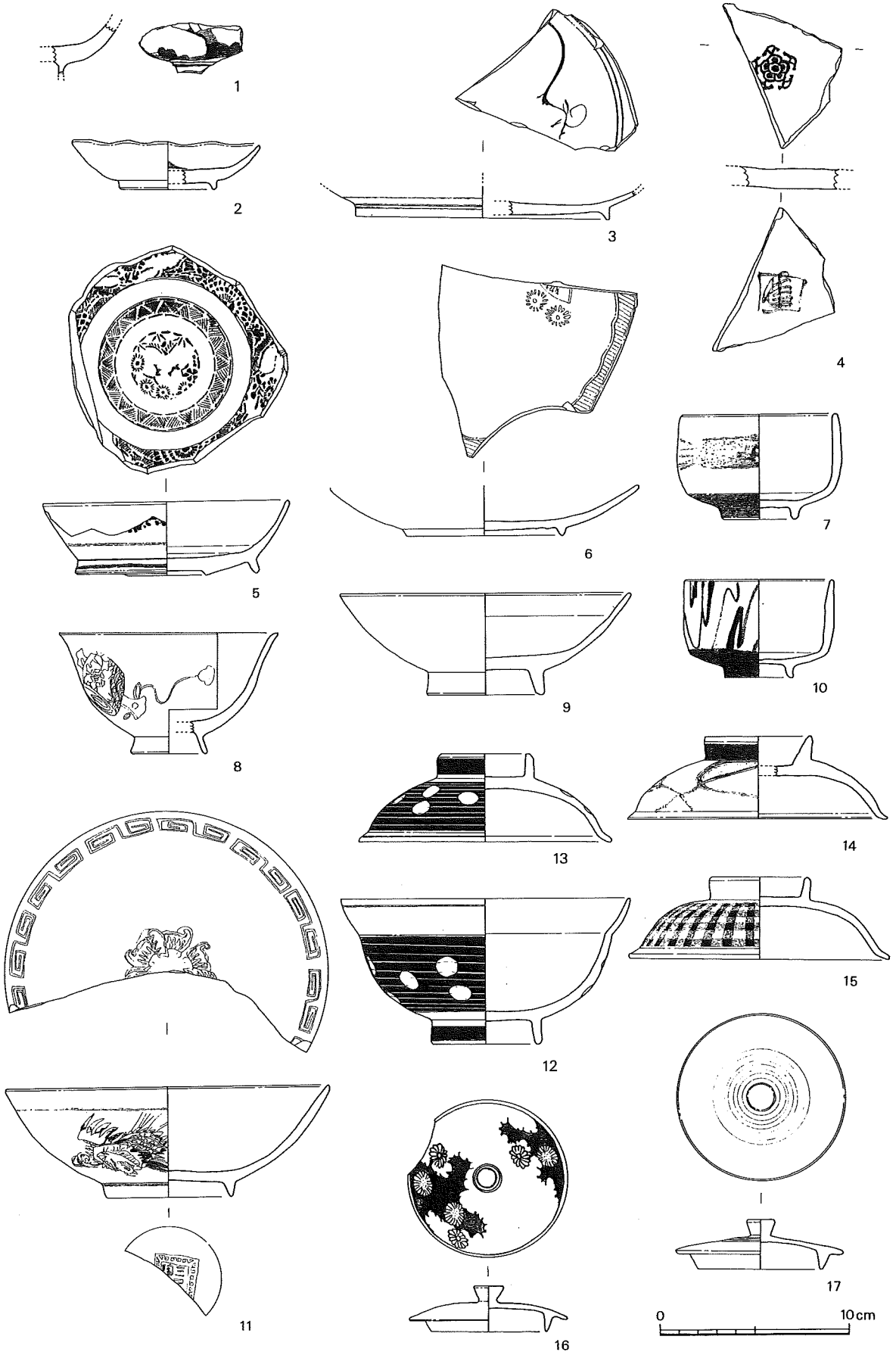
４遺物（第23図～第27図）

内堀内出土遺物

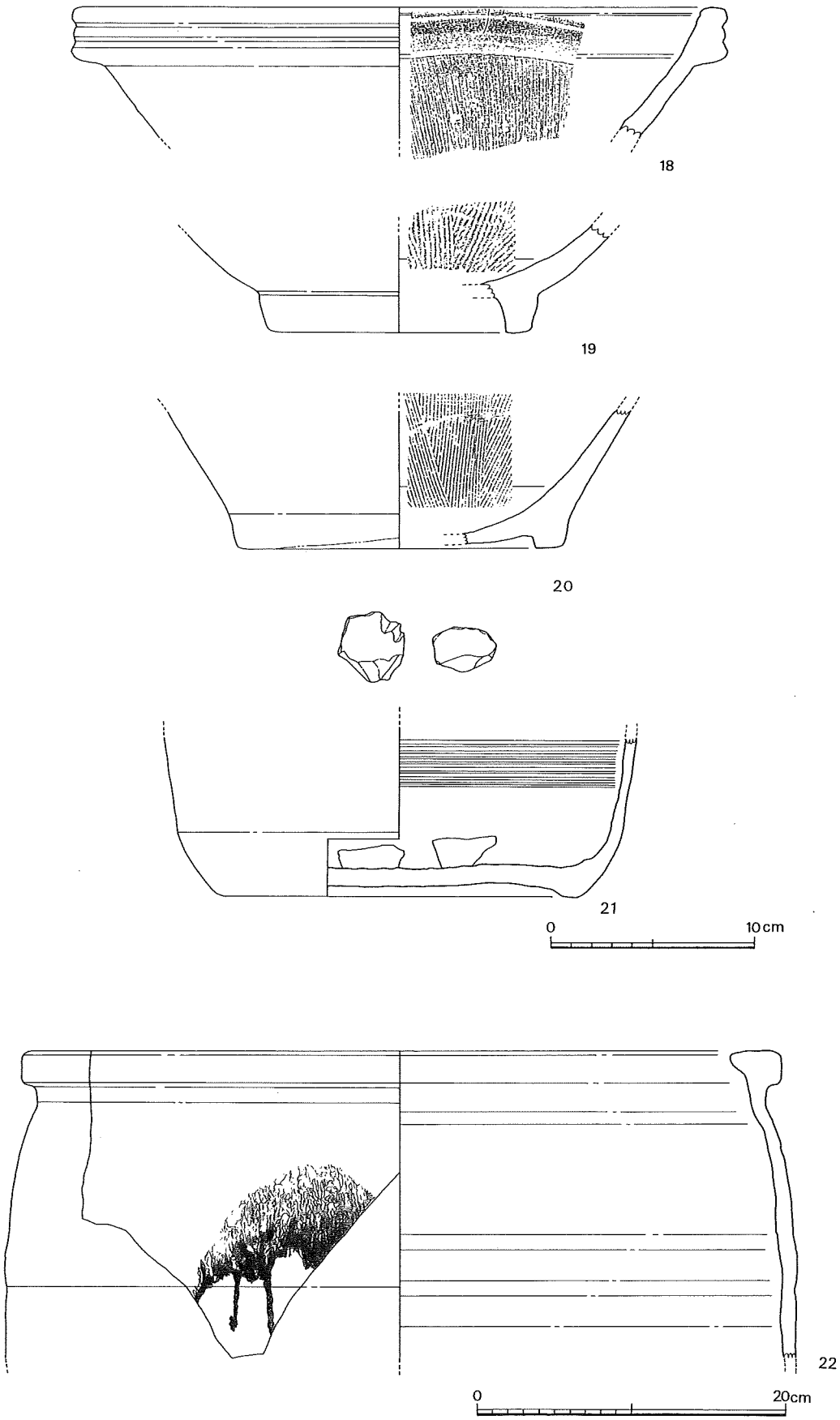
内堀内の出土品は，主に現代の遺物が多く江戸期の遺物としては，１～４が認められる程度である。１は18世紀代波佐見焼の碗。２は輪花の皿。外面は白濁した釉が厚く掛かる。内面はやや黄色味を帯びた灰色を呈する。３はハリ支え跡のある皿。高台内に１本の圏線，外面に３本の圏線を配し，内面は圏線と植物を描く。畳付は無釉としている。４は見込に手描きの五弁花を入れ．高台内に銘款を入れた皿。18世妃代の遺物。５は型絵（型紙絵付）で見込は蛇目釉剥ぎとしている。見込内に松・竹・梅を描く。高台は蛇目高台としている。６～17は昭和30年代前半までに使用していた碗，皿，蓋類である。旧体育館建設に伴って堀が埋められており，建設以前に五島高校で使用していた資料である。18は口縁部に二本の凹線が入る。胎土が粗く５㎜程度の長石が混じる。目タチを２回行っている。19は無釉の擂り鉢。目タチ17本を数える。20は体部に茶色の釉が掛かり光沢がある。目タチ25本を数える。高台，畳付は無釉としている。21は二個の胎土目が見込内に残る。花器と思われる。外面はライトブルー，内面は透明釉が掛かる。２２は大型の甕で外面は茶褐色と黒色の釉で全面施釉する。内面は茶褐色の釉を全面に掛ける。胎土は黄灰色を呈する。口縁部は平坦に整形し，頸部やや内傾する。23～39は瓦類でそのうち23～26が軒丸，27～34が桟瓦，35～38は丸瓦，39は本谷丸瓦（右）である。23は巴文が反時計回りで，連子１個を確認できる。周縁幅２㎝を測る。表面の調整を行わずざらつくが内面はナデ整形し，灰白色を呈する。24は巴文が反時計回りとし，連子７個を数えるが欠損しているため総数については不明である。器面は灰色を呈し，周縁幅2.1㎝を測る。25は巴文を反時計回りで連子７個を数える。欠損しているため総数については不明。器面は灰色を呈し，風化摩耗している。周縁幅は3.2㎝を測る。26は巴文を反時計回りとし，連子16個付けていて１カ所を欠損する。器面は黒色を呈し，表面に雲母粉が付着する。周縁幅は，2.4㎝を測る。27は軒瓦（軒桟瓦）で連珠三巴。連珠文12個。周縁幅を1.4㎝測る。28は連珠文が付かない三巴の軒瓦。周縁幅は2.3㎝。29は器面が黒色を呈する。雲母粉が全面に認められる。巴文は反時計回りで周縁幅が1.7㎝を測り，わずかに瓦当面左側に第２唐草文様が残る。30は器面が黒色を呈する。周縁幅が1.5㎝を測る。表面全体に結晶片岩粉が認められる。巴文は反時計回りとなる。31は器面が灰黒色を呈する。結晶片岩粉がやや認められる三巴文の周縁幅が2.3㎝。瓦当面は立浪模様で，中心飾りがわずかに認められる。周縁幅は，2.3㎝。32は第１，第２唐草文が残る。中心飾りは不明。小巴文に瓦当面は立浪文様。33は小巴文で器面は黒色を呈し，表面に結晶片岩粉が付着。周縁幅は1.7㎝を測る。34は器面が黒色を呈し，表面に結晶片岩粉付着する。周縁幅は1.7㎝。35は器面が黒色を呈する。尻部と玉縁部のある丸瓦である。内面は叩き整形で尻部から玉縁までが3.3㎝を測る。36は丸瓦。器面は黒色を呈し，内面は叩きで終え



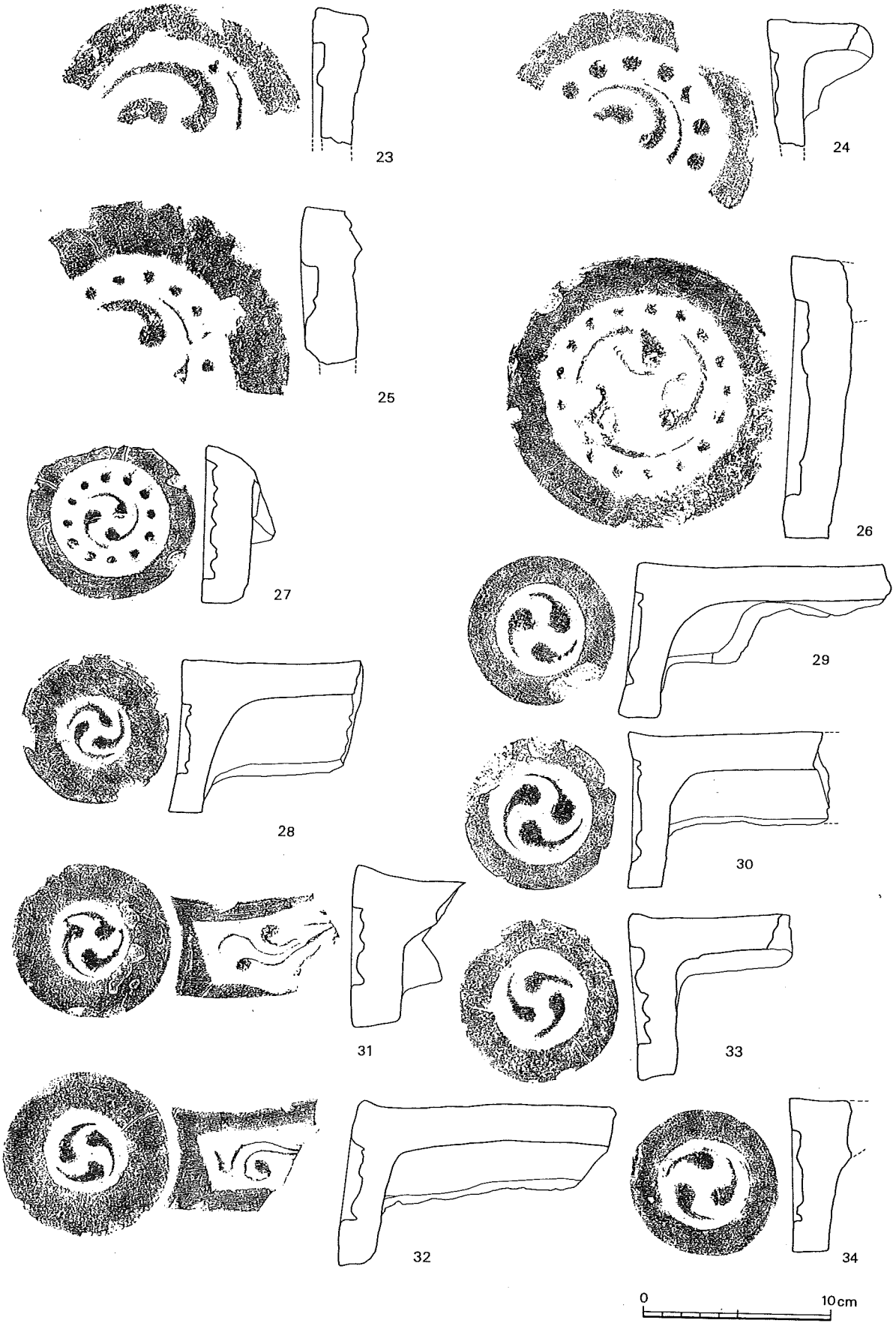
第22図　内堀石垣②



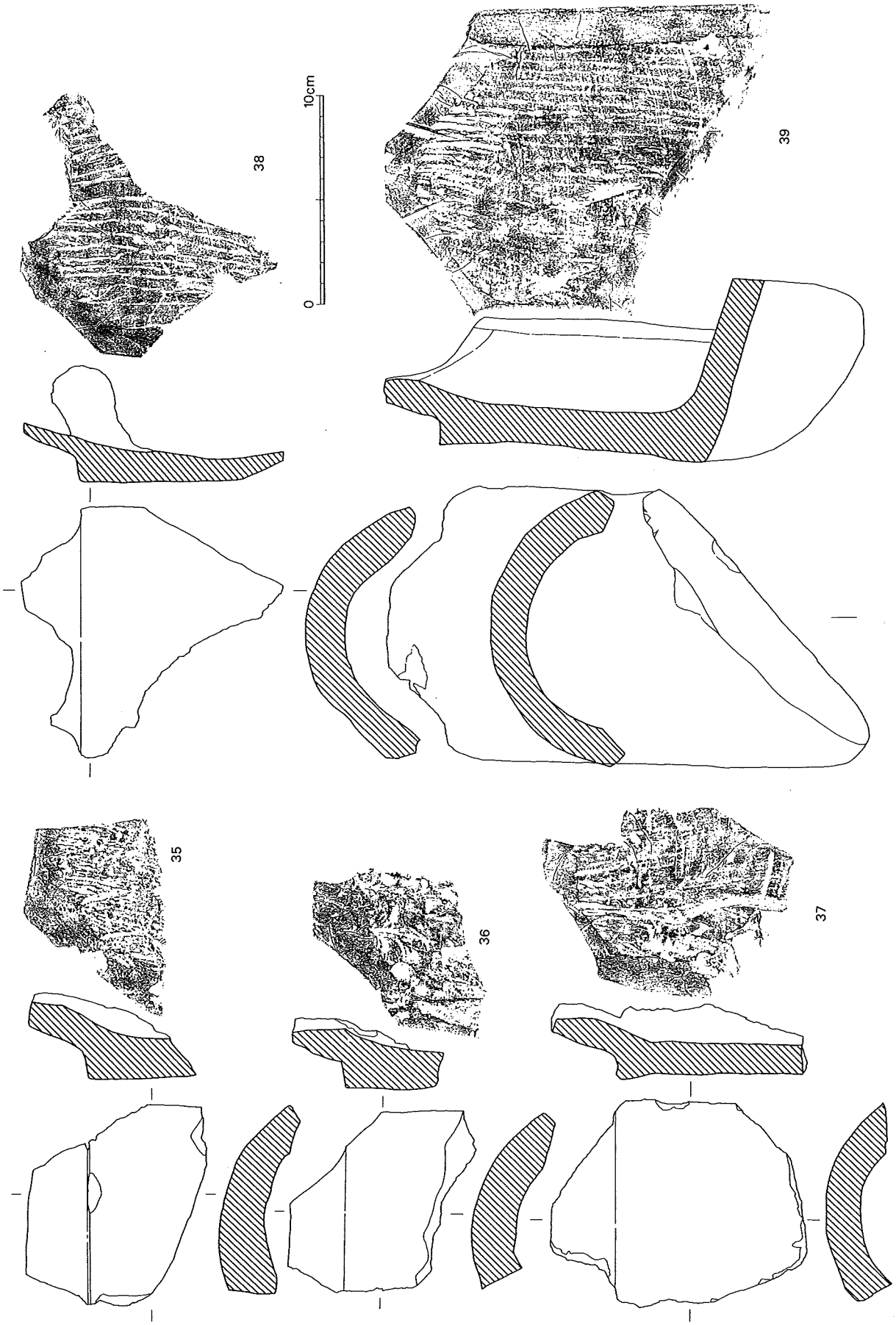
第23図　内堀内出土遺物①



第24図　内堀内出土遺物②

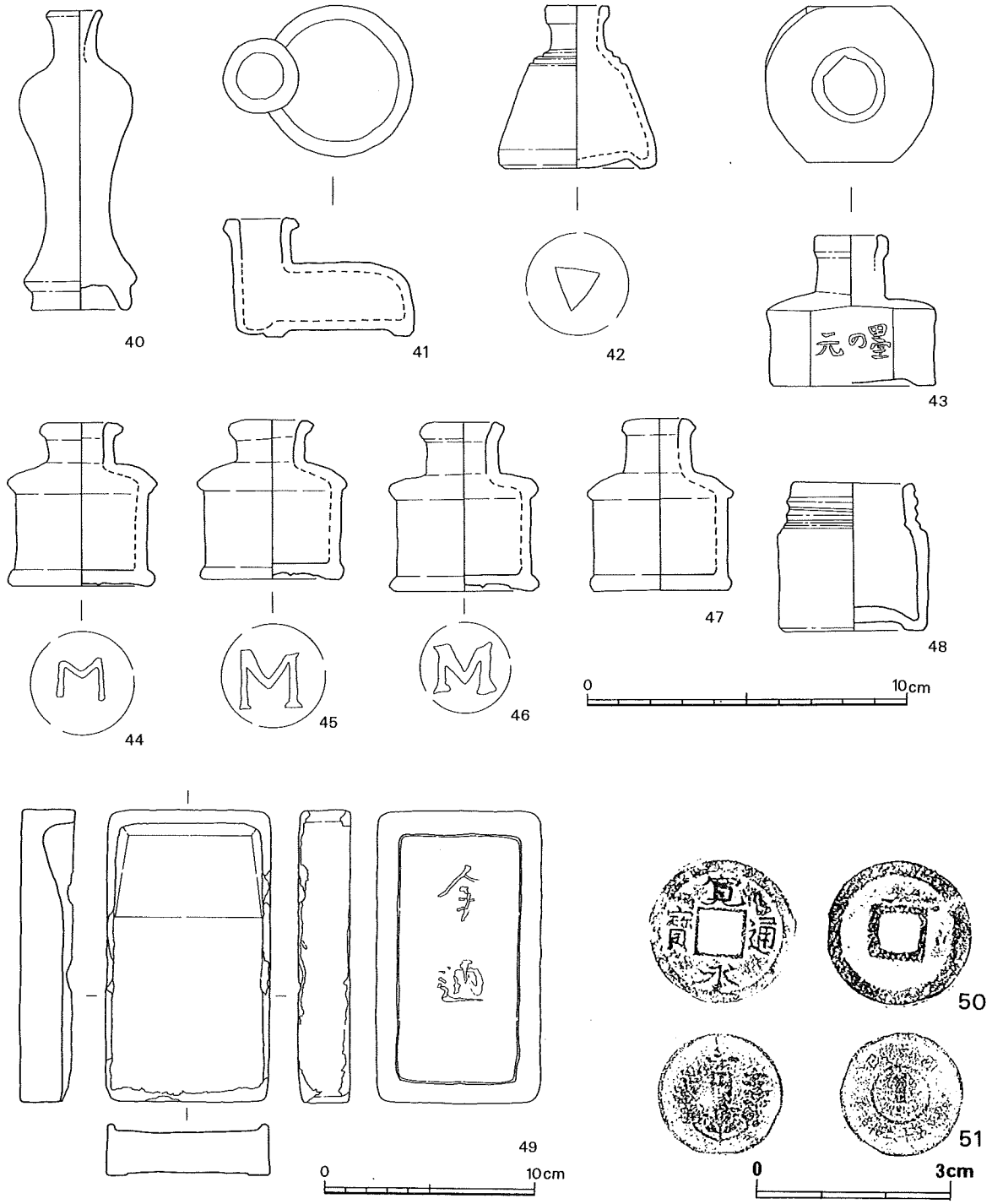


第25図　内堀内出土遺物③



第26図　内堀内出土遺物④

る。尻部から玉縁部まで2.4cmを測る。37は丸瓦。器面は灰白色を呈し，内面叩き整形としている。尻部から玉縁部まで3.5cmを測る。38は丸瓦。暗黄赤色を呈し，内面叩き整形としている。尻部から玉縁まで2.9cmを測る。39は本谷瓦の右側にあたる。器面は黒色を呈し，内面叩き成形としている。尻部から玉縁部まで3.2cmを測る。40は一輪挿しの小瓶。畳付以外はコバルトブルーで着色する。



第27図　内堀内出土遺物⑤

41～47はインクビンのガラス製品。いずれも旧体育館建設以前に堀内へ投棄された資料で昭和30年代前半までに使用された資料である。41と42は透明なガラスを使用。42は外面底部に△形が入る。43～47は青味の色を呈する。43は「墨の元」の文字が側面にある。44～46は外面底部にMのマークがある。47は無字である。48は口の広いビンで青味の色を呈する。49は硯石。中央部が使用ですり減る。裏面に「今道」の文字がある。素材は輝石安山岩を用いている。50は新寛永通寶。51は昭和25年発行の青銅製の１円。

Ⅵ 平成10年度２次調査（所在地：長崎県福江市福江町字東町７番地）

１調査の概要（第28図）

調査は，五島高校体育館全面改修に伴う渡り廊下及びスロープの基礎工事において確認した遺構を記録保存の目的で実施した。

調査区は，Ⅰ～Ⅲ区を設定し，精査を行った。

Ⅰ区は，本丸跡の南側の県指定石垣から校舎側へ約12m北側部分におけるスロープの基礎工事区域である。４層までの約0.5mが攪乱を受けていたが赤褐色土の地山面からは，柱穴，県指定石垣の裏込め石，石田城築城以前の石垣等を検出した。

Ⅱ区は，大手門の虎口部にあたる。遺構の検出は認められず瓦片が数点出土に留まる。

Ⅲ区は，内堀部分にあたり常に湧水が認められた。遺物は瓦片数点が出土したに留まる。

２土層（第28図）

Ⅰ区は１層～５層までが攪乱を受け近年の遺物が混入していた。６層以下は近年の遺物の混入はなく築城時の本丸整地土と思われる。

１層は砂利層。２層は茶褐色土層。３層は茶褐色土に炭が混入する。４層は瓦・漆喰等が混じる暗赤褐色土層。５層は明黄色土層。６層は淡灰黄色土層。７層は黄色粘質土層。８層は黄赤色粘質土層(地山)。土層北側の落ち込みは，配管工事による近年の土壙。

Ⅱ区は１層が約１m埋土されていた。２層は赤褐色粘質土がわずかに堆積する。３層は赤褐色の地山となっていた。

Ⅲ区は１層の埋土が約１m認められた。２層は堀に堆積した潟土が約50cm堆積していた。

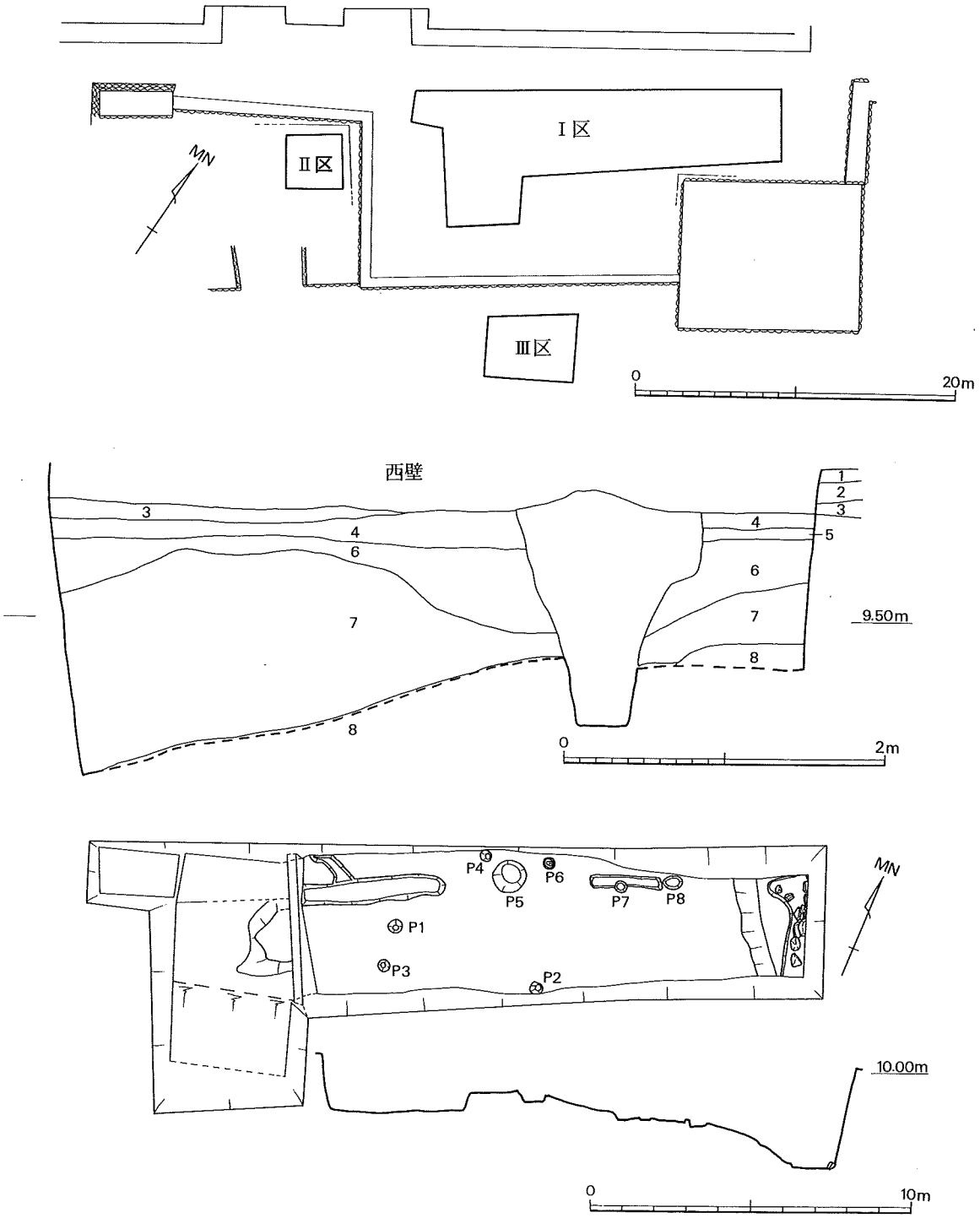
３遺構（第28図・第29図）

１区は築城期の柱穴と，石垣裏込石，築城以前の石垣を確認している。

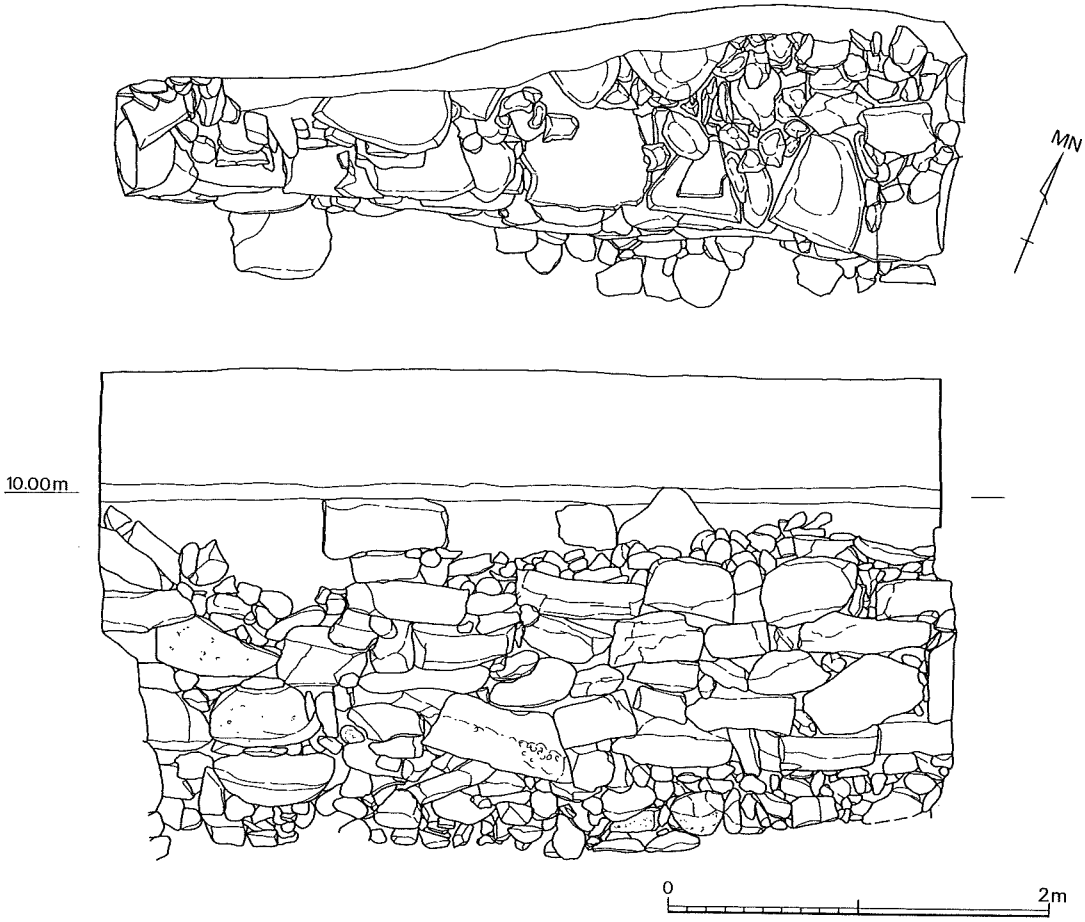
柱穴は，８箇所検出し，Ｐ１・Ｐ２から瓦片が出土している。柱穴の深さはＰ１は76.7cm。Ｐ２は47.1cm。Ｐ３は85.7cm。Ｐ４は69.9cm。Ｐ５は32.8cm。Ｐ６は47.5cm。Ｐ７は9.7cm。Ｐ８は8.4cmをそれぞれ測る。トレンチ内の細長い２基の土壙は，配管工事の側溝掘りの跡である。

石垣遺構は，県指定石垣の裏込石を調査区南西側に確認し，東側は築城以前と見られる石垣の一部を確認している。

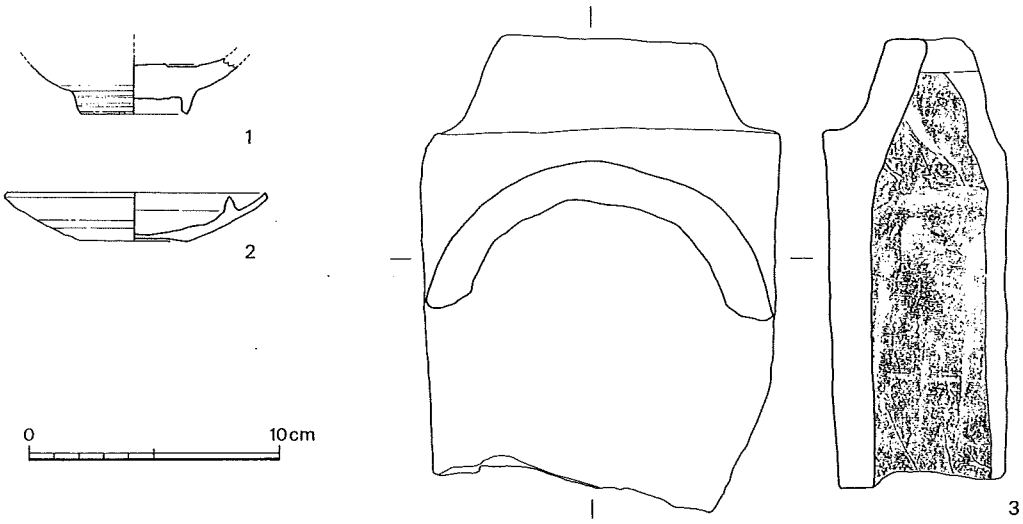
裏込の石垣の規模は，高さ約1.5mを測る。石垣構築構造は下部の地山面に15cm程度礫を敷きその上に40～50cmの長方形をした角礫を4段重ね，石垣天場に15cm程度の礫を根占に入れている。



第28図　平成10年度2次調査配置・土層・遺構図



第29図　本丸裏込石垣実測図



第30図　2次調査出土遺物①

築城以前の石垣は，40㎝大の礫を南北方向に８個配列している。石垣前面の西側は，幅約1.6ｍ，深さ約70㎝地山を掘り下げている。

４遺物

１は見込内底部を蛇の目釉剥ぎとする。畳付は床砂が付着する。圏線を高台に２本，体部下端に１本を引く。色調はやや青味を帯びた白色を呈したクラワンカ茶碗。２は鍔を有する灯明皿。鍔と内面の境に１ヶ所抉り部分を設けている。色調は口縁部から見込で透明釉を掛け，体部以下は無釉としてる。火を受け暗灰色となった部分が４ヶ所認められる。色調は淡黄灰色を呈する。３は丸瓦。暗灰色を呈し，やや風化する。底部から玉縁部まで3.4㎝を測る。裏面はナデ成形としている。

Ⅶ 平成11年度調査（所在地：長崎県福江市池田町１－１）

１調査の概要（第31図）

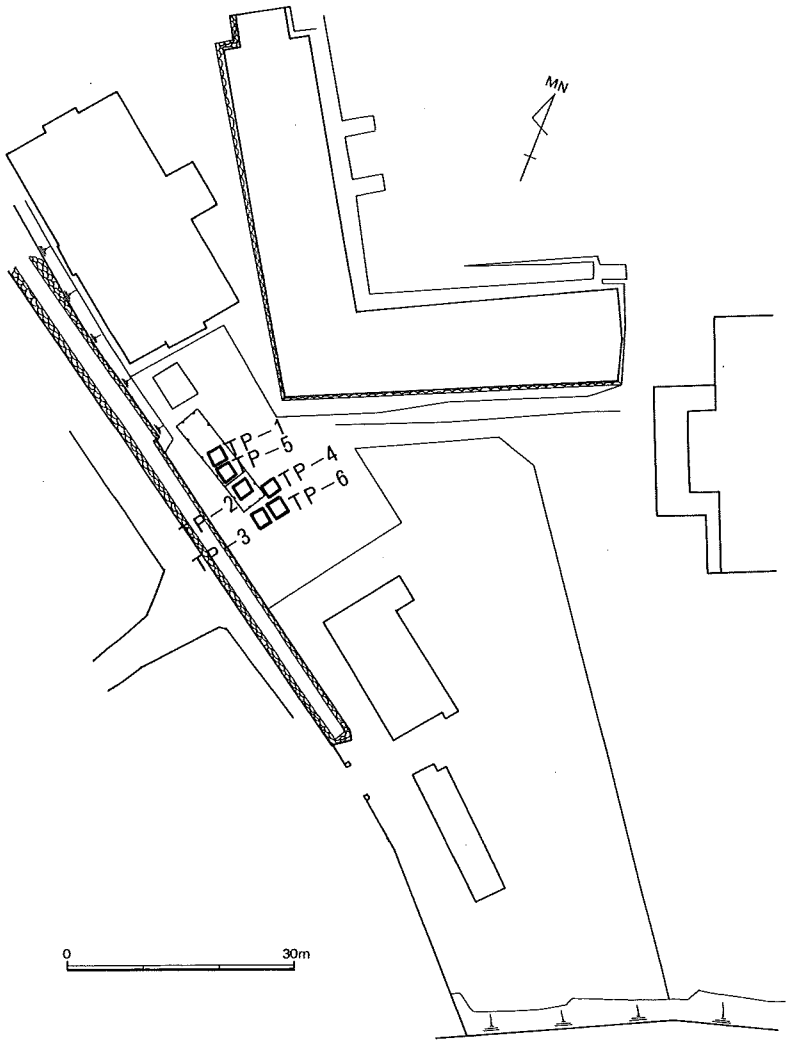
調査は，クラブハウス全面改修に伴う範囲確認調査を計画し状況によっては本調査へ移行することも含んで，平成11年６月21日から現地での発掘調査を実施した。

試掘坑は当初４箇所設定し，精査を行い遺構・遺物遺物包含層を確認したため発掘面積を８㎡追加し，併せて６月29日の間に本調査を実施した。

調査区は，任意にＴＰ－１・ＴＰ－２・ＴＰ－３・ＴＰ－４の試掘番号を付し，追加調査については続けてＴＰ－５・ＴＰ－６の記号を付した。

土層（第32図）

基本層序は１層は砂利層。２層は暗黄色土層。３層は



第31図　平成11年度調査配置図

茶褐色土層。４層は黒色炭化層。５層は暗灰色土。６層は淡黄色土（地山）である。各調査区で共通した土層は１層・３層・４層があり，５層の灰色土についてはＴＰ－５とＴＰ－４では確認できなかった。１層と２層については，近年の陶磁器類が出土しており，旧クラブハウス建設時の整地面と考えられる。また，３層については，昭和30年代まで体育館が武道館・クラブハウス建設以前にあり，この体育館建設時の整地層が該当する。４層以下５層までが江戸期の包含層である。

ＴＰ－１は，薄い炭の層が堆積し，以下に近世陶磁器の包含層が認められた。ＴＰ－２も同様に炭化層の下に遺物包含層を確認した。ＴＰ－３は，赤褐色粘質土を挟んで上下に炭化層を確認した。遺物包含層は，粘質土層下の４層炭化層から５層灰色土層に近世陶磁器の出土が認められた。ＴＰ－４は，砂利層下に旧クラブハウスの基礎コンクリートが打ち込まれ，３層の茶褐色土層までおよんでいる。

３層以下に層の乱れがあり，４層の黒色炭化層が南壁で途切れ，地山上面に礫の堆積が認められた。ＴＰ－５はコンクリート基礎が３層茶褐色土層までおよんでいる。ＴＰ－６は２層に火をうけて赤味をもつ明赤色土があり，以下に４層の黒色炭化層，５層に灰色土層が堆積している。なお，北壁側は機械掘削による攪乱を受けている。

遺構（第32図）

ＴＰ－４とＴＰ－６に石列が認められた。地山上面に円礫東西方向と南北方向に配置している。

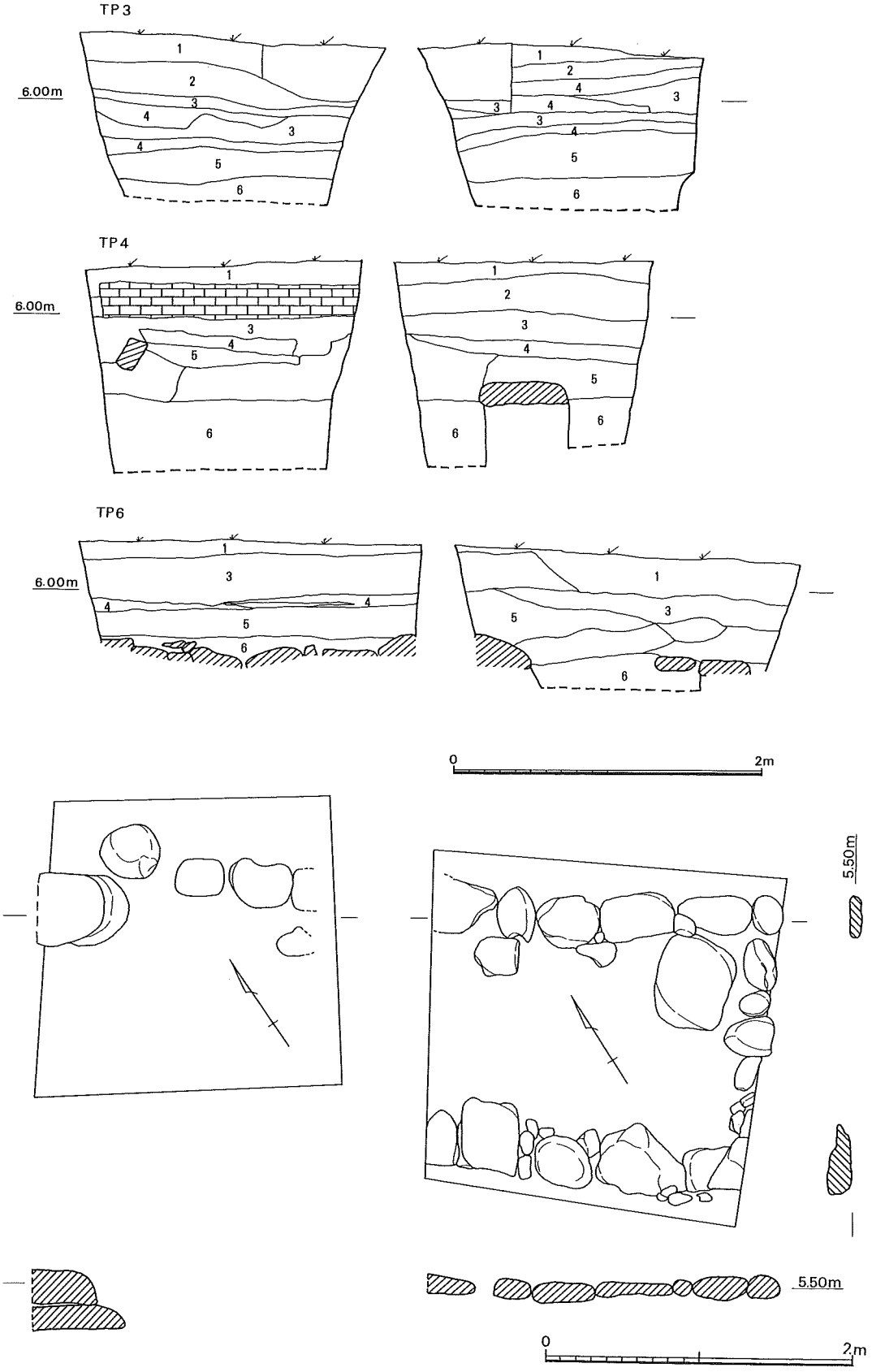
ＴＰ－６は南北方向に50㎝大の円礫を２列平行に配し，東西方向は30㎝大の円礫を並べている。南北方向の石列と石列の間は地山となり，南東角に60㎝大のやや大きめの礫を１点敷いている。

ＴＰ－４は南北方向を確認している。２列存在していたと見られるが，基礎工事によって取り除かれている。北壁壁面に入り込んだ礫が最大40㎝を測る。

３遺物

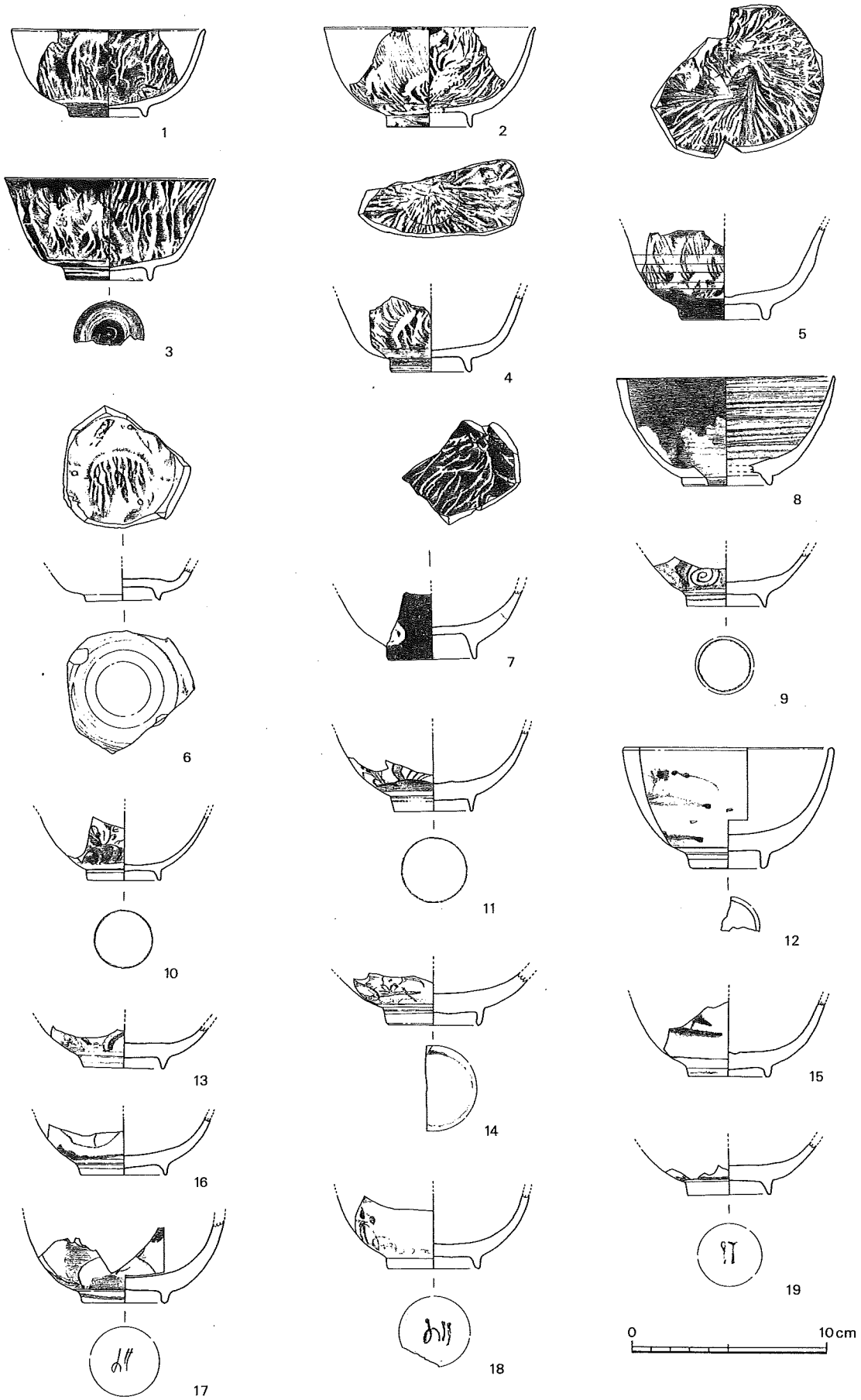
石蔵跡出土遺物（第33図～第38図）

１～８は刷毛目文様の京焼き風茶碗。畳付に小砂がわずかに付着する。１は白土を内面と外面体部を飾る。緻密な粘土を用い薄い器肉を保つ。畳付に小砂が付着器形は，体部丸味を持つ。２は内外面打刷毛目を高台まで施す。暗灰黒色の胎土使用。３は白土を打刷毛目で内面と外面体部を飾る。暗小豆色を呈する。体部下端がやや張って，口縁部へ直線的にのびる。小砂が畳付に付着する。４も１と同様の技法で装飾し，器肉がやや厚い。５は白土を打刷毛目で内面と外面体部を飾る。高台畳付内側に小砂の付着し，胎土の色調に暗灰黒色と赤褐色があり焼成むらと考えられる。６も白土を用いた打刷毛目で内定見込を装飾する。畳付に小砂が付着する。７は外面に白土を用いて蛍手とし，内面は打刷毛目としている。やや高めの高台となる。胎土の色調は，赤褐色を呈する。８は外面白土で吹刷毛目とし，内面は巻刷毛目としている。畳付に小砂が残る。色調は青灰色を呈し，胎土の色調も同様で緻密な粘土を用いる。９は渦と草花の文様構成の丸碗。高台に圏線１本と外面に２本の圏線を引き，さらに体部下端に１本圏線を巡らす。見込に白色の気泡が見られ，畳付は無釉としている。10は外面に草花文を描き，圏線を高台に２本，胴部下端に１本引く。高台内に圏線１本を引く。畳付は無釉と



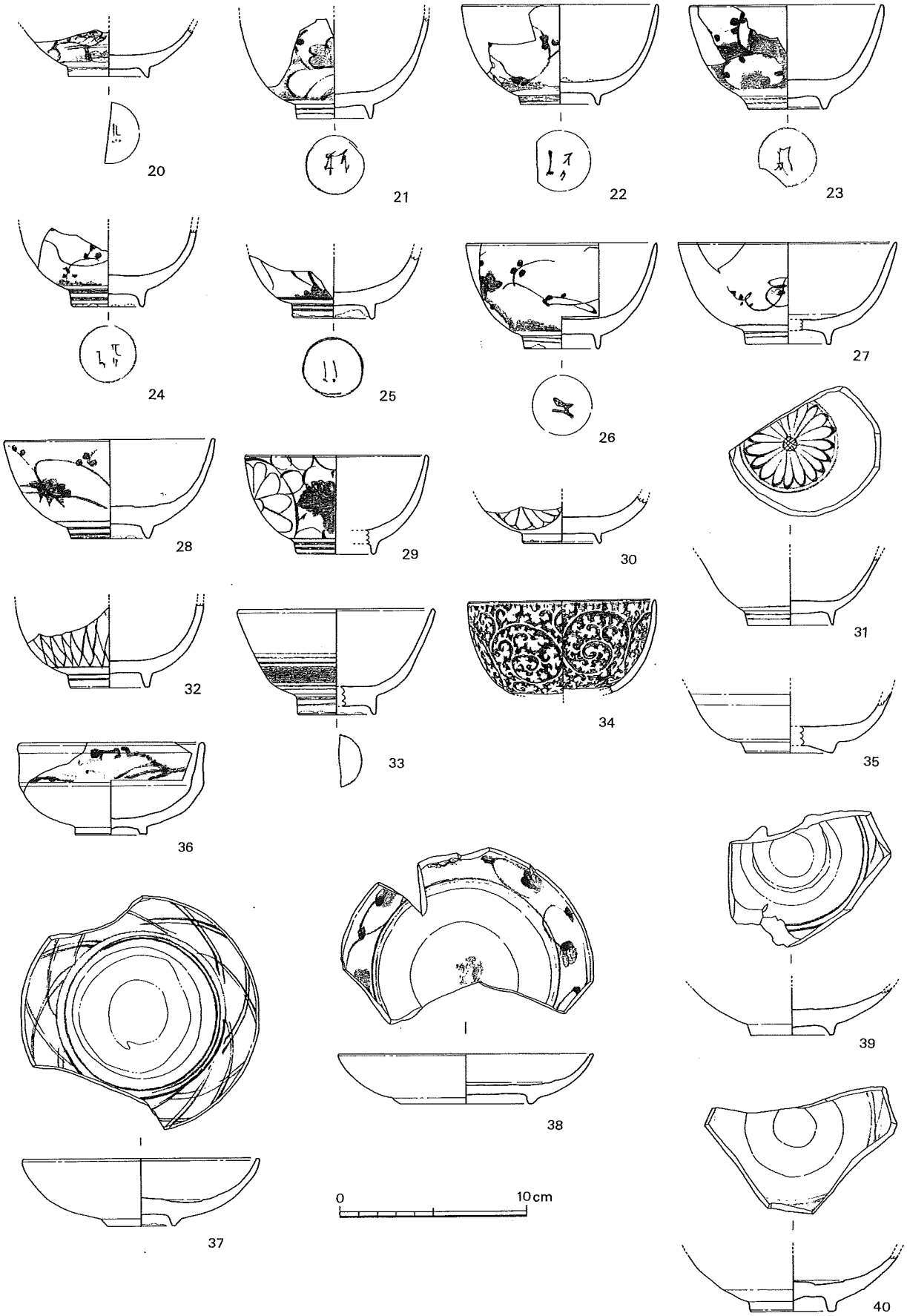
第32図　平成11年度調査土層・遺構実測図

している。11は外面体部に草花文を描き，圏線は10と同様に高台に２本と胴部下端に１本と高台内に１本を引く。畳付に床砂が付着する。内面見込に小砂が落ちて，小粒の火膨れを生じている。12は圏線を11と同様に外面に３本と高台内に１本を引く。外面の文様は草花と風景を描くが，内面は文様なし。また，畳付は無釉としている。13は高台に２本と体部下端に１本の圏線を引き，外面のみに草花文を描き高台の一部に火膨れをおこす。畳付は無釉としている。14は外面に草花文を描き圏線を胴部下端に１本，高台に２本と高台内に１本圏線を引く。見込に茶色の斑点が見られる。畳付は無釉としている。15は淡い呉須で土手文を体部に描く。胎土は灰白色を呈し，色調は鼠色を呈する。高台内に釉垂れがみられるが，畳付は無釉としている。16は胎土が黄色味をおび，内外面が緑ががった色調をなし，草花文を描く呉須の発色が青味がかった緑色を呈する。圏線は高台２本，体部下端１本を引く。畳付に釉薬が垂れ床砂が付着する。17は雪輪草花文を体部に配し，圏線を胴部下端部に１本，高台に２本引くが内面は文様無し。畳付は無釉とし，床砂が付着する。高台内は，崩し銘款を入れる。胎土は灰色を呈し，体部色調は灰色で文様の呉須が薄い緑色を呈する。18は雪輪草花文とし，圏線を体部下端に１本と高台に２本を引く。畳付は無釉で小砂が付着する。高台内は１本の圏線と銘款を描く。内外面の体部の色調は青白色を呈する。19は圏線を体部下端に１本と高台に２本引く。高台内に崩し銘款を書く。畳付は無釉とし，わずかに床砂が付着する。20は草花文の体部に，圏線を体部下端に１本，高台に２本引く。高台内は崩し銘款を書く。畳付は無釉としている。胎土は白色で体部の色調も同様白色を呈する。21は体部に雪輪草花文を描き，圏線を体部下端に１本，高台に２本，高台内に１本の併せて４本を引く。高台内に崩し銘款を書く。見込に白色の気泡が見られる。胎土は灰白色で体部の色調は青灰色をなす。22は体部に草花文を描き，体部下端に１本と高台に２本の計３本を引く。見込内に砂粒が付着する。高台内に銘款を書き，畳付は無釉で床砂が付着する。23は雪輪草花文を体部に描く。圏線を体部下端に１本，高台に２本，高台内に１本を引く。また，高台内に銘款を書く。畳付は無釉とし，胎土は暗灰色で体部の色調も同様に暗灰色を呈する。24は体部に草花文を描き，圏線を体部下端に１本，高台に２本と高台内に１本を引く。畳付は無釉で床砂が付着し，高台内に銘款を書く。胎土は白色で青白色の体部の色調をなす。25は体部に草花文を描き，圏線を体部下端に１本，高台に２本と高台内に１本の計４本を引く。高台内に銘款を書く。焼成不良で体部色調は灰赤色を呈する。26は雪輪草花文を体部に描く。圏線は体部下端に１本，高台に２本の計３本を引く。高台内は銘款を書く。色調は，青灰色の体部としている。27は体部に草花文を描き，圏線を体部下端に１本と高台に２本を書く。畳付は無釉とし，床砂が付着する。見込は蛇の目釉剥ぎし，胎土の色調は灰白色で体部は白青色を呈する。28は体部に草花文を描き，圏線を体部下端に１本と高台に２本を引く。畳付は無釉で床砂が畳付全体に付着する。見込は蛇の目釉剥ぎを行う。色調は胎土が灰色．体部は灰青色を呈する。29は桐のコンニャク印判と菊の文様を配する碗。圏線を体部下端に１本と高台に２本引く。畳付は無釉としている。色調は胎土が灰白色で体部は青色を呈する。30は菊の文様を体部に配し，畳付に茶色の鉄釉を掛ける。色調は胎土が灰色で体部は濃青灰色を呈する。31は圏線を体部下端に１本と高台に２本の計３本を引く。見込に菊の文様を描く。畳付は無釉としている。色調は胎土が白灰

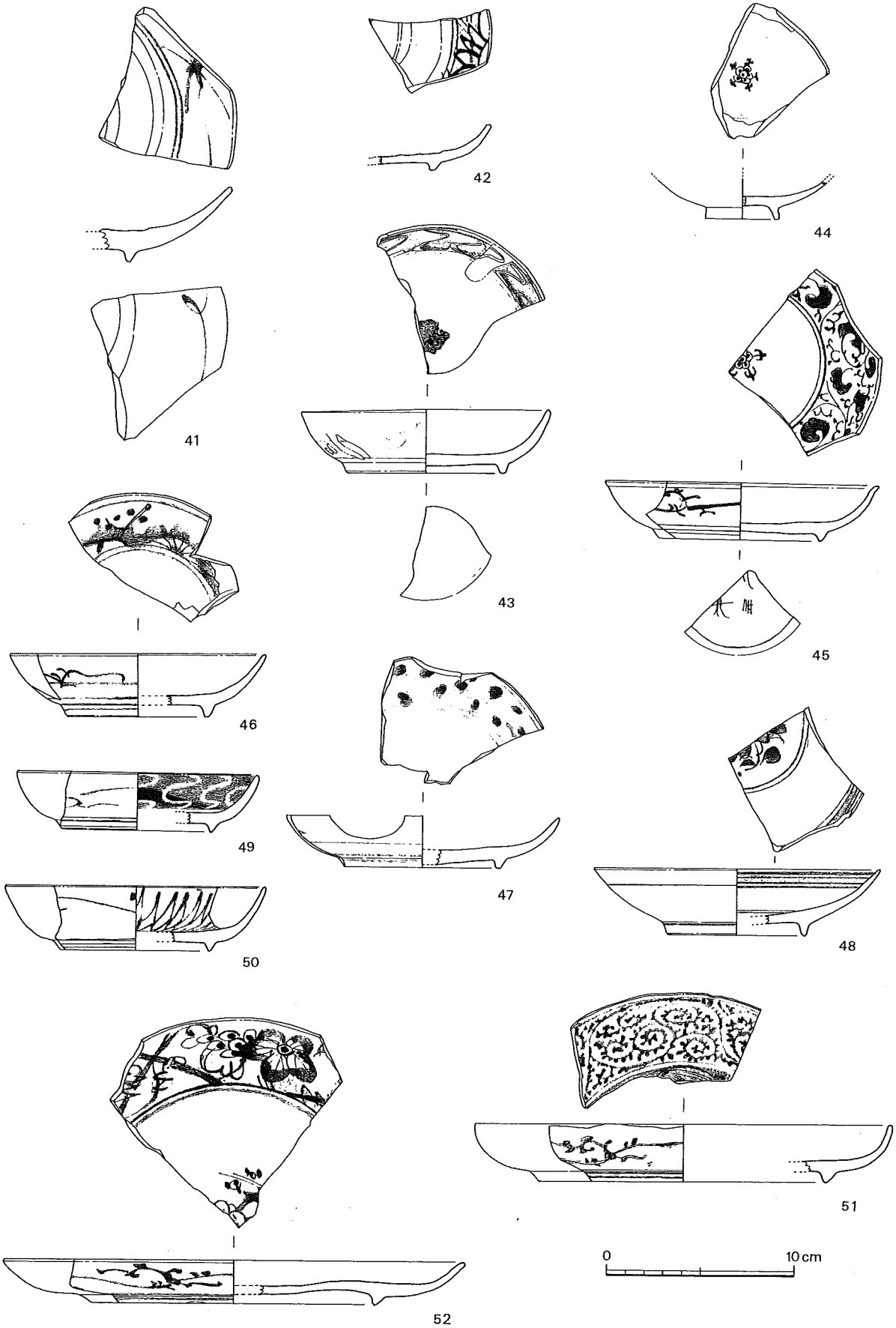


第33図　平成11年度出土遺物①

色で体部は淡青白色を呈する。32は体部に１本引きの鋸歯状の網目文を描き，圏線は体部下端に１本と高台に２本引く。畳付は無釉としている。色調は胎土が灰色で体部は淡青灰色でやや黄色味がかる。33は体部に圏線を６本引き，横縞１本を描く。さらに，高台に２本と高台内に１本の圏線を引く。畳付は床砂が付着し，色調は胎土が灰白色で体部は灰青色をなす。34は体部の内外面を唐草文様で飾る。色調は胎土・体部共に白色で青呉須で唐草を描く。35は体部に黒色と暗黄色の釉薬を掛け，内面は赤味を帯びた釉が掛かる。高台は内反高台で無釉としている。胎土の色調は灰色を呈している。36は高台を露胎とし，高台内の中心部に轆轤台の跡が付く。器形は，体部中位で折れ口縁部へ延びる。口縁部の文様を白土と鉄釉で山水文を描いた小形の鉢。色調は胎土が黄色で体部は淡黄色を呈する。37は見込蛇の目釉剥ぎし，内面に斜交線文の染付文様を配置する。高台の作りは小さく，畳付にびっしり床砂が付着する。色調は胎土が灰色で体部は灰青色を呈する。38は五弁花のコンニャク印判を見込に染付し，圏線と草花文で口縁部の内面を飾る。また，見込は釉剥ぎとし，比較的低い高台で畳付は無釉で床砂が付着する。色調は胎土が灰色で体部は灰青色をなす。39は37と同様の文様で見込を蛇の目釉剥ぎとしている。畳付は床砂が付着する。40は見込を蛇の目釉剥ぎにし，斜交線を内面に描き圏線２本を引く。乳白色の釉が畳付を除いて全面に掛かる。41は見込を蛇の目釉剥ぎにし，２本の圏線を引き，楓を描き，裏文様に唐草文を描く。畳付は無釉とするが，高台内は釉が掛かる。42は見込を蛇の目釉剥ぎし，２本の圏線を引き，鉄釉の雷文を描く。畳付は無釉とし，床砂が付着する。43は見込に淡黒色の呉須を五弁花の印判状に染付し，口縁部に淡黒色の呉須を刻文に掛ける。畳付は無釉としている。薄い黒色の裏文と圏線２本がわずかに見てとれ，体部は全体に白土が厚く掛かる。44は青磁の小皿。五弁花の手書きを見込に配し，２本の圏線を引き，畳付は無釉としている。色調は体部が青味をもち，見込は白味の強い青色を呈する。45は見込に五弁花を描き２本の圏線を引く。口縁部には花唐草を描く。高台内に大明年製の銘款を書き，圏線１本を引く。裏文に唐草文を描き，圏線を体部下端に１本と高台に２本の圏線を引く。46は圏線を見込に２本と口縁部に１本引き，胴部に山水文を描く。裏文は唐草文を描き，圏線を体部に２本，高台に２本と高台内に１本引く。畳付は無釉で床砂が付着する。色調は胎土が暗灰色で体部は灰色を呈する。47は圏線を見込に２本と口縁部に１本の圏線を引き，草花文で体部を埋める。裏文は唐草文を描き，圏線を体部下端に２本，高台に１本と高台内に１本を引く。畳付に床砂がびっしりと付着し，高台内も付着する。色調は胎土は灰色で体部は青味がかった灰色を呈する。48は見込に草花文を描き，圏線２本を引く。口縁部に４本の圏線を引き，横縞を３本の圏線に掛ける。裏文は口縁部に圏線１本と高台に１本を引く。畳付は無釉とし，小砂がわずかに付く。色調は青味のある白色を呈する。49は墨弾き技法による淡青色に白抜きのよろけ縞が体部内面を飾る。見込の周囲に圏線を１本引く。裏文は体部に唐草文で飾り，圏線を体部下端に１本，高台に２本と高台内に１本を引く。畳付は無釉とし，床砂が付着する。色調は胎土が白色で体部は青味を帯びた白色を呈する。50は圏線を見込周囲に２本引き，体部内面に鋸歯状の網目文を描く。裏文は唐草文を描き，圏線を体部下端に１本，高台に２本と高台内に１本を引く。畳付は無釉としている。色調は青味の強い灰色を呈する。51は蛸唐草文を見込外周から口縁部にかけて描く輪花の皿。裏文は

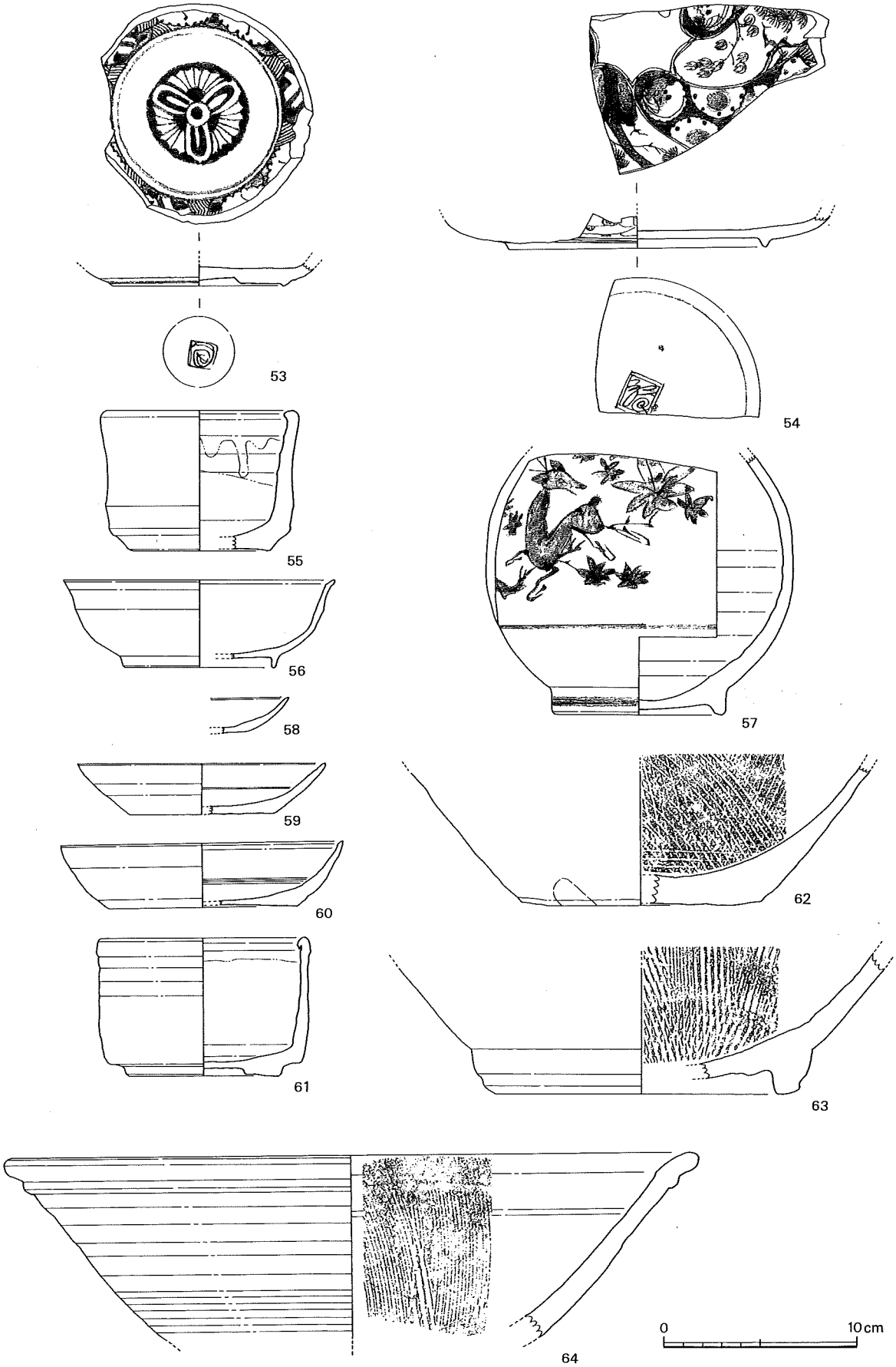


第34図　平成11年度出土遺物②



第35図　平成11年度出土遺物③

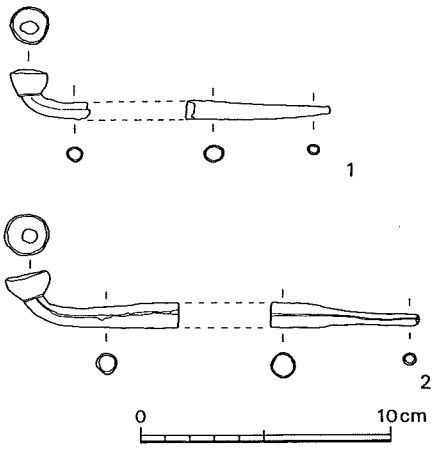
唐草文を描き，圏線を体部下端に１本と高台に２本引く。畳付は無釉とし，小砂が付着する。52は蔓草と花弁を体部に描き，見込に草文を配し，その外周に２本の圏線を引く。裏文に唐草文を描き，圏線を体部下端に１本，高台に２本と高台内に１本の計４本を引く。畳付は無釉としている。色調は胎土が白色に細粒の黒斑混じりで体部は青味の弱い白色を呈する。53は見込に三方割銀杏を描き，見込外周に２本の圏線を引く。高台は蛇の目凹み形高台とし，高台内の中央部に山と福の銘款を書く。チャツの床砂が付着する。圏線は体部下端に１本と高台に２本引く。色調は胎土が灰白色で体部は青味の強い白色を呈する。54は見込に雪輪と草花文を描き，裏文は唐草文を描き，圏線を体部下端に１本，高台に２本と高台内に１本を引く。また高台内に福の銘款を書く。畳付は無軸としてハリ支え跡を残す。色調は胎土はやや粗い灰色土に細粒の黒斑が混じる。体部は淡青味を帯びた白色を呈する。55は半筒形の青磁香炉。器形は蛇の目凹形高台とし，底部からの立ち上がりが丸味をもって屈曲し口縁部へ延び，口縁端部を内側へ摘み出す。釉薬は外面と内面約１／２程に青緑色の釉を掛け，それ以外は無釉としている。高台内も無釉としている。胎土は暗灰色に細粒の黒斑が混じる。56は白磁碗。畳付は無釉としている。器形は体部で丸味をもって外反し，口縁部でさらに外反する。胎土は白灰色に小細粒の黒斑が混じる。57は体部に鹿と楓を描き，圏線を体部下端に１本と高台に２本引く。畳付は無釉としている。（ⅢからⅥ期1650～1750年）器形は高台から丸く膨らみをもって立ち上がる。内面は無釉で轆轤成形跡を残す。色調は胎土が灰白色，体部は青味をもった白色を呈する。58は土師器皿。糸切りの底部で器形は，底部から丸味をもって立ち上がる。口唇部をやや尖り気味に成形。内面に茶色の丹が付着。胎土は緻密な粘土を使用する。焼成はやや甘い。59は轆轤水引成形が体部に残る。底部はナデ成形し，糸切り跡が消失する。器形は底部立ち上がりからやや内湾気味に口縁部へ移行し，口縁部は尖り気味に成形。色調は底部及び内底が黒色を呈し，体部内外面ともに淡赤黄色を呈する土師皿で焼成は堅牢。60は器形は底部を平坦に削り落とし，内湾気味に口縁部へ立ち上がる。口唇部はつまみ上げて納める。体部に水引き成形痕が残る。口縁部の周辺に煤の付着が見られる。内面に２本の沈線を引く土師器皿。焼成はやや甘く，色調は全体的に暗茶褐色を呈する。61は筒形の火入れ具。外面は黄色味を帯びた暗茶褐色の鉄釉を掛ける。内面は口縁部以下を露胎とする。高台は無釉とし，蛇目凹形高台としている。器形は体部下端から直線的に口縁部へ立ち上がり，口唇部を内側へ折り曲げている。胎土は赤褐色を呈し，緻密な粘土を使用。62は底部に糸切り離し痕を残す。体部は轆轤形成の水引ナデ成形を行う。擂目14本を１単位とする擂り鉢（Ⅲ期1650～1690年）。色調は赤褐色を呈する。63は高台貼付で高台内に轆轤水引の成形を行う。畳付は無釉とし，薄く床砂が付着。体部の内外ともに茶褐色の鉄釉掛かる。擂目は13本を１単位とする擂り鉢。胎土は赤褐色で，粗い粘土使用。64は全面に鉄釉を施釉し，暗緑茶色を呈する。擂目は13本を１単位とする。口縁部下に断面四角形の段を有する擂り鉢。胎土は暗赤褐色を呈する。



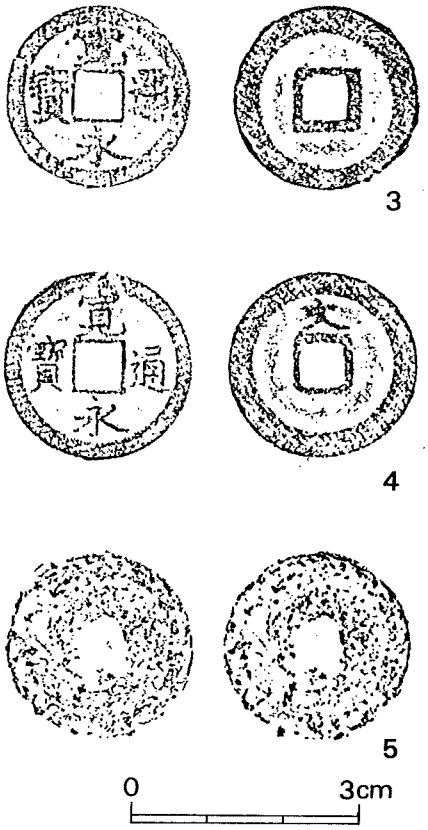
第36図　平成11年度出土遺物④

その他の遺物

1はキセル。火皿は上部で口径1.4cmで臼形を呈する。火皿と脂返しの境に接合の跡があり，脂返しはやや湾曲している。吸い口は薄い銅板を丸めて繋ぎ合わせる。2はキセル。火皿の口径が1.6cmの丸味を持った碗形を呈する。火皿と脂返しの境に一条の接合跡が残る。1よりやや，脂返しの湾曲が強い。吸い口は薄い1枚銅板を丸めて繋ぎ合わせている。3は古寛永通寶。4は新寛永通寶で背に「文」の文字を刻印。5は錆のため「通」の文字が判読できるが，これ以外は判読不能。



第37図　平成11年度出土遺物⑤



第38図　平成11年度出土遺物⑥

Ⅷ　まとめ

五島藩は，慶長19年（1614）の唐船貿易を長崎のみにされた時点で財政難が急速に進み，そのしわ寄せは農民・魚民・町民への重税と三年奉公制のなかで隷属民として就かせるといった経済状態であった。このような重税に対し，野々切村一揆（1796年）・蕨村一揆（1820年）・岐宿百姓一揆（1823年）等々が起こっている。加えて飢饉の頻発と鯨漁の下降傾向が続き，財政逼迫の状況が江戸末期まで改善されることなく継続している状況であった。

しかし，五島藩主にとっては，江戸初期からの願望にこだわり嘉永2年（1849）に江戸幕府から築城の許可がおり，工費二万両を幕府その他から一万両の借財で文久3年（1863）完成させるが，僅か9年で明治新政府に解体される結果に終わっている。

調査において確認した主な遺構は，内郭における各門の石垣及び暗渠排水施設，内堀，県指定石垣の裏込石，盛り土による築城基礎の版築状況，石蔵の基礎石列等が上げられる。

石垣を築いている各門に設置している切り石は，福江川の川石を用い内堀と本丸外郭の角石以外の石垣は海岸の円礫を転用し費用の削減化を図っている。暗渠排水は，築山門に2ヶ所あり，1ヶ所については昭和初期の所産と考えられたが，門西側にある暗渠排水施設は，地山を削平した上に扁平な側面石と厚みのある蓋石で造られていた。また，めがね橋門においては，袖石垣に沿って石段の下に排水施設を設けていたことが明らかとなった。

石垣に関しては，この他に平成１１年度調査において，50㎝大の円礫を２列平行に幅約1.8ｍで，地山面に設置した石列を確認している。これは，絵図にある石蔵の基礎跡を想定させるものであった。

遺物は，明治から昭和にかけての遺物が多く散在し，本丸部分が学校建設によって削平と埋土の繰り返しを受けていることを物語る資料と言える。また内堀内においても同様で旧体育館建設以前に学校関係の用具が投棄と清掃の繰り返しによって，城に関する資料が取り除かれている状況が明らかとなった。このような状況ではあったものの，本丸調査の遺物に17世紀代の資料が出土し，さらに体育館建設に伴う南側スロープ建設予定地の調査において，現地表面から約２ｍの深さに40㎝大の石を南北方向に設置した石垣を確認しており，築城以前の館跡の存在を窺わせている。また，平成11年度の石蔵跡においては，多量の京焼き風茶碗である現川焼や波佐見焼きが18世紀中頃から後半にかけて城内で使われたと見られ，19世紀代の遺物の混入が見られない状況であった。その後石蔵が解体或いは火災を受けて，立て直されたていたことが焼土及び炭化木片から推測される。

瓦に関しては，築山門跡において唐花菱草文様を付けた鳥伏間の出土があり，五島家の家紋を門の棟瓦として用いていたことが資料として確認された。

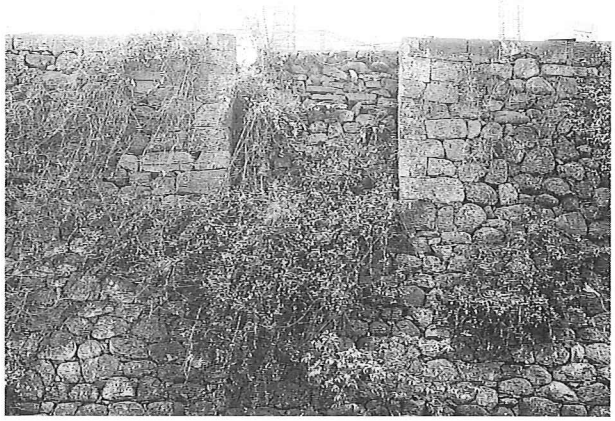
最後に調査を実施する上で，福江市教育委員会の松崎義治氏には作業員の手配や調査機材の借用等々快く引き受けていただきありがとうございました。また，瓦関係の資料につきましては，大分県教育委員会吉田寛氏に提供と教示をうけました。記してお礼いたします。

故人となられた長崎県教育庁文化課　係長（副参事）藤田和裕氏には，体調が良くない状況で平成９年度の調査を一緒に行っていたが，平成12年体調が改善されることなく帰らぬ人となられた。

ここに，ご冥福をお祈りいたします。

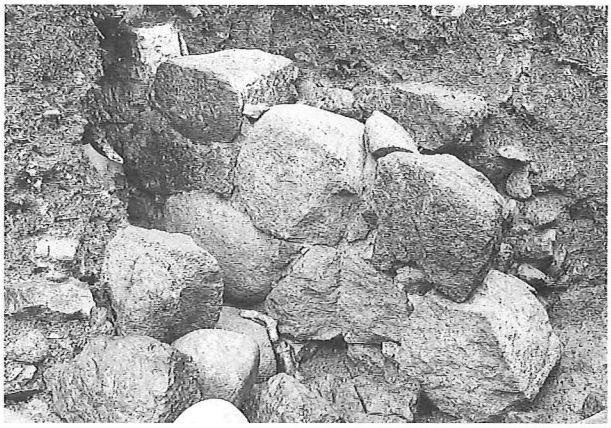
図　　版

石田城跡西門

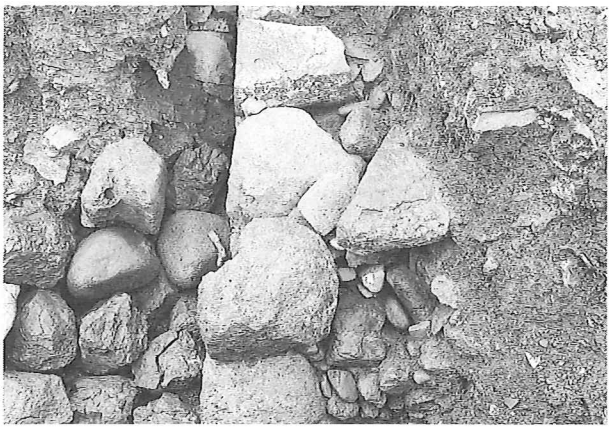


御築山門

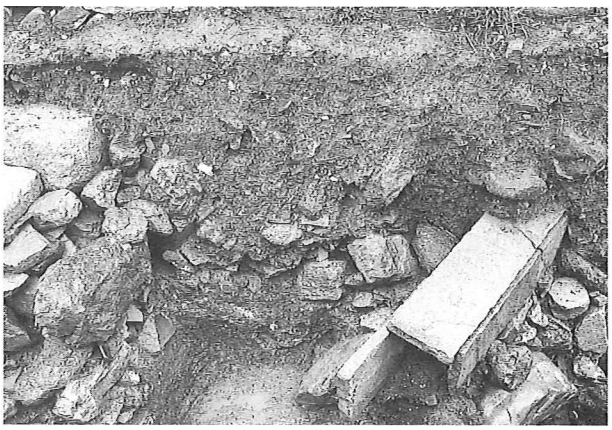
御築山門調査区



御築山門石垣



御築山門石垣

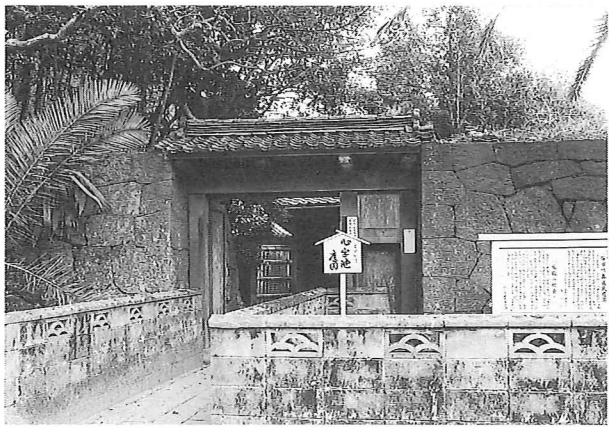


御築山門暗渠

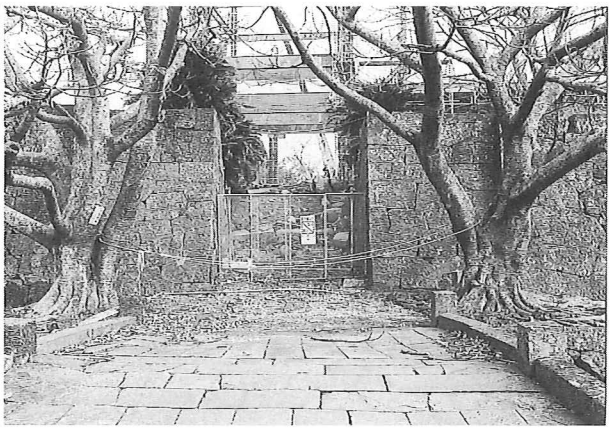
御築山門暗渠

調査風景

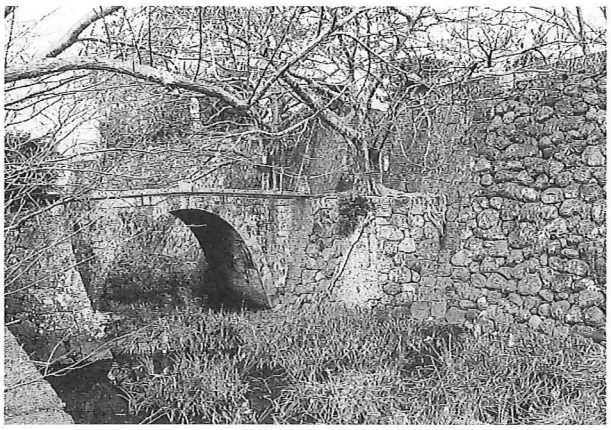
図版 2



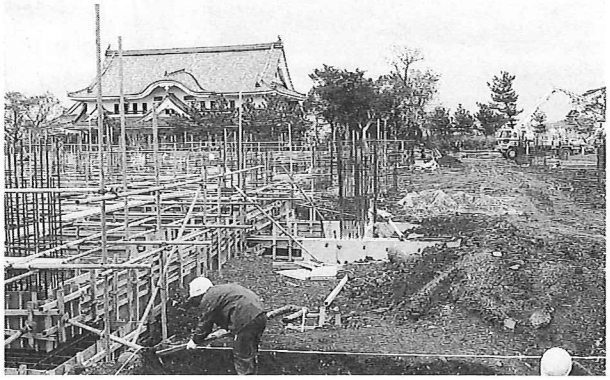
五島家



大手門

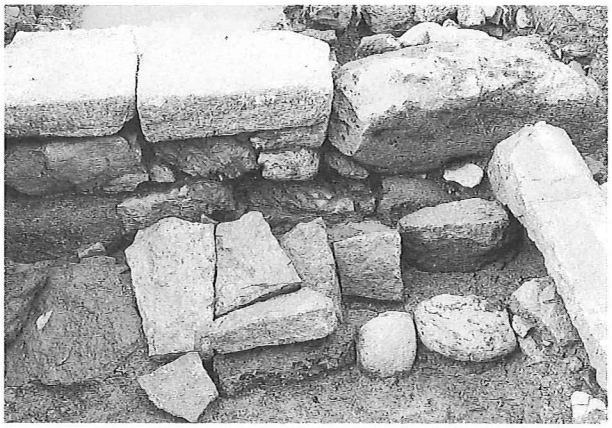


めがね橋門



工事状況

めがね橋門遺構



めがね橋門遺構

めがね橋門石垣

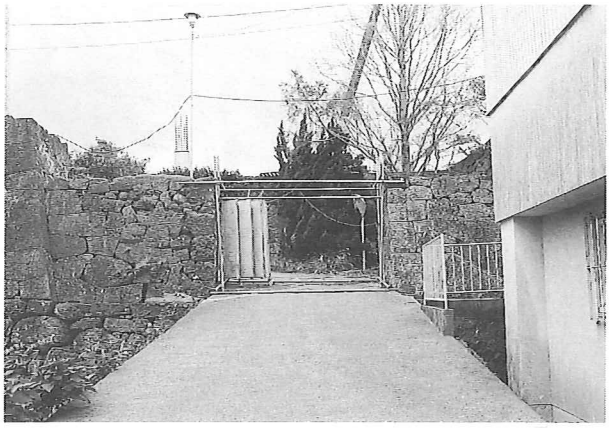
調査風景

中　門

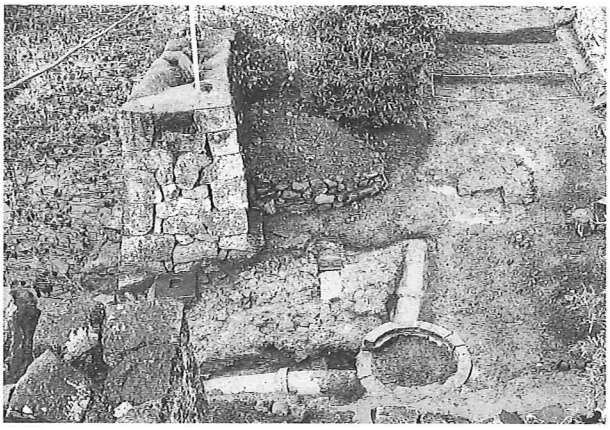
石　敷

中　門

門礎石

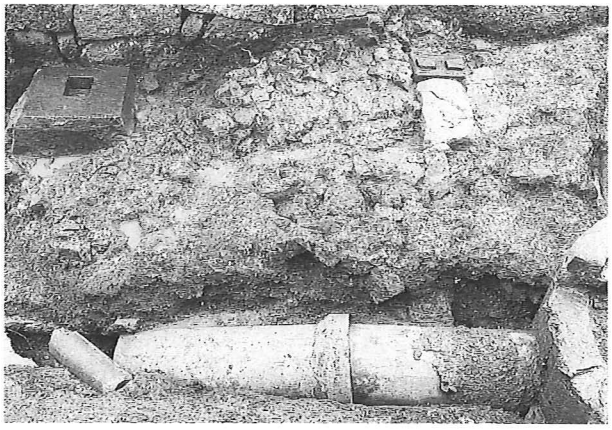


大手門



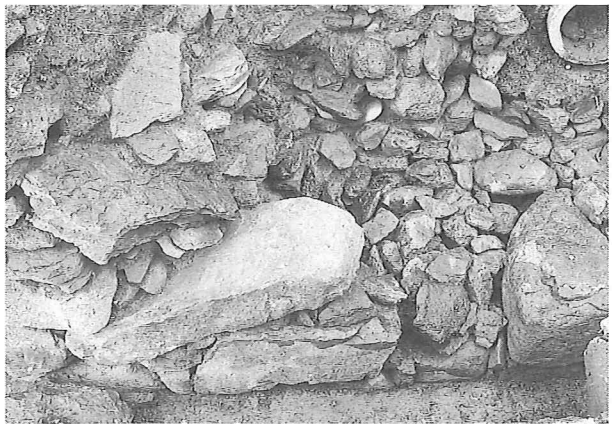
大手門調査状況

大手門礎石

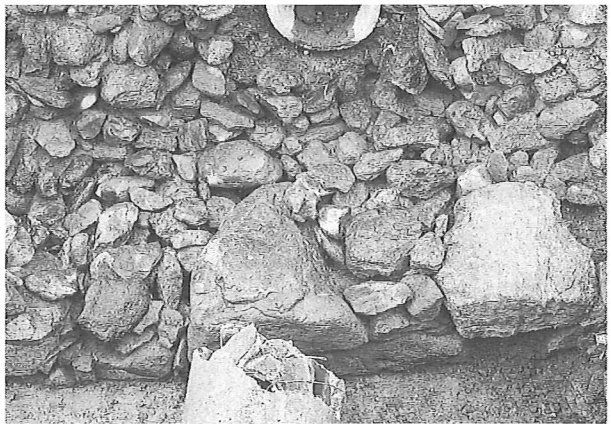


大手門礎石

図版 4

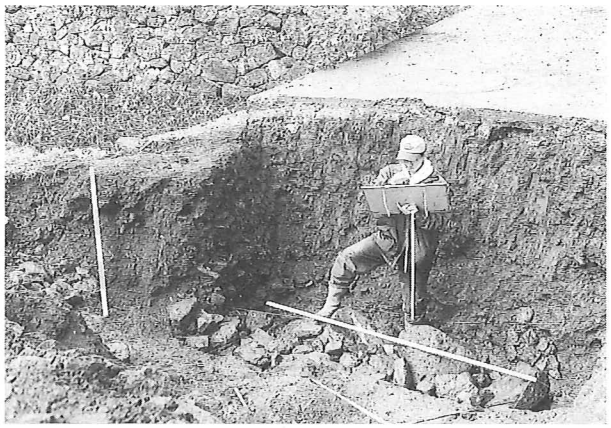


大手門石垣

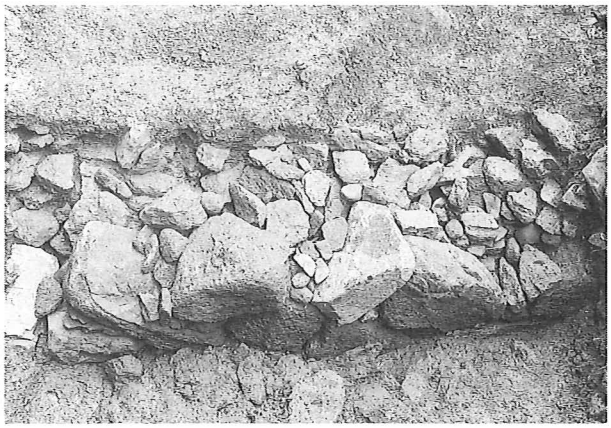


大手門石垣

調査風景

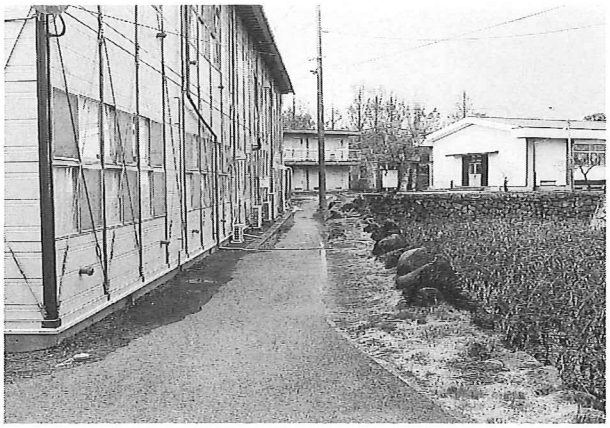


調査風景

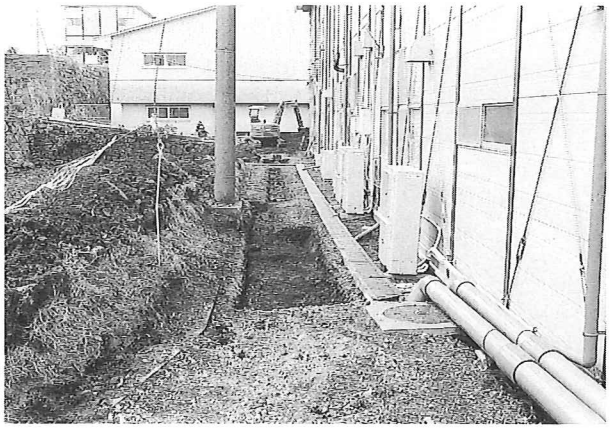


内堀石垣

内堀石垣

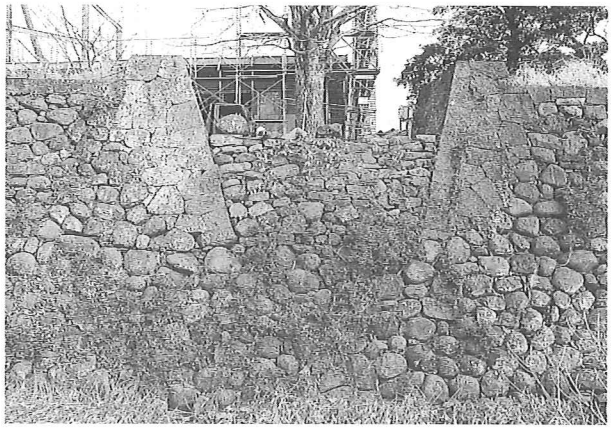


会 計 跡



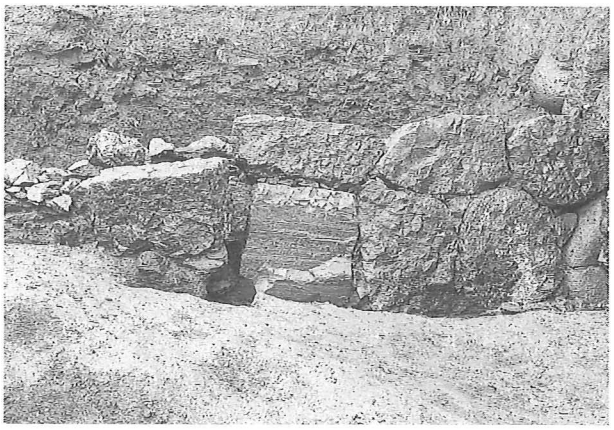
会 計 跡

お 船 蔵



中仕切門

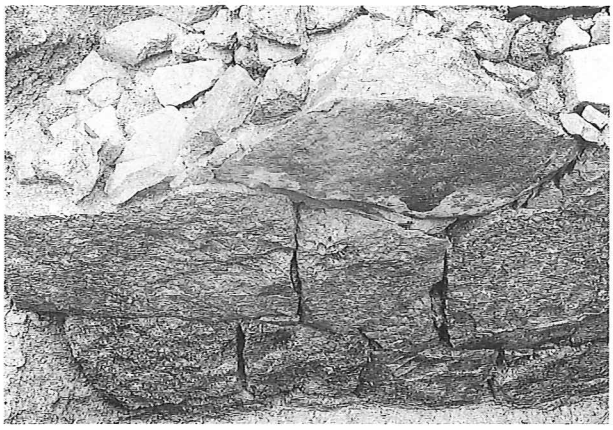
中仕切門石垣



中仕切門石垣

中仕切門石垣

中仕切門石垣

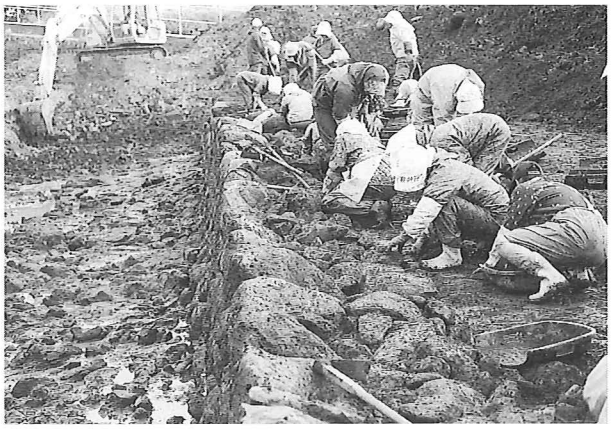


本丸内郭石垣

本丸内郭石垣

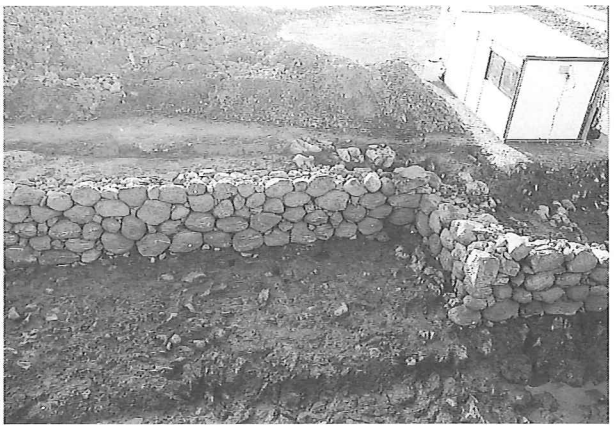
図版 6

内堀石垣

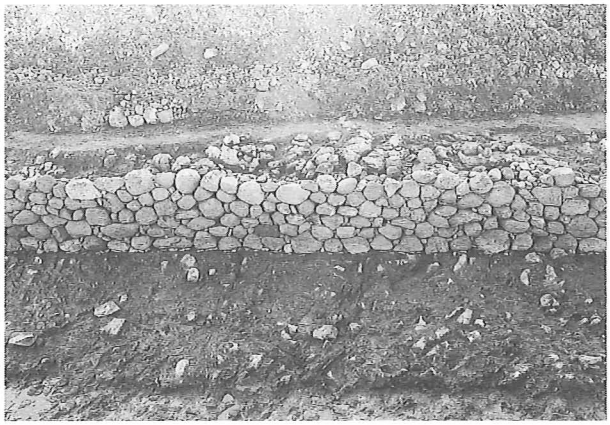


調査風景

内堀石垣



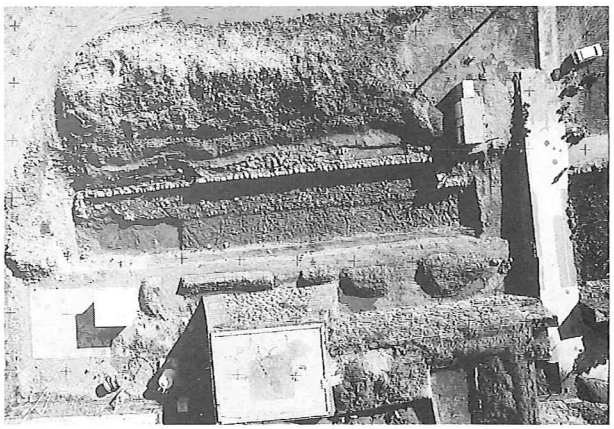
内堀石垣



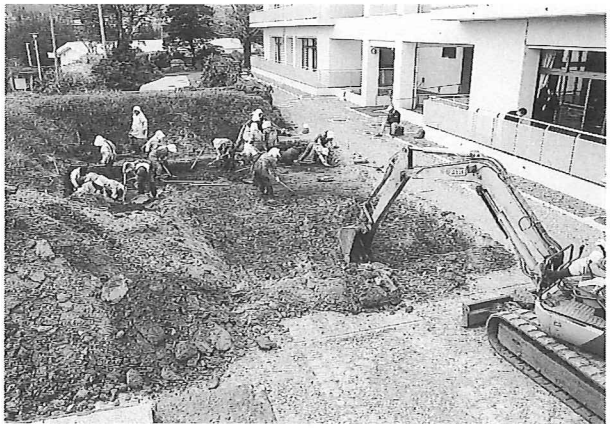
内堀石垣

内堀石垣

内堀石垣

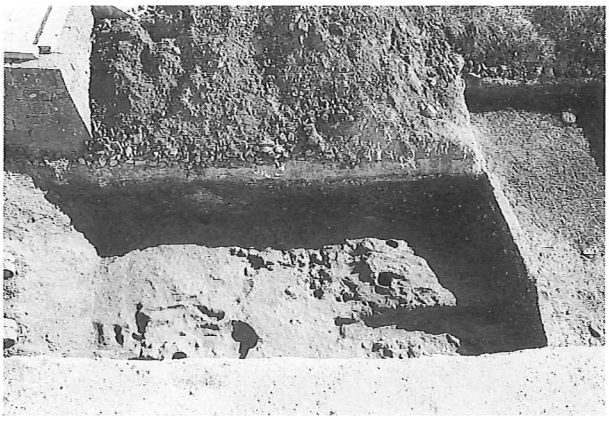


調査区全景



内郭調査

Ⅰ区状況

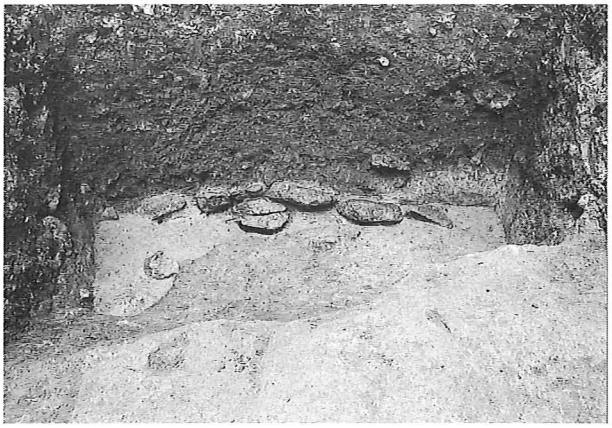


Ⅰ区状況

Ⅰ区西壁

Ⅰ区全景

Ⅰ区石垣裏込



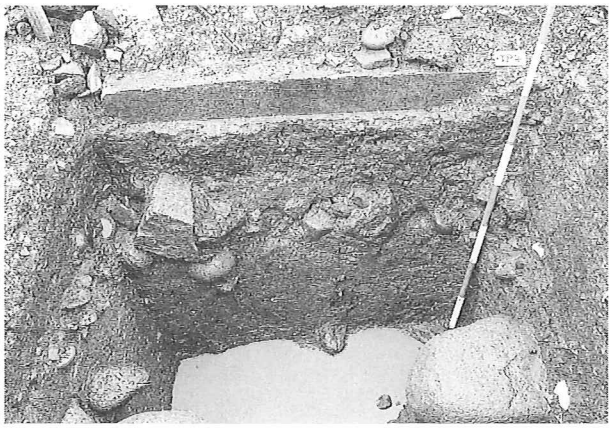
Ⅰ区東側石垣

Ⅱ区調査風景

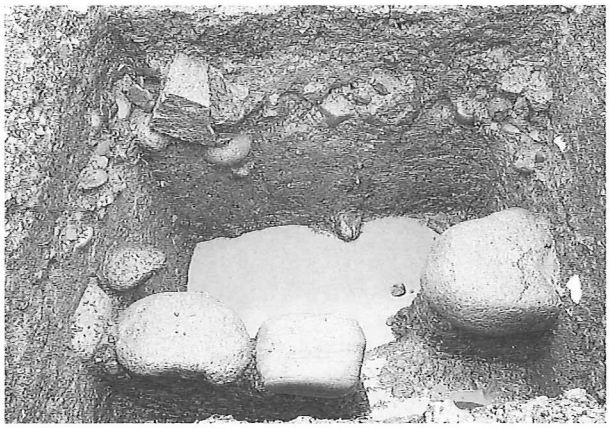
図版 8

調査風景

土　　層

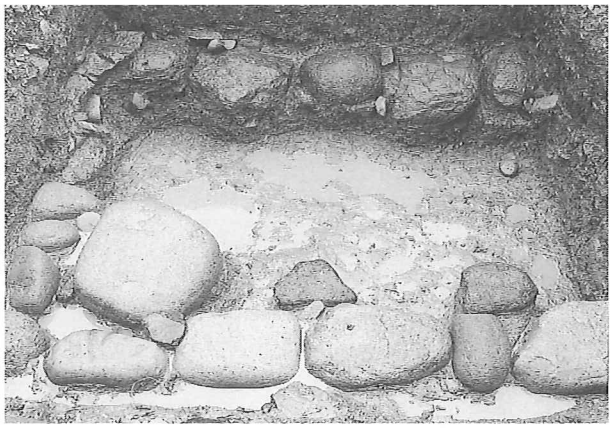


土　　層

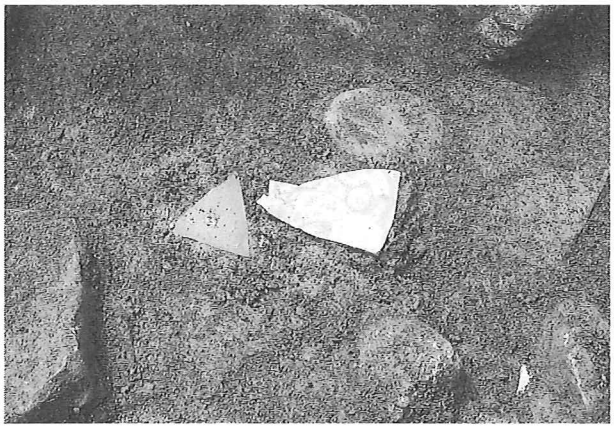


石　　列

土　　層

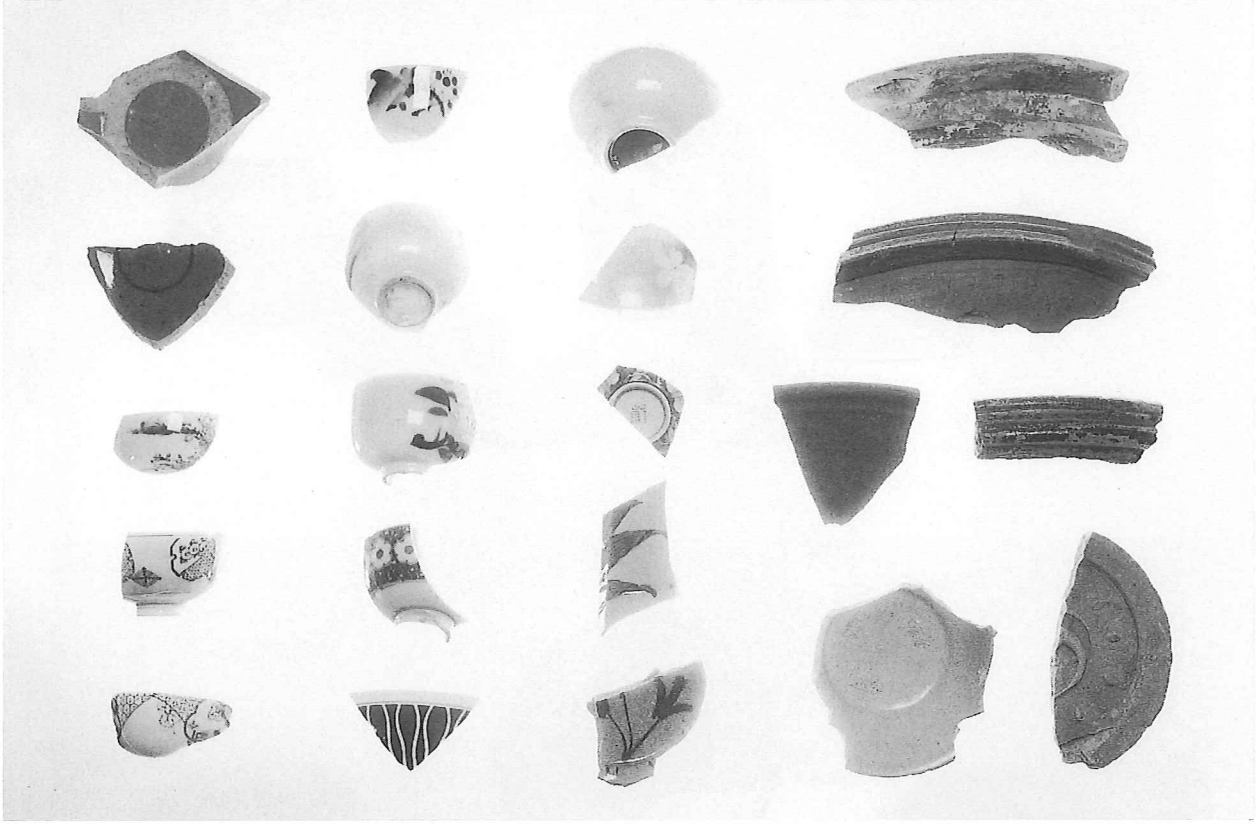


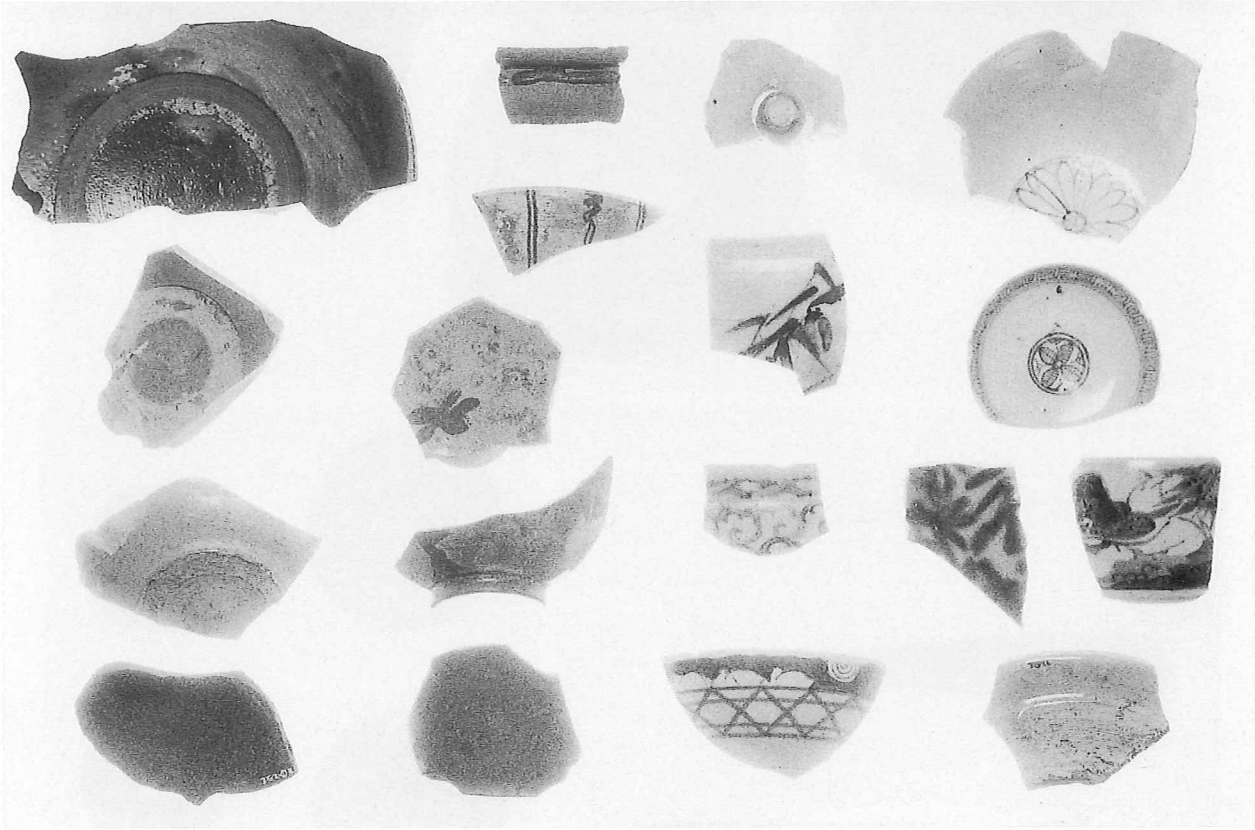
石　　列



出土遺物

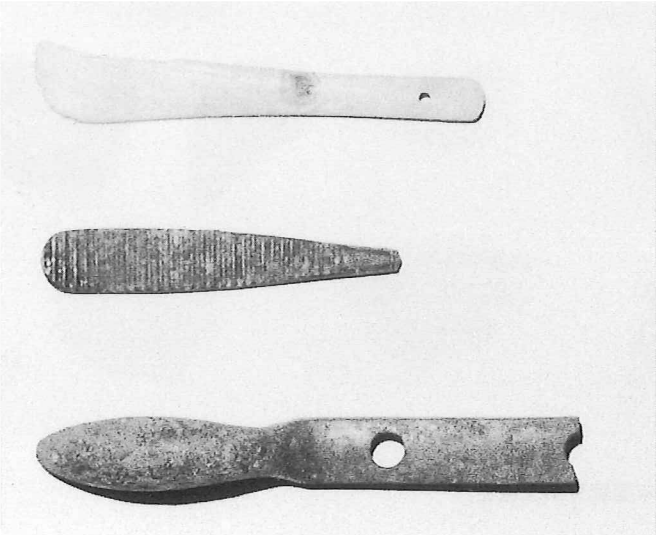
調査区全景

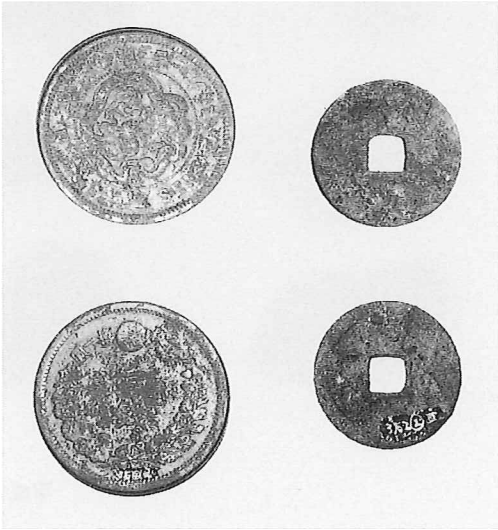




平成 9 年度調査出土遺物①

図版10

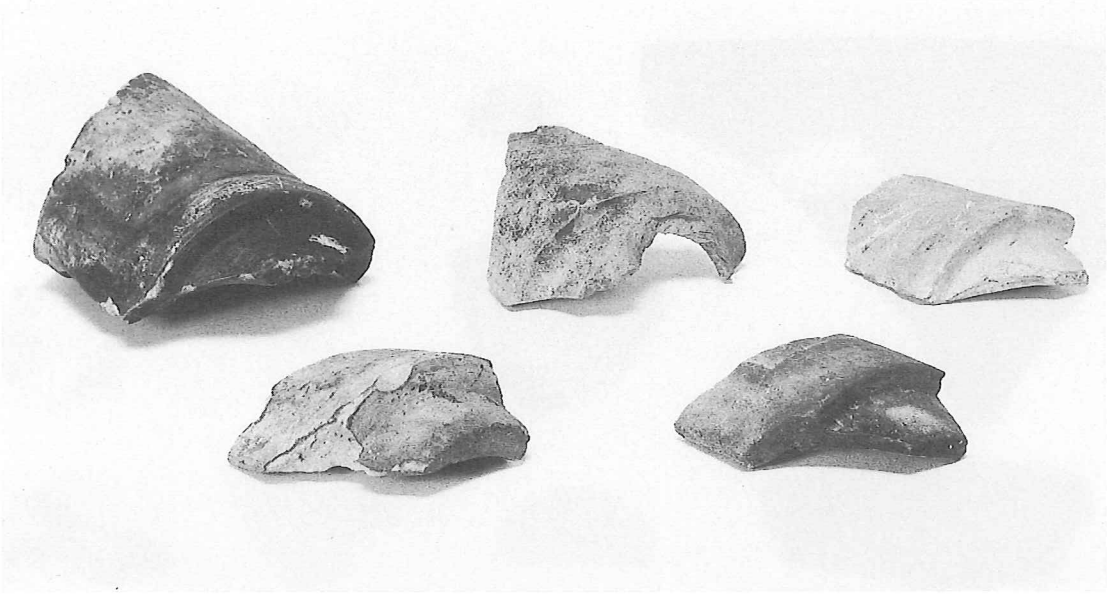


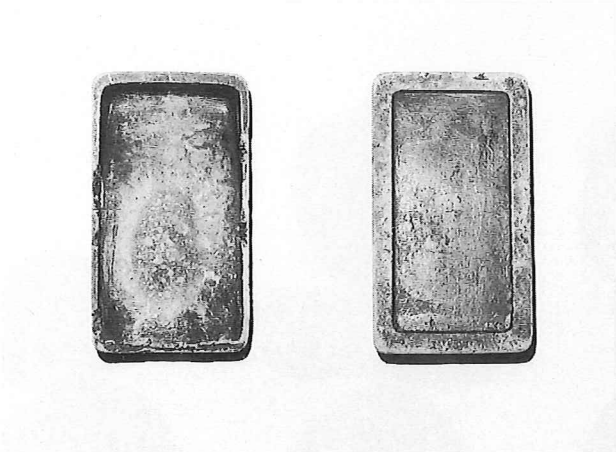


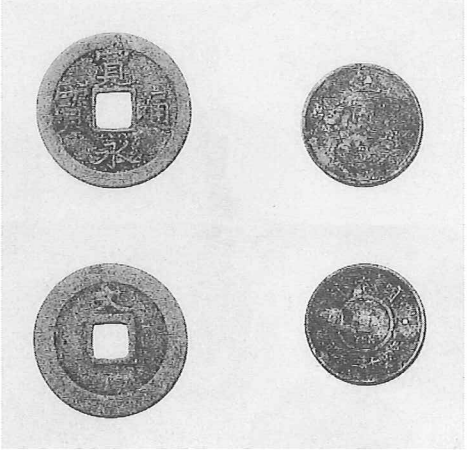
平成９年度調査出土遺物②

平成10年度調査出土遺物①

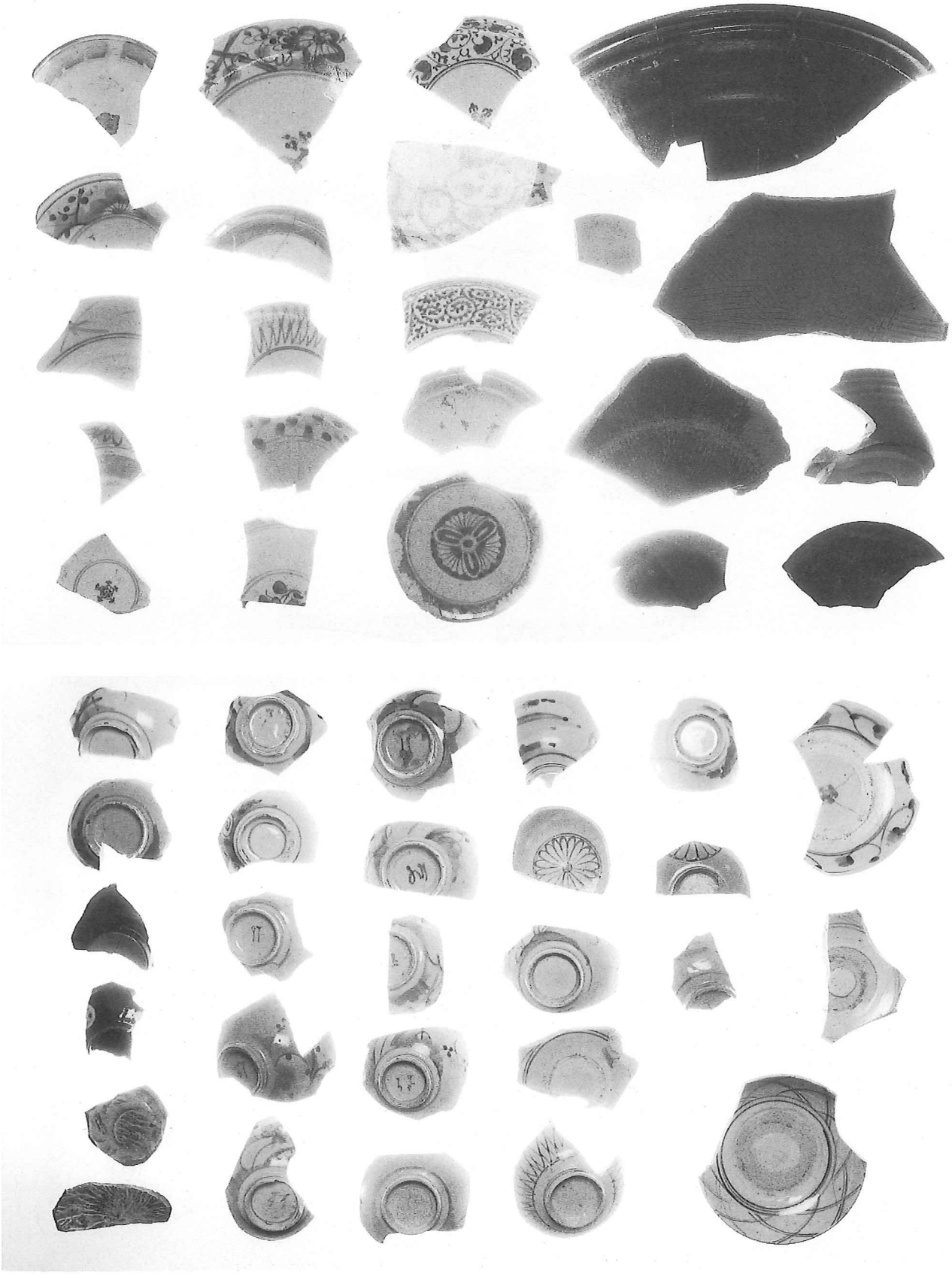
図版12





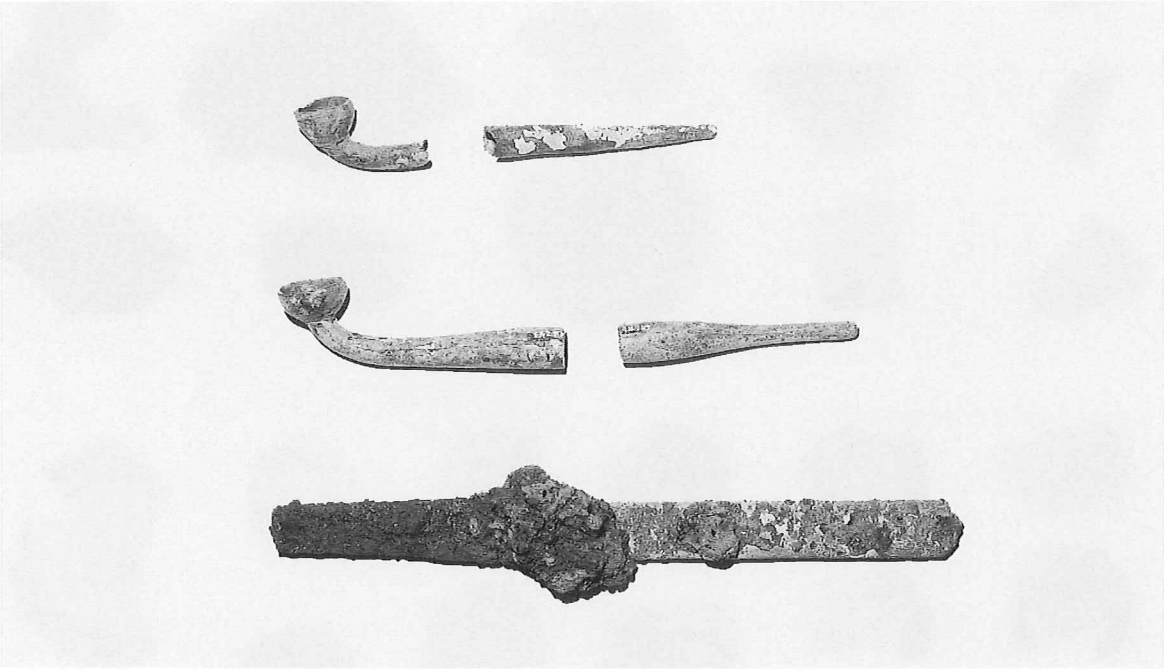


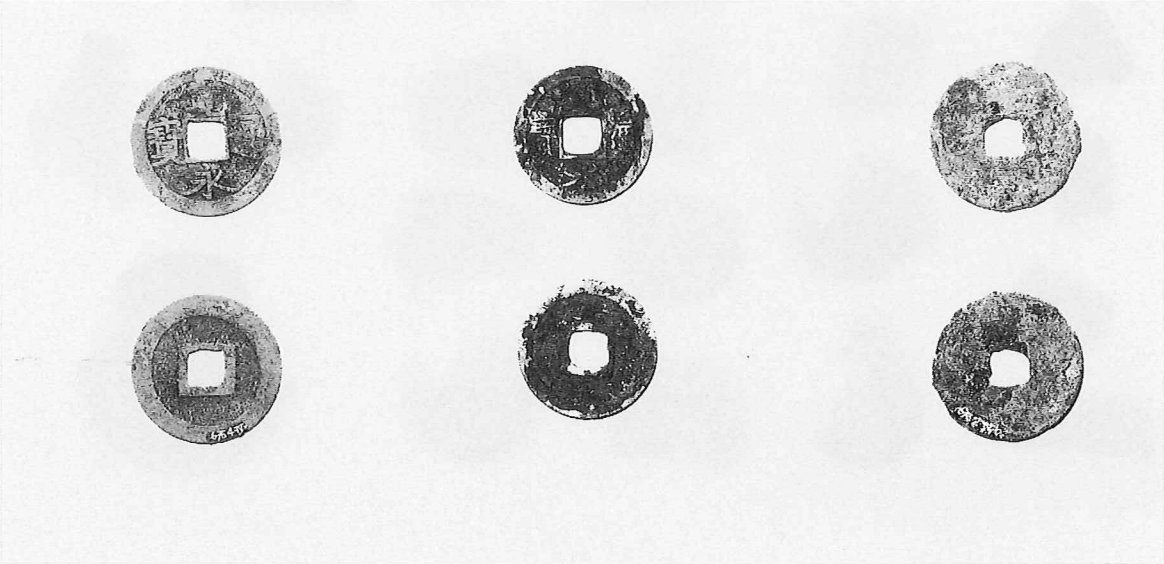
平成10年度調査出土遺物②



平成11年度調査出土遺物①

図版14





平成11年度調査出土遺物②

報告書抄録

ふりがな	いしだじょうあと
書名	石田城跡 Ⅱ
副書名	
巻次	1
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書
シリーズ番号	第163集
編著者名	町田利幸・大浦雅宏・斉藤いづみ
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850-8570　長崎県長崎市江戸町2－13　TEL（095）824－1111
発行年月日	西暦　2001年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査機関	調査面積 ㎡	調査原因
石田城跡（いしだじょうあと）	長崎県福江市（ながさきけんふくえし）	42206	047	32 41 30	128 51 0	19971117～19971219 19981126～19981218 19981214～19981225 19990621～19990629 20000306	251 650 180 26	体育館 改築工事 立会調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石田城跡	城跡	近世	各門の石垣 暗渠排水施設 内堀石垣 建物礎石	近世陶磁器 瓦 古銭 ガラス製品	

長崎県文化財調査報告書第163集

石田城跡Ⅱ

2001

発行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町2番13号

印刷　川口印刷株式会社